HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」
Author(s)	丸尾, 常喜
Citation	北海道大學文學部紀要, 35(1), 59-152
Issue Date	1987-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33509
Type	departmental bulletin paper
File Information	35(1)_PR59-152.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

丸尾常喜

私がお話ししますのは、中国の小説の歴史的変遷についてであります。多くの歴史家が、人類の歴史は進化してきたといいます。そうとすれば、中国もむろん例外ではありえません。ただ中国の進化のありさまを見てみますと、二つのきわだった現象が見られます。一つは、新しいものが現われてながくたちますと、旧いものがまたもどってくる、つまり反復です。もう一つは、新しいものが現われてながくたつのに、旧いものがいっこうにすたれない、つまり混在〔原文「雑糅」〕です。しかし、それでは進化しないのかといいますと、そうではありません。ただ比較的緩慢なために、私たちせっかちな人間から見て、たいへんまどろっこしい感じがするだけであります。文芸、文芸の一種である小説も、当然事情は同じです。たとえば今日でも、多くの作品の中に、唐代や宋代の人間、はなはだしくは原始時代の人間の思想方法の糟粕がのこっています。今日の話では、これらの糟粕にはふれないで——といいましても、それらは今でも世間にもてはやされておりますが——ともかく逆行したり、混雑したりしている作品の中から一すじの前進する脈絡を見いだしたいと思うのです。全部で六講に分けることにいたします。(1)

(1) 本篇は、一九二四年七月に西安で行われた国立西北大学、陝西省教育庁共催の夏期学校における「中国小説的歴史的変遷」と題する講演の記録である。記録稿は講演者魯迅による修訂を経たあと、『国立西北大学・陝西省教育庁合辦暑期学校講演集』二（西北

北大文学部紀要

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

大学出版部、一九二五年三月刊）に掲載された。

魯迅は、一九二〇年より北京大学、北京高等師範学校などに出講し、中国小説史を講じていた。その講義ノートはいくどか改訂を加えたのち、『中国小説史略』と題して、北京大学新潮社から出版された。上・下二巻に分けられ、それぞれ一九二三年十二月、一九二四年六月に刊行されている。

魯迅の講演は、当然『中国小説史略』にもとづき、それを六講にちぢめて、わかりやすく説いたものであるが、両者の間には若干の見解のちがいも認められ、『中国小説史略』執筆後の考察の発展を反映しているほか、魯迅の考える小説史の流れがいっそうわかりやすく述べられている。

これらの小説史叙述は、魯迅の十数年にわたる小説研究にもとづいており、基礎作業としての資料編というべきものに、次の三書がある。

『古小説鉤沈』＝秦漢より魏晋六朝にいたる古小説三十六種の逸文を捜集したもの。古い書籍目録類に著録されながら散逸してしまった古小説の姿を、『芸文類聚』、『太平御覧』、『太平広記』などの類書類にもとづいて、逸文を発掘し、できるかぎり復原しようとした。一九一二年に序文を発表したが、生前には公刊されず、一九三八年刊の『魯迅全集』にはじめて収録された。

『唐宋伝奇集』＝唐・宋の伝奇小説のうち「単篇」（一篇ずつ独立して発表され、流行したもの）のみ四十五篇を集める。諸類書にもとづいて校勘を加え、先人の編集した伝奇集（『唐人説薈』、『龍成秘書』など）の誤りを正した。巻末に作者、時代、作品の材源などについて考証した「稗辺小綴（はいへんしょうてつ）」を加える。一九二七年に上海北新書局から刊行された。

『小説旧聞鈔』＝旧籍の中から宋以後の四十一種の小説および小説史に関する記述を抜き出して編集した史料集。一九二六年に北京北新書局から刊行された。

第一講　神話から神仙伝へ

小説という名称について考えてみますと、もっとも古い例は、荘子の

小説を飾りて以て縣令を干む。
（小説を粉飾して高名や名誉を求める）

という一句に見えます。[1]「縣」というのは「高」、つまり「高名」のこと、「令」というのは「美」、つまり「美名」（原文「美誉」）のことです。ただこれは彼のいわゆる瑣細な言、つまり道術[2]にかかわりのない言葉を指していっているのであって、のちにいう小説と同じではありません。というのは、孔子、楊子、墨子のような諸家の学説[3]は、荘子から見れば、すべて小説といいうるからです。反対に、他の各家も、荘子に対して、その著作を小説と称することができるわけです。『漢書』「芸文志」になると次のような言い方が出てきます。

小説は、街談巷語の説なり。
（小説というのは、通りや横丁でとりかわされる話である）

ようやく今日の小説というものに近くなりますが、それでも昔の稗官が一般の庶民の語る簡単な話を採集して、国の民情や風俗を観察しようとしたものにすぎず、今日いう小説の価値があったわけではありません。

小説の起源はどうでしょうか。『漢書』「芸文志」は次のようにいっています。

小説家者の流は、蓋し稗官に出づ。
（小説家というものの流れは、稗官から出たものであろう）

稗官が小説を採集したという事実があったかどうか、一つの問題ではありますが、たといあったとしても、それは小説書の起源にすぎず、小説そのものの起源ではありません。[4]

訳注　魯迅「中国小説の歴史的変遷」

（1）荘子（前三六九ころ―前二八六）、名は周。戦国時代の思想家。道家の代表人物。『荘子』、現存のものは「内篇」七篇、「外篇」十五篇、「雑篇」十一篇。「内篇」は荘子の著、他は門人や後世の道家の作とされる。引用の一句は、「雑篇」の「外物」に見える。

（2）道術、ここでは道家の道、荘子のいう無為自然の道。

（3）孔子（前五五一―前四七九）、名は丘。春秋時代の思想家。儒家の創始者。『論語』は、その言行録。楊子、名は朱。生没年不詳。戦国時代初期の思想家。「為我」説を唱える。著書はのこらず、『孟子』、『荘子』その他の文献にその言論をとどめる。墨子（前四六八ころ―前三七六）、名は翟。春秋・戦国にまたがる思想家。墨家の創始者。その言行は『墨子』によって伝えられる。

（4）『漢書』＝後漢の班固（三二―九二）の著。前漢の高祖（在位前二〇六―前一九五）から平帝（在位一―五）までの歴史をしるす。「芸文志」は第三十巻の一篇で、現存する最古の図書目録。劉歆（りゅうきん）の『七略』（逸書）に刪節（さんせつ）を加えたもので、(1)六芸略、(2)諸子略、(3)詩賦略、(4)兵書略、(5)数術略、(6)方技略、の六略に分類する。

諸子略は、①儒家、②道家、③陰陽家、④法家、⑤名家、⑥墨家、⑦縦横家、⑧雑家、⑨農家、⑩小説家、の十家に分かれる。本文に引用されているのは、小説家に加えられた小序の一文で、その段落全文は次のとおりである。

小説家者の流は、蓋し稗官に出づ。街談巷語、道聴塗説者の造る所なり。孔子曰く、「小道と雖も必ず観るべき者有り、遠きを致さんとすれば、泥まんことを恐る。是を以て君子は為さざるなり」と。（小説家の流れは、稗官〔小官〕から出たものであろう。通りや横丁で話をとりかわし、道で聞いたことをそのまま道で話すような者たちのつくったものである。孔子〔正しくは子夏〕はこういっている。「小さい道といえども、きっと見どころはあるものだ。だが志高く遠方をめざす者は、そこにとらわれてしまうことを恐れる。それゆえ君子は小道に手を出さないのだ」（『論語』「子張」）、と。

「小道」は『論語』では、農業、医術、卜筮（ぼくぜい）などの技芸を指すが、班固は小説にあてはめている。このような観点に立って、彼は諸子略の総序で、「諸子十家、其の観るべき者は九家のみ」と小説一家を他の九家と切り離して、その価値を否定する。魯迅が後述するように、『漢書』「芸文志」の著録する小説は、のちにいう小説と異なった相貌をしている。しかし、小説の価値を「小道」として否定する考えは、その後の正統派知識人に一貫してひきつがれていく。魯迅は「私はどのようにして小説を書くようになったか」（一九三三年、『南腔北調集』）の中で、「中国では、小説は文学と見なされず、小説をつくる者も決して文学者とは呼ばれなかった。そのためこの道で出世しようと考える者などいなかった」と述べている。

また『漢書』「芸文志」についで正史に加えられた書籍目録に『隋書』「経籍志」、『旧唐書』「経籍志」、『新唐書』「芸文志」などがある。『隋書』「経籍志」からは、経（儒教の経典や辞典類）・史（歴史・地理・書目類）・子（経書以外の諸子百家の書）・集（文学作品類）の四部分類が用いられた。また、清の乾隆帝の勅命によって編集された「四庫全書」は、当時集められるだけの重要な書籍を網羅して四部に分類した最大の叢書であるが、各書につけられた「提要」（著者の略歴や図書の成立、内容などを記す）のみをとりだして集めたものが、『四庫全書総目提要』である。

小説に関する近人の書目には次のようなものがある。

程毅中『古小説簡目』（中華書局、一九八一年）
袁行霈、侯忠義『中国文言小説書目』（北京大学出版社、一九八一年）
孫楷第『中国通俗小説書目』（人民文学出版社、一九八二年新一版）
孫楷第『日本東京所見中国通俗書目』（人民文学出版社、一九八一年第二次印刷）
大塚秀高『中国通俗小説書目改訂稿（初稿）』（汲古書院、一九八四年）

今日では多くの文学史研究家が、小説の起源を神話に認めています。原始民族は、洞穴や野外に住んで、天地の万物がたえまなく変化し——それは風や雨や地震などですが——人間の力ではとらえがたく、てむかいがたいのを見て、たいへん不思議に思い、きっと万物を主宰するものがいるにちがいないと考えました。そうしてこの主宰者を神と名づけるとともに、神の生活や動作を想像しました。中国に盤古氏が天地を開いたという話(1)があるのは、その例です。こうして「神話」ができました。神話が進化して、物語がだんだん人間らしいものに近づいてきますと、たいてい「半神」が出現します。古来大事業をなしとげた英雄について、その能力が人間以上のものであるのは、天によって授けられたものだなどというのが、それです。簡狄が燕の卵を呑んで商を生んだ話(2)や、堯の時に「十日幷び出で」（十個の太陽が同時に出現して）、堯が羿に命じてこれを弓で射させた話(3)などは、いずれも平常の人間と異なっておりま

す。これらの伝承を、今日では「伝説」と呼んでいます。これよりさらに進化しますと、主要な事件は歴史となり、歴史にもれたものが小説となりました。

文芸作品の発生の順序としては、たぶん詩歌がさきで、小説があとであろうと、私は思います。詩歌は労働と宗教とから起こりました。その一つは、労働するとき、仕事をしつつ歌を唱いますと、労苦を忘れることができます。そこで単純なかけ声から発展して、やがて自分の意志と感情を表現するようになり、それとともに自然な曲調をともなうようになりました。二つめは、原始民族は神に対して、畏怖の感情からやがて敬仰の念が生じてきますと、その威力を称え、その功業を賞めるようになりました。これもまた詩歌の起源となりました。小説はどうかといいますと、こちらは休息から起こったと、私は考えます。人間が労働するとき、歌で自分たちをたのしませ、これを借りて労苦を忘れようとするとしますと、休息のときも、何か気ばらしになるものを求めます。それがつまり物語を語りあうことでした。そしてこの物語を語りあうことが、小説の起源となりました——したがって、詩歌は韻文で、労働から起こり、小説は散文で、休息から起こったのです。

（1）徐整『三五歴記』逸文（『芸文類聚』所引）に、混沌として鶏卵のようであった天地に盤古が生まれ、一万八千年して、天地が開きはじめ、陽清は天、陰濁は地となり、盤古は一日に九たび変化し、天は一日に一丈高く、地は一日に一丈厚く、盤古の身体は一日に一丈長くなり、一万八千年たってその極点に達したとある。徐整は三国呉の人。

（2）商は殷の始祖契（せつ）のこと。帝嚳（こく）の次妃簡狄が玄鳥（燕）の落した卵を呑んで契を生み、契が禹の治水をたすけた功によって、舜より商に封ぜられ、殷の始祖となったことは、『史記』「殷本紀」に見える。また『詩経』「商頌」「玄鳥」には「天玄鳥に命じ、降りて商を生ましむ」とある。

（3）『淮南子（えなんじ）』「本経訓」に、堯の時、十の太陽が同時に現われて草木や作物を焦がし、さまざまの怪獣が民に害を与えたため、堯は

羿に命じて太陽を射させ怪獣を殺させたので、万民はよろこび、堯を天子としたとある。

『淮南子』＝漢の淮南王劉安（前一七九―前一二二）編、武帝初期の成立。劉安のもとに集まった食客は数千人といわれ、彼らの雑多な学説、思想を編集したもの。道家的色彩がこく、神話・伝説の重要資料を含む。訳書に次のものがある。

戸川芳郎・木山英雄・沢谷昭次訳『淮南子　説苑（抄）』（中国古典文学大系、平凡社、一九七四年、「説苑」は飯倉照平訳）

楠山春樹注釈『淮南子』上、中、下（新釈漢文大系、明治書院、一九七九年、一九八二年、下未刊）

しかし古代では、小説であれ詩歌であれ、その要素はどうしても神話と切りはなすことができません。インド、エジプト、ギリシアいずれもそうですし、中国もまた同じです。ただ中国には神話を含む大きな作品というものがありません。その零細な神話すら、今なお専著にまとめられておりません。[1] 私たちがそれを求めようとしますと、古い書物の中にすこし見いだしうるにすぎないのですが、この種の書のもっとも重要なものとして、『山海経』[2]を挙げることができます。といってもこの書も体系的なものではありません。その中で後世と関係のある重要な記述に、西王母の物語があります。今その一節を挙げておきます。

玉山、是れ西王母の居る所なり。西王母はその状人の如く、豹尾虎歯にして善く嘯き、蓬髪に勝を戴す。是れ天の厲と五残を司どる。

（玉山、西王母が住んでいる所である。西王母は姿は人間のようであるが、豹のような尾をもち、歯は虎のよう、たくみに口笛を吹く。乱れ髪に玉の髪飾りをつけ、天の災害と刑罰〔五刑は墨＝いれずみ、劓＝鼻きり、刖＝足きり、宮＝去勢、大辟＝死刑〕[3]をつかさどる）

この類の叙述はほかにも少なくありません。この典故は、唐代になって驪山老母[4]にとってかわられるまでひきつづ

き流行することになります。このほかに、周の穆王が駿馬八頭立ての馬車を駆って西方に遠征した物語を述べた『穆天子伝』[5]があります。この書は、汲郡の古墳から出てきた雑書の中の一篇です――総じて中国の古代神話の資料はたいへん乏しく、のこっているものも断片的なものばかりで、長篇はありません。それは後世になって散逸したというより、もともと少なかったもののようです。私たちはここでその原因を推測してみましょう。もっとも主要な原因は二つある、と私は思います。

一、過度の労苦。中国民族はまず黄河流域に住みましたが、自然環境は決して良好ではなく、生きていくためにせっせと働かねばなりませんでした。それで実際を重んじ、空想を軽んじるようになりました。そのため神話が発達し、流伝するということができなかったのです。文芸を生む源の一つが労働であるといいましても、それには条件があります。つまり過度であってはいけません。労働と休息とがつりあっているとか、労苦を感じることが少ない場合に、はじめてさまざまの詩歌の発生が可能となります。さらにすこし余暇ができて小説を語るのです。労働がはげしすぎ、休息時間が少なく、疲労を回復する余裕がない場合は、睡眠、食事のゆとりさえないのですから、文芸など問題にならないのです。

二、忘れやすいこと。中国では古くは天神、地祇、人鬼[6]がしばしば混交し、原始的な信仰がくりかえし新しい伝説となっていきましたので、旧い伝説はすたれて、のちの人間には知りようもなくなってしまいます。たとえば神荼、鬱塁は古い大神ですが、伝説に手に葦の葉を束ねてつくった綱をもち、虎を捕縛し、魔物を圧えるとあり、古代では彼らを門神にしました[7]。ところが後世秦瓊と尉遅敬徳を門神とし、種々の事実を引いてその証拠としましたので、人々は門神といえば秦瓊と尉遅敬徳とばかり思い、神荼、鬱塁のことは忘れられました[8]。したがって彼らの物語をつく

ることなど論外となったのです。ほかにもこのような例は少なくありません。(9)

(1) 断片的な中国神話・伝説を整理し、重復や矛盾をとりのぞいて体系的な再編を試みた著作に、袁珂『中国神話伝説』上・下（中国民間文芸出版社、一九八四年）がある。同氏の前著『中国古代神話』（上海商務印書館、一九五〇年）の増訂本である。後者の翻訳に伊藤敬一、松井博光訳『中国古代神話』Ⅰ、Ⅱ（みすず書房、一九七一年新版第一刷）がある。古代神話の原文を選集し、注釈・解説を加えたものに、袁珂『古神話選釈』（人民文学出版社、一九七九年）がある。

(2)『山海経』＝中国古代の地理書。地理だけでなく、歴史、神話、民族、動植物、医薬、宗教などにわたるきわめて豊富な資料を含む。古来禹と益の著書とされてきたが、著者、成立年代ともに不詳。最初の形態は戦国時代に成ったと思われるが、漢初までに数次にわたって手が加えられている。魯迅は『中国小説史略』で「古代の巫書」であろうと述べている。代表的な注釈書に、晋の郭璞（二七六―三二四）『山海経注』、清の郝懿行（一七五七―一八二五）『山海経箋疏』があり、近人のものに袁珂『山海経校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）、同氏『山海経校訳』（上海古籍出版社、一九八五年）がある。翻訳に、前野直彬訳『山海経・神仙伝』（全釈漢文大系、集英社、一九七五年）があるほか、『抱朴子　列仙伝・神仙伝　山海経』（中国古典文学大系、平凡社、一九六九年）にも高馬三良訳が収められている。

(3)『山海経』「西山経」。

(4) 驪山老母、女仙の名。驪山姥、驪山神女などともいわれる。

(5)『穆天子伝』＝作者不詳。晋代の二七九年に汲県（今河南省）にあった戦国時代の魏の襄王の古墳が盗掘されたとき出現した古書（「汲冢書」）の一つ。この作品には穆王が征西して西王母を訪ねる記事があるが、西王母は『山海経』とちがって、優雅で礼儀正しい女王として宴席で穆王と詩の贈答を行う。後世の小説類では、西王母は美しい女神とされる。

(6) 底本の原文は「天神、地祇、人、鬼」とするが、「天神、地祇、人鬼」の誤まりであろう。「天神、地祇、人鬼」の語は『周礼』「春官」の「大宗伯」の項に見える。「祇」は地神、「鬼」は人間の亡霊。三者に百物の神（もののけ）である「物魅」（「精魅」ともいう）を加えると、古代中国の鬼神のいちおうの分類となる。

(7) 漢の王充（二七―九五）の『論衡』「訂鬼」に引く『山海経』逸文に、滄海中に度朔の山があり、その上に巨大な桃の木があっ

て三千里に枝をひろげている。その枝の東北を鬼門と呼び、多くの鬼が出入りする。そこに神荼、鬱塁の二神がおり、害をなす鬼は葦の綱でとらえ、虎に食わせる。そこで門戸に二神と虎とを描き、葦の綱をかけて悪霊を防ぐ、とある。本文に「虎を捕縛し」とあるのは誤りであろう。

(8) 秦瓊（?—六三八、字は叔宝）、尉遅敬徳（五八五—六五八、敬徳は字。名は恭）はともに実在の人物で、唐の太宗に仕えた武人。病気の太宗を警護して悪霊から守ったことから、画工に二人の絵を描かせ、門にかけさせたところ、悪霊のたたりがやんだため、以後門神とされるようになったということが、元の無名氏の『三教捜神大全』（全名『三教源流捜神大全』）に見える。

(9) 現代中国の代表的神話学者である袁珂氏の見解を参考までに挙げておこう。同氏は、中国の神話はもともとたいへん豊富であったのだが、のちに散逸して、断片的にしかのこらなかったものとする。この散逸の原因となったのが、神話の歴史化、つまり歴史家が神話を歴史に取り入れるにさいして施した合理主義的な加工である。したがって神話は、しだいに散逸をとげ、詩人、哲学者、巫（シャマン）によってわずかに保存された。しかし、詩人は彼らの修辞意識によって神話に大きな改変を加え、哲学者は彼らの思想を語るために、寓言やシンボルとしてのみ神話的形象を用いた。もっとも多く神話材料をのこしたのが巫である（袁珂氏も『山海経』を古代の「巫書」とする魯迅に同意する）。

詩の中に神話的形象をもっとも多くとどめたのは、『離騒』、『天問』などの詩人屈原（前三四〇ころ—前二七八ころ）である。中でも『天問』は、神話や歴史に関して百七十あまりの疑問をつらねた詩篇であるが、袁珂氏は屈原の時代すでに神話の歴史化が相当にすすみ、多くの神話が歴史と齟齬をきたしていたため、屈原の疑問提出となったとする（『古神話選釈』前言」など）。

また、哲学者、思想家の中で、孔子は、「怪力乱神を語らず」（『論語』「述而」）、「鬼神を敬して之を遠ざく」（同「雍也」）などの語が示すように神話的思惟や形象について語ることに対しきわめて禁欲的であった。そのため、神話的形象を比較的多くとどめているのは、『荘子』、『淮南子』などの道家系の文献である。

中国の神話には長篇がないことを述べましたが、ここでもう一度『漢書』「芸文志」に載せられた小説を見てみましょう。『漢書』「芸文志」の目録に著録されている多くの小説は、今日一種ものこっていません。[1] ただ若干逸文が存在し、見ることができます。『大戴礼』「保傅篇」に引かれている『青史子』には次のようなのがあります。

古者年八歳にして出でて外舎に就き、小芸を学び、小節を履む。束髪にして大学に就き、大芸を学び、大節を履む。居れば礼文を学び、行けば佩玉を鳴らし、車に昇れば和鸞の声を聞く。是を以て非僻の心自りて入るなきなり。……

（古代は八歳になると家より出て外舎〔小学〕にはいり、初級の技芸〔礼・楽・射・御・書・数の六芸〕を学習し、初級の礼儀を実習する。成年に達すると大学にはいり、高級の技芸を学習し、高級の礼儀を実習する。家にあっては礼節と儀礼を学習し、外出にあたっては身につけた佩玉が鳴り、車に乗るときは調和のとれた美しい鈴の音が聞こえる。こうしてまちがった心ははいりようがなくなるのである。……）

『青史子』のこのような話が、古代の小説でした。私たちから見ると、『礼記』のいっていることと同じで、これがどうして小説なのかわかりません。あるいはその中に、儒家のものと異なる多くの考えが書かれていて、それで小説と称されているのでしょうか。

今日のこっていて、漢代の小説といわれているものに、東方朔[2]の作と称されるもの二種があります。

一、『神異経』　二、『十洲記』

また班固の作とされるものに二種あります。

一、『漢武故事』　二、『漢武帝内伝』

このほかにさらに郭憲の『洞冥記』、劉歆の『西京雑記』があります。『神異経』の文章は、『山海経』を模倣したもので、述べてあることは多く怪誕の事柄です。今一節を紹介しましょう。

西南荒中に訛獣を出だす。其の状菟の如く、人面にして善く言う。常に人を欺き、東と言えば西、悪と言え

ば善、其の肉美にして、之を食えば、言真ならず（「西南荒経」）。

（西南荒に訛獣というものが出る。姿は兎のようで、人間の顔をし、人語をよく話す。いつも人間をだまし、東といえば西、よいといえばわるいことである。肉は美味であるが、食べるとうそつきになる）

『十洲記』は、漢の武帝が十洲のことを西王母に聞く話で、これも『山海経』の模倣ですが、『神異経』に比してやや荘重なところがあります。『漢武故事』と『漢武帝内伝』とは、いずれも漢の武帝の誕生から崩御・葬送までの話を述べたものです。『洞冥記』は、神仙道術および遠方の怪異のことを書いています。『西京雑記』は、人間の逸話・遺聞を記したものです。しかし、『神異経』、『十洲記』のことは、『漢書』「芸文志」に載せられていませんので、東方朔の作ではなく、後世の人間の偽作であることがわかります。『漢武故事』と『漢武帝内伝』は、文体が班固のものと異なり、また仏家の用語が混じっており――当時仏教はまだ盛んではなく、漢代の人間も仏語を用いるのをこのみませんでした――これも偽作であることが知られます。『洞冥記』、『西京雑記』についても、すでに六朝時代の作であることが考証されています――したがって上に挙げた六種の小説は、すべて仮託の作ということになります。[3]

（1）『漢書』「芸文志」の諸子略・小説家には、『伊尹説』、『鬻子説』、『周考』、『青史子』、『師曠』、『務成子』、『宋子』、『天乙』、『黄帝説』、『封禅方説』、『待詔臣饒心術』、『待詔臣安成未央術』、『臣寿周紀』、『虞初周説』、『百家』の十五種を著録する。このうち『師曠』については次の輯逸本がある。盧文弨輯注『師曠』（上海古籍出版社、一九八五年）

（2）東方朔（前一五四―前九三）、漢の武帝の側近に仕え、滑稽と機知によって諫言した。その文集は散逸したが、明人が逸文を集めた『東方大中集』一巻がある。

『神異経』＝東方朔の作とされるが偽作、六朝時代に作られた。晋の張華の注釈本が存在する（『中国小説史略』はこれも偽作とする）。地理に関する記述より異物・奇聞に関するものが多い。『十洲記』＝『海内十洲記』ともいう。十洲（八方の大海中にあり、

神仙の住むとされる十の地方）の風物を述べる。東方朔の作とするのは仮託で、六朝時代の方士の手になるものと思われる。

『漢武帝故事』＝班固の作とするのは仮託で、六朝時代の文人のつくるものとされる。『古小説鉤沈』に輯録する。前野直彬訳が、『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学大系、平凡社、一九六八年）に収められている。『漢武帝内伝』＝班固の作とするが六朝時代の偽作。『漢武帝故事』とともに、武王が西王母と会見するくだりは、『穆天子伝』にもとづく附会である。

『洞冥記』＝『漢武洞冥記』とも題す。後漢初期の郭憲（生没年不詳）の作と称するが、六朝人の仮託。

『西京雑記』＝後漢の劉歆（？―二三）の作とするのは東晋の葛洪（約二八一―三四一）の仮託である。校本に、『燕丹子・西京雑記』（古小説叢刊、中華書局、一九八五年）がある。葛洪は道教の代表的理論家、その著『抱朴子』は、道教の書、「神仙方薬、鬼怪変化、養生延年、攘邪却禍」のことを論じる。『西京雑記』は飯倉照平訳五篇が、『記録文学集』（中国古典文学大系、平凡社、一九六九年）に収められている。

以上のほかに劉向の『列仙伝』がありますが、これは本物です。晋の葛洪はまた『神仙伝』をつくりました。(1) この種の作は、唐代、宋代になるともっとふえ、後世の思想および小説にすこぶる影響をおよぼしました。(2) ただし劉向の『列仙伝』も、当時意図して小説をつくったわけではありません。神仙のことを事実と見なして書いたのです。ただ今日の眼から見ますと、小説としか思えないというだけです。

『列仙伝』、『神仙伝』中の断片的な神話は、今日でも児童の読物に多くとりいれられています。そのため、この種の神話を児童の読物にすることがはたしていいことかわるいことか、という問題が生じます。そこでついでにこの問題にふれておきましょう。反対意見は、こういう神話によってこどもを教育することは、迷信をそだてるだけで、きわめて有害である、とします。賛成側の意見は、こういう神話をこどもに教えるのは、こどもの天性に合致し、たいへん興味を感じるものであるから、何ら弊害はない、とします。私の考えでは、これには社会の教育の状況がどうな

っているかを見る必要があります。もしもこどもたちがひきつづきちゃんとした教育をうけることができるのであれば、将来科学を学ぶことによっておのずと理解し、迷信におちいることはありませんから、当然害はありません。けれども、こどもがひきつづきより深い教育をうけることができなくて、学問・知識の進歩がそれ以上ないとしたらどうでしょう。そうであれば、小さいときに教えられた神話を、ずっとほんとうのことと思いつづけることになるでしょうから、害があるかもしれません。

(1)『列仙伝』＝古代の仙人七十余人の事跡を述べる。前漢の劉向（約前七七―前六、『説苑』、『新序』などの著作がある）の作とする説には、魏・晋の間の方士による仮託とする否定論もあるが、漢代の文献に引用が見えることから、後漢の作であろうとされる。神仙伝のもっとも早い著作である。『神仙伝』＝晋の葛洪（前出）の作。八十四人の仙人の伝記。『列仙伝』、『神仙伝』ともに沢田瑞穂訳が『抱朴子　列仙伝・神仙伝　山海経』（中国古典文学大系、平凡社、一九六九年）に収められ、『列仙伝』については前野直彬訳が『山海経・列仙伝』（全釈漢文大系、集英社、一九七五年）にはいっている。

(2)『列仙伝』にはじまる神仙伝の流れは各代にわたってつづき、明の王世貞編、汪雲鵬補編の『列仙全伝』は古代から明代までの仙人五百八十一人の伝を収め、神仙伝中をもっとも豊富な内容をもつ。

第二講　六朝時代の志怪と志人

前回は、一、神話が文芸の萌芽であること、二、中国の神話はたいへん少ないこと、三、のこっている神話には長篇がないこと、四、『漢書』「芸文志」に著録されている小説はすべて失われたこと、五、現存する漢代の小説には偽作が多いこと、をお話ししました。今回は、六朝時代の小説はどうであったかを改めて見てみることにしましょう。

中国ではもともと鬼神を信じてきました。ところが、鬼神と人間とは隔てられています。この人間と鬼神との交通をもとめるところから、巫[1]が出現しました。巫はのちに二派に分かれます。一派は方士[2]、他の一派はやはり巫です。巫は多く鬼について語り、方士は多く煉金術と仙人になる方法を語りました。秦、漢以来、その風潮はしだいに盛んになり、六朝時代になってもやみませんでした。そのため志怪[3]の書が特に多いのです。たとえば『博物志』[4]には、次のような話があります。

燕の太子丹、秦に質せらる。……帰らんと欲して秦王に請う。王聴さず、謬言して曰く、「令し烏の頭白く、馬に角生ずれば、乃ち可なり」と。丹仰ぎて嘆けば、烏即ち頭白く、俯して嗟けば、馬に角生ず。秦王已むを得ずして之を遣る。……（巻八「史補」）

（燕の太子の丹が人質として秦にいたとき……帰りたいと思って秦王にたのんだ。王は聞き入れず、「烏の頭が白くなり、馬に角が生えたら、そのときは帰らせよう」と、でたらめをいった。丹が天を仰いで嘆息をつくと、たちまち烏の頭が白くなった。うつむいて吐息をもらすと、馬に角が生えた。秦王はしかたなく丹を帰国させた）

これはまったく怪誕の話で、方士の思想の影響を受けています。また劉敬叔の『異苑』[5]には、こんな話があります。

義熙中に、東海の徐氏の婢蘭忽ち羸黄を患い、而して拂拭すること非常なり。共に伺いて之を察るに、掃帚の壁角より来りて婢の床に趨るを見る。乃ち取りて之を焚く。即ち平復す（巻八）。

（東晋の義熙年間〔四〇五―四一八〕に、東海郡の徐氏の下女の蘭が突然疲れ病にかかったが、異常なほど熱心に清掃をするようになった。女の部屋をひそかにうかがっていると、帚が壁のすみから女のベッドに向かって走っていくのが見えた。そこでこの帚を焼きすてたところ、女の病気はもとどおりになおった）

これによって、六朝時代の人々がすべての物は妖怪になりうると考えていたことがわかります。これが「アニミズム」[6]といわれるものです。このような思想は、現在でも依然としてのこっています。たとえば木の上に「有求必応」（願いごとがあればかならずかなえられる）と書いた横額がかかっているのをよく見かけますが、これは社会でまだ樹木を神と見なして、今も六朝人同様の迷信にとらわれていることを証明するものです。実際にはこのような思想は、もともと昔はどこの国にでもあったもので、それがのちにだんだんすたれていったにすぎません。ところが中国では今もって盛んであるのです。

六朝志怪の小説は、今あげました『博物志』と『異苑』のほかに、干宝の『捜神記』、陶潜の『捜神後記』があります。ただ『捜神記』はかなりの部分が失われ、現存するのは、明代に各書に引用されている話を集め、他の志怪書を加えて成ったもので、半分本物半分偽物の書というべきものです。『捜神後記』の方は、これも霊異・変化のことを記していますが、陶潜の人柄の闊達さから考えて、これをつくったとは思えず、おそらく別人の仮託であろうと思います。[7]

このほかに六朝人の志怪思想の発達を助長したものが、インド思想の輸入です。晋、宋、斉、梁の四朝は、仏教が大いに流行し、多くの仏典が翻訳されましたが、それらに混じって鬼神、怪異の話も同時に紹介されましたので、この時代に中国、インド両国の鬼神・怪異が小説の中に合流して、いっそう発達することになりました。「陽羨鵝籠」[8]の話などがその例です。

陽羨の許彦、綏安山を行くに、一書生に遇えり。……路の側に臥して、脚の痛きを云い、鵝籠中に寄らんことを求む。彦以て戯言と為すも、書生便ち籠に入る。……宛然として双鵝と并び坐す。鵝も亦た驚かず。彦籠

を負いて去る。都て重きを覚えず。前行して樹下に息うに、書生乃ち籠を出で、彦に謂いて曰く、「君のために薄設せんと欲す」と。彦曰く、「善からん」と。乃ち口中より吐きて一銅盆子を出だす。中に肴饌を具う。……酒数行にして、彦に謂いて曰く、「向に一婦人の自ら随うを将いたり。今、暫く之を邀えんと欲す」と。……又口中より一女子を吐く、……共に宴に坐す。俄て書生酔いて臥す。此の女、彦に謂いて曰く、「……向に亦た窃かに一男子の同行するを得たり。……暫く之を喚ばん。……」と。……女子口中より吐きて一男子を出だす。……

(9)陽羨〔地名〕の許彦が綏安山中を旅していると、一人の書生に出会った。〔十七、八歳ばかりで、〕道傍に臥せて、脚が痛いと訴え、鵝鳥を入れてたずさえていた籠の中に入れてくれまいか、とたのむ。彦が冗談だと思っていると、書生はするりと籠の中にはいった。〔籠が広くなったわけでもない。書生が小さくなったわけでもない。〕以前からそこにいたかのように二羽の鵝鳥と並んで坐り、鵝鳥もいっこうに驚いた様子がない。彦は籠を背負って歩きはじめたが、重くなった感じはまるでない。しばらく行って木の下に休んだ。すると書生が籠から出て来て彦にいった。「お礼にささやかな宴を張りたいのですが」彦はいった。「ありがとう」書生はなんと口から銅製の箱を吐き出した。箱にはいろいろなご馳走がはいっている。……数回酒を酌みかわしたあとで、書生は彦にいった。「実はいっしょに行きたいという女を連れているのです。しばらくの間呼びだしたいのですが」〔彦はいった。「けっこうです」〕今度も口の中から一人の女を吐きだした。〔年のころ十五、六、はなやかな服に、たぐいまれなる美貌で、〕女もいっしょに宴に加わった。やがて書生が酔って横になると、女が彦にいった。「〔書生と夫婦の仲ではありますが、内心ではうらめしく思っているのです。〕私もひそかに男を同行しています。〔書生が眠りましたので、〕しばらく呼ぶことにいたしますが、〔どうか黙っていてくださいまし」〕〔彦はいった。「けっこうです」〕女は口から一人の男を吐きだした。〔年は二十三、四、これも賢そうな若者で、彦と挨拶をかわした。書生が目を覚まそうとしたので、女は口の中から錦の屏風を吐きだして男をかくした。書生は女をひきとめていっしょに寝た。男が彦にいった。「こ

の女は情はあるのですが、真心に欠けるのです。私もひそかに女を同行しています。しばらく呼んで会いたいのですが、どうかいいつけないでください」彦はいった。「けっこうです」男もまた口の中から一人の女を吐きだした。年かっこうは二十ばかり、酒を酌みかわして、久しく冗談をいいあっていたが、書生の動く気配がして、男がいった。「二人は目が覚めたようです」そして吐きだした女を口の中にもどした。まもなく書生といた女が出て来て彦にいった。「書生がやがて起きます」女はさっきの男を呑みこみ、一人で彦の前に坐った。やがて書生が起きだして来て彦にいった。「ほんのひと眠りと思ったのに、ついながくなりました。お一人で退屈されたでしょう。日もおそくなりました。お別れしなくてはなりません」そうしてその女を呑みこみ、器や皿をすべて口の中におさめ、二尺ほどの広さの大きな銅皿をのこし、彦に別れを告げた。「何もありませんが、記念におとりください」)

このような思想は、中国にもとからあったのではなく、完全にインドの思想の影響を受けています。[10] このことからも、六朝の志怪小説が、インドとどのような関係があったか、そのあらましがわかります。ただし六朝人の志怪は、おおむね今日の新聞記事のごときもので、当時の人々に小説をつくろうという意図があったわけではありません。このことは知っておいていただきたいと思います。[11]

(1) 巫はシャマンのこと。神霊・精霊・死霊などと直接的交渉を行う職能者。彼らによって行われる卜占・予言・治病・祭儀などの行為をシャマニズムという。「巫覡」という場合、巫は女、覡は男を指す。

(2) 不老長生の術や仙人となるための仙丹、煉金術などを修める者たちの総称。道教の道士の前身となる。

(3) 「志怪」の「志」は「誌」に同じ、記録するの意。六朝期の志怪小説集に、祖台之『志怪』、孔約『志怪』(ともに逸書。『古小説鉤沈』に逸文を収める)などが存在することから、当時すでに「志怪」の概念が成立していたことがわかる。また東陽無疑『斉諧記』(逸書)、呉均『続斉諧記』(後出)の名にとられた「斉諧」は、『荘子』「逍遙遊」に見える「斉諧は、怪を志す者なり」に出る。斉諧は書名とも人名ともいわれる。

(4)『博物志』＝晋の張華（二三二―三〇〇）の作。山川地理、歴史、人物、草木虫魚、鳥獣、神仙方技などに関する知識・伝説を記す。怪誕なものが少くない。原書は散逸し、現存のものは後人の捜輯によるもの。校本に范寧『博物志校証』（古小説叢刊、中華書局、一九八〇年）がある。

(5)『異苑』＝宋（劉宋）の劉敬叔（三九〇―四七〇）の作。神怪変異のことを記す。前野直彬訳が『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学大系、前出）に収録。

(6)「アニミズム」、原文「万有神教」。今日の中国では「万物有霊論」と訳されている。

(7)『捜神記』＝晋の干宝（生没年不詳）の作。干宝は歴史家で『晋紀』の著があるが散逸した。『晋書』「干宝伝」には、「古今の神祇の霊異、人物の変化を撰集し、名づけて『捜神記』と為す。凡て三十巻」とある。「人物の変化」とは、人間や動植物の変化の意。当時の民間説話を多く含むのも大きな特色である。三十巻の原書は散逸し、後人が逸文を輯録した八巻本、二十巻本の二種のテキストが存在するが、二十巻本が原形に近いとされている。二十巻本の校本に、汪紹楹校注『捜神記』（古小説叢刊、中華書局、一九七九年）、翻訳に竹田晃訳『捜神記』（東洋文庫、平凡社、一九六四年）がある。八巻本は、清水栄吉・志村良治・荘司格一訳が『中国古小説集』（世界文学大系、筑摩書房、一九六四年）に収められている。

『捜神後記』＝志怪小説。晋の詩人陶潜（淵明、三六五―四二七）の作と題されるが、南北朝人の仮託。校本に、汪紹楹校注『捜神後記』（古小説叢刊、中華書局、一九八一年）、翻訳は前野直彬訳が『六朝・唐・宋小説選』（前出）に収められている。

(8)「陽羨鵝籠」は梁の文人呉均（四六九―五二〇）の志怪小説集『続斉諧記』中の一篇。

(9)〔　〕内は、原文の省略部分を補って訳出した。

(10)『中国小説史略』は、「陽羨鵝籠」が漢訳仏典『観仏三昧海経』、『旧雑譬喩経』に見える説話の影響を受けていることを指摘する。

(11)以上のほかに重要な志怪小説集として一点を補っておく。『幽明録』＝宋（劉宋）の劉義慶（四〇三―四四四）の作。劉義慶は皇族の一人で、臨川王に封ぜられる。文学を愛好し、幕下に多くの文人が集まった。『世説新語』（後出）も彼の作。『幽明録』の原書は散逸したが、『古小説鉤沈』が二六五篇の逸文を輯録する。

六朝志怪小説の日本語訳は前掲のもの以外にも次の書に収められている。

前野直彬・尾上兼英他訳『幽明録・遊仙窟他』（東洋文庫、平凡社、一九六五年）

北大文学部紀要

訳注　魯迅「中国小説の歴史的変遷」

高橋稔・西岡晴彦訳『六朝・唐小説集』（中国の古典、学習研究社、一九八二年）

六朝時代の志怪小説は、以上述べたとおりです。そこで次に志人小説[1]についてお話しすることにしましょう。六朝志人小説もたいへん簡単なもので、志怪とあまり変わりません。宋の劉義慶のつくった『世説新語』[2]を、その代表と見なすことができます。今一、二例あげてみましょう。

阮光禄剡に在りて、曾て好車有り。借る者皆給せざるなし。人の母を葬るもの有り。意に借らんと欲するも敢えて言わず。阮後に之を聞き、嘆じて曰く、「吾に車有りて人をして敢えて借らざらしむ。何をか車を以て為さん」と。遂に之を焚く（巻上「徳行篇」）。

（阮光禄が剡県にいたころ、立派な車を持っていた。借りに来る者があると誰にも快く貸していた。母の葬いをすることになった者が、内心借りたいと思いながらいいだせなかった。阮光禄はあとでそのことを聞き、嘆いていった。「車をもっていながら、人にいいだしにくい気持を起こさせるとは。こんなことで車をもっていたとて何になろう」そして車を焼いてしまった）

劉伶恒に酒を縦にして放達なり。或るとき衣を脱ぎて裸形にて屋中に在り。人見て之を譏る。伶曰く、「我は天地を以て棟宇と為し、屋室をもって幃衣と為す。諸君何すれぞ我が幃中に入る」と（巻下「任誕篇」）。

（劉伶はいつも大酒を飲み、豪放で物にこだわらぬ人間であった。あるとき服を脱ぎ、裸で家の中にいた。人がそれを見て非難した。伶はいった。「わたしは天地を家にし、家を腰巻にしているのだ。諸君はどうしてわしの腰巻の中にはいってくる」）

これが晋人の気風というものです。今日の私たちの眼から見れば、阮光禄が車を焼いたことや、劉伶[3]の豪放ぶりは、

いささか奇怪な感じを受けますが、晋人にとってはべつに奇怪なことではありませんでした。なぜなら当時奇矯な行動と玄妙な清談が尊重されていたからです。このような清談は、漢の清議の流れを汲むものです。漢末の暗黒政治に遭遇して、名士たちはさかんに政治について議論し、最初その社会的な勢力はなかなかのものでしたが、のちに権力者の憎しみを受け、だんだん殺される者が出てきました。たとえば孔融、禰衡はともに曹操に謀殺されました。[4] そのため晋代になると、名士たちは政治を議論することを恐れるようになり、もっぱら玄妙な哲理を語るように変ってしまいました。清議でありながら政治を語らず、かくして清談となったわけです。だがこれら清談の名士たちは、当時の社会ではまだなかなかの勢力をもっており、玄談ができなければ、名士たる資格がないかのごとくでした。そして『世説』という書は、名士の教科書のごときものであったわけです。

『世説』より早く、『語林』や『郭子』がありましたが、今では散逸してしまいました。[5] しかし『世説』そのものが、後漢から東晋にいたる間の古い文章を集めてできたものです。のちに劉孝標が『世説』に注を加えました。その注に引く古書の数はゆうに四百数種を数え、しかもその多くが今日見ることのできないものですので、後世この『世説』をいっそう珍重するようになり、今でもたいへん広く読まれているわけであります。

（1）志人小説、志人は志怪に対する語。「軼事小説」（軼事は逸事に同じ）という語が用いられることもある。

（2）『世説新語』＝宋の劉義慶（前出）の作。劉義慶と幕下の手で編まれた。徳行、言語、政治、文学、識鑑（人物の鑑識）、夙恵（小さいときから聡明であること）、豪爽、賢媛、任誕（物事にとらわれない気ままさ）、汰侈（奢侈）、簡傲（細かい点に気をくばらず傲慢なこと）など三十六門に分けて、士大夫たちの言行、逸事を記す。梁の劉孝標注。最初『世説』、唐代には『世説新書』と呼ばれ、五代以後『世説新語』とよばれる。

校注本に次のものがある

余嘉錫『世説新語箋疏』（中華書局、一九八三年）
徐震堮『世説新語校箋』上・下（中国古典文学基本叢書、中華書局、一九八四年）
また、川勝義雄・福永光司・村上嘉実・吉川忠夫訳が『中国古小説集』（世界文学大系、筑摩書房、一九六四年）に、森三樹三郎訳が『世説新語・顔氏家訓』（中国文典文学大系、平凡社、一九六九年）に収められているほか、次の翻訳がある。
目加田誠注釈『世説新語』上・中・下（新釈漢文大系、明治書院、一九七六、七八年）
竹田晃訳『世説新語』上・下（中国の古典、学習研究社、一九八三、八四年）

（3）劉伶、晋の文人。「酒徳頌」の作がある。阮籍（二一〇―二六三）、嵇康（二二四―二六三）、山濤（二〇五―二八三）、向秀、阮咸、王戎とともに、竹林につどって宴を開き、清談にふけったので、「竹林の七賢」と称される。『世説新語』は、「竹林の七賢」の逸話を多く伝えている。

（4）孔融（一五三―二〇八）、後漢の人。文章にすぐれ、「建安七子」の一人。禰衡（一七三―一九八）、後漢の人。孔融の友人。孔融、禰衡、「竹林の七賢」ら魏・晋の文人たちの生き方や運命については、魯迅に「魏晋の風度および文章と薬および酒の関係」（一九二七年、『而已集』）と題する有名な講演がある。

（5）『語林』＝晋の裴啓の作。『郭子』＝晋の郭澄之の作。ともに逸書、『古小説鉤沈』に逸文を輯録する。

このほかに、魏の邯鄲淳の作である『笑林』があります。これも『世説』よりも早いものです。『笑林』の文章は、『世説』より質朴ですが、今ではこれも散逸しました。けれども、唐代、宋代の類書に引かれた遺文によって、すこし見ることができます。[1] これも、一例をあげてみることにいたしましょう。

甲、父母在り。出学して三年にして帰る。舅氏その学びて何の得る所ぞと問い、幷せて父と別ること久しきを序ぶ。乃ち答えて曰く、「渭陽の思いは、秦康に過ぐ」と（秦康の父母は已に死せり）。既にして父之を数む。「爾の学ぶ、奚の益やある」と。答えて曰く、「少くして過庭の訓を失う。故に学ぶも益なし」と（『太平広

記』二百六十二)。

(甲の父母は健在だった。甲は遊学して三年後に帰って来た。母方のおじが、勉強してどのような収穫があったか、とたずね、父親とながく離れていて恋しかったであろうといった。すると甲は、「渭陽の思いは、秦康以上でした[2]」と答えた(秦康の父母はすでに死んでいた)。あとで父親がしかりつけると甲はいった。「小さいときに庭の訓え[3]を受けそこないました。それで勉強しても無益なのです」)

この例から『笑林』の内容が、おおむね滑稽の話にほかならぬことがわかります。

上にあげました『笑林』、『世説』の二種のジャンルは、どちらもその後格別の発達はありませんでした。模倣するだけで、発展がなかったからです。たとえばもっともよく読まれた『笑林広記』は、いうまでもなく『笑林』の一派ですが、『笑林』の話が多く人間の知識に関する滑稽であるのに対し、『笑林広記』になりますと、人間の身体に関する滑稽に堕しています。もっぱら卑しい言葉で身体の欠陥を笑いものにし、軽薄にわたることが多く、そのため滑稽の味わいもずっと落ちてしまいました[4]。『世説』の方は、後世の模倣者はもっと多く、劉孝標の『続世説』[5]——『唐志』[6]に見えます——から、清の王晫(おうたく)のつくる『今世説』[7]、近人易宗夔(えきそうき)の書いた『新世説』[8]などにいたるまで、いずれも『世説』を模倣したものです。しかし、晋の時代と現代の社会の状況はまったく異なります。今でもなおそのころの小説を模倣しようというのは、たいへんおかしなことです。

なぜならば、私たちは漢の末期から六朝という時代が、簒奪(さんだつ)の時代で、四海騒然として、多くの人が厭世思想を抱いていたことを知っています。加えて、仏教と道教とが盛んになり、どちらも現世からの超脱を説き、晋代の人々がまずその影響を受けました。そこで神仙術を修め、飛昇登仙を願い、ために薬を飲むことをよろこぶ一派の人々が現

れました。他の一派の人々は、つねに酔郷に遊んで、世事から遠ざかろうと考え、ために酒を飲むことをこのみました。薬を飲みますと――晋人が飲んだ薬で、私たちが知っているものに五石散があります。五種類の薬石を配合したもので、猛烈な効き目があります――身体がいつもほてって、古い着物を着ている方がいい――これは新しい服ですと、皮膚がこすれて破れるからです――それにけっして洗いませんので、しらみがふんだんにわきます。それで、「しらみをとりながら談ず」[9]というわけです。一方酒を飲む者は、肉体の外に放浪し、酔生夢死の状態になります――これが晋代の社会の状況でした。現代に生きている人間が、当時とは社会の状況がまったく異なるのに、当時の社会状況が生みだした小説の模倣をしようというのでは、笑い話ではありませんか。

(1)『笑林』＝魏の邯鄲淳の作。逸書。『古小説鉤沈』に逸文二十九条を輯録。

(2)「渭陽の思い」(原文「渭陽之思」)、『詩経』「秦風」「渭陽」の故事にもとづく語。秦の康公が渭陽(渭水の北岸の地)で母の弟である重耳(晋の文公)を送るにさいし、今は亡き母を思いつつ送別の詩を詠んだことより、渭陽の思いは亡き母への思いをいう。現存の父への思いに用いるのはふさわしくない。

(3)庭の教え(原文「過庭之訓」)、『論語』「季氏」に、孔子の子伯魚が庭を通るとき、二度にわたって父親から教えを受けたとある故事から出た語。略して「庭訓」ともいう。

(4)『笑林広記』＝清代に編まれた笑話集。遊戯主人纂輯と題す。八百二十七篇を収める。その内容については、『笑府』から採って妄りにこれを改竄したものが大部分で、新増の分はほとんどみな品のわるい猥褻なものばかりで読むにたえない」(松枝茂夫訳『全訳笑府』上・下〔岩波文庫、一九八三年〕解説)といわれる。『笑府』は、明の墨憨斎主人撰。墨憨斎は馮夢龍(後出)の筆名。五九九篇の笑話を収める。中国では早く散逸し、日本に現存。そのため当時魯迅の目にはいらなかったものと思われる。

中国笑話集として次のものがある。

王利器輯録『歴代笑話集』(上海古籍出版社、一九八一年新一版)

王利器・王貞珉選注『中国古代笑話選注』(北京出版社、一九八四年)

わが国で翻訳された中国の笑話集としては次のものがある。

松枝茂夫・武藤禎夫訳『中国笑話選――江戸小咄との交わり』（東洋文庫、平凡社、一九六四年）

松枝茂夫訳『歴代笑話選』（中国古典文学大系、平凡社、一九七〇年）

馮夢龍撰、松枝茂夫訳『全訳笑府』上・下（前出）

（5）『続世説』＝逸書。『旧唐書』「経籍志」、『新唐書』「芸文志」に著録。ただし、程毅中『古小説簡目』（前出）は、劉孝標『続世説』と題するのは劉注『世説』の誤りであろうとし、『続世説』は、梁の劉峻撰とする。

（6）『唐志』は『旧唐書』「経籍志」の略称。『漢書』「芸文志」、『新唐書』「芸文志」も、それぞれ『漢志』、『新唐志』と略称する。

（7）王諲（一六三六―？）、清代初めの人。

（8）易宗夔、北洋政府期に国務院法制局局長に任じたことがある。『新世説』は一九一八年刊。

（9）「しらみをとりながら談ず」（原文「捫蝨而談」）、晋の王猛（三二五―三七五）が、桓温（かんおん）の入関にさいして、粗末な衣服を着たまま面会し、当世の事を談論したが、しらみをとりながら話して、傍若無人であったと伝えられる。

以上述べましたように、六朝時代の人々は、べつに小説をつくろうと意図してつくったのではありません。彼らにとって鬼のことも人間のことも同じで、みな事実とみなしていました。そのため『旧唐書』「芸文志」[1]は、志怪の書を小説の中に入れず、歴史の伝記類に著録しています。宋代の欧陽修にいたってはじめて小説の中に分類されました[2]。しかし志人小説の方は、六朝時代には、志怪小説より重視されていました。といいますのは、こちらは名声を得ることと非常に関係が深かったからです。たとえば当時の地方の学者たちが名を成そうとしますと、彼らは必ず名士を訪ねなければなりませんでした[3]。晋朝であれば、王導、謝安といった人物を訪れなければなりません。これが「ひとたび龍門を登れば、身価十倍す」[4]といわれるものです。だがこれらの名士と話をしようと思えば、彼らの好みに合わせることができなければなりません。そして彼らの好みに合わせようとするなら、『世説』、『語林』の類を読まないわ

けにはいかないのです。

こういう話があります。当時、阮宣子が太尉王夷甫に会ったとき、夷甫が老・荘のちがいについてたずねましたところ、宣子が、「将毋同」と答えましたので、夷甫は非常に敬服して、彼を官にとりたてました。これが世にいう「三語の掾」であります(5)。ただ、「将毋同」の三字は、いったいどういう意味でしょうか。ある説は、「殆んど同じからず」（同じではないというにちかい）という意味だといい、ある説は、「豈に同じからざらんや」（同じでないことがあろうか）という意味だといいます(6)――いずれにしろ、どちらともいえる、渺茫漠然とした言葉にすぎないのです。この種の渺茫とした言いまわしを学びたければ、『世説』を読まなければなりません。

（1）『旧唐書』「芸文志」とあるのは、『旧唐書』「経籍志」が正しい。

（2）欧陽修（一〇〇七―一〇七二）、北宋の文学者、歴史家。散文にすぐれ、「唐宋八大家」の一人。「古文運動」の定着に貢献した。『新唐書』「芸文志」は欧陽修が執筆した。

ここで、これまでに挙げられた主な作品の分類の変遷を、程毅中『古小説簡目』（前出）前言にならって表示すると、次のようになる。

書名	隋書経籍志	旧唐書経籍志	新唐書芸文志	四庫全書
山海経	史部（地理）	史部（地理）	史部（地理）	子部（小説・異聞）
穆天子伝	史部（起居注）	史部（起居注）	史部（起居注・実録）	子部（小説・異聞）
神異経	史部（地理）	史部（地理）	子部（道家）	子部（小説・異聞）
海内十洲記	史部（地理）	史部（地理）	子部（道家）	子部（小説・異聞）
漢武故事	史部（旧事）	史部（故事）	子部（故事）	子部（小説・異聞）

漢武帝内伝	史部（雑伝）	史部（雑伝）	子部（道家）	子部（小説・異聞）
洞冥記	史部（雑伝）	史部（雑伝）	子部（道家）	子部（小説・異聞）
西京雑記	史部（旧事）	史部（雑伝）	子部（故事・地理）	子部（小説・異聞）
博物志	子部（雑家）	子部（小説）	子部（小説）	子部（小説・瑣記）
異苑	史部（雑伝）			子部（小説・異聞）
捜神記	史部（雑伝）	史部（雑伝）	子部（小説）	子部（小説・異聞）
続斉諧記	史部（雑伝）	史部（雑伝）	子部（小説）	子部（小説・異聞）
世説新語	子部（小説）	子部（小説）	子部（小説）	子部（小説・雑事）
笑林	子部（小説）	子部（小説）	子部（小説）	逸

（3）王導（二七六―三三九）、晋の人。元帝に信頼されて丞相となり、元帝、明帝、成帝の三帝に仕え、太傅にいたる。謝安（三二〇―三八五）、晋の人。桓温に請われて司馬となるが、桓温が簒奪をくわだてて安をおびかすも動ぜず、桓温の計画は失敗に帰した。以後晋の重臣として王導に比せらる。官は太保にいたり、死後太傅に追補された。

（4）「ひとたび龍門を登れば、身価十倍す」（原文「一登龍門、則声価十倍」）、李白の「与韓荊州書」中の語。「龍門」は黄河の水の急激に下る地帯の地名、数千の大魚が集まるが、のぼることができない、のぼった魚は龍となるといわれる。「登龍門」で名士の引立てによって声望が高くなることをいう。

（5）『世説新語』「文学」中の逸話。掾は副官。王夷甫がたずねたのは、老荘と聖教（孔子の教え）との異同についてであり、「老・荘のちがい」をたずねたとするのは誤り。

（6）吉川幸次郎「六朝助字小記」（『吉川幸次郎全集』第七巻所収）によれば、「将無」（「将毋」）は、判断に余裕をおくさいに下される助字で、（1）あらかじめ焦点をきめておいて、しかしそれはおおよそのことだと焦点をぼかす、（2）はっきりした焦点を定めずに、ぐるりから絞りあげていって、焦点はおおよそこのへんだと、模索する、という二面を持つ語とされる。

第三講　唐の伝奇文

小説は、唐代になって一大変遷をとげました。前回述べましたように、六朝時代の志怪と志人の文章は、いずれもごく短いもので、しかも事実の記録と見なされていました。唐代になると、それが意識的に小説をつくるようになったのです。このことは、小説史上の一大進歩ということができます。それだけではなく、文章も長くなり、曲折に富んだ描写もできるようになって、それまでの簡古な文体とはたいへん異なるものとなりました。文体の点から見ても一大進歩ということができます。

だが、当時の古文をつくる人々は、これを読んでたいへん不満で、それらを「伝奇体」と呼びました。「伝奇」の二字は、当時実はけなしていった言葉で、現代の人々が考えるような「伝奇」ではなかったのです。(1) しかしこの種の伝奇小説も、今ではほとんど逸書となってしまいました。わずかに宋初の『太平広記』――この書は小説の一大類書ということができ、六朝から宋初にいたる小説を捜集してできたものです――この書の中に、私たちは唐代の伝奇小説のあらましを見ることができます。(2)

唐の初期に、王度（おうたく）のつくった『古鏡記』という作品があります。王度が、彼の手に入れた一枚の神鏡がひきおこす不思議な出来事について述べたものです。文章は長いのですが、ただ多くの不思議を綴りあわせただけの構成で、まだ六朝志怪のスタイルを脱け出ていません。(3) このほか作者不明の『白猿伝』という作品があります。梁の将軍欧陽紇（こつ）が遠征して長楽にいたり、深い渓谷にはいったさい、妻を白い猿にさらわれてしまいます。やがて救いもどすことが

できますが、のちに妻の生んだ男子は、「その状猿に似たり」というものです。紘はのちに陳の武帝に殺されますが、その子の欧陽詢は、唐初にたいへん名声のあった人物で、顔が猿に似ていましたので、彼をきらう者がこの伝記をつくったのです。(4) 後世の小説を利用して他人に攻撃を加えるやり方が、当時すでに行われていたことがわかります。

武則天〔在位六九〇―七〇五〕の時代になって、張鷟の『遊仙窟』が現れます。彼が長安から河湟方面への旅の途中、道中で日が暮れて一軒の家に宿を乞いますと、その家に十娘、五嫂という二人の女性がいて、彼のために酒宴を張り、詩歌管弦の遊びを尽くすといったことを述べたものです。話はさほど複雑ではありませんが、駢体文を用いて書かれています。駢文で小説を書くということは、それまでになかったことで、一種特別の作品に数えることができます。後世になって清の陳球の『燕山外史』が駢文で書かれていますが、作者は駢体を用いて小説を書くのは、自分が新機軸を出したものだと考えています。実は早く張鷟に始まっていることを知らなかったのです。しかし『遊仙窟』は中国では早くに失われました。ただ日本にだけは現存しています。といいますのは、張鷟は当時たいへん文名の高かった文人で、外国人が中国にやって来ますと、つねに大金をもって彼の文章をもとめました。これも当時そのようにして持ち出されたものの一つかもしれません。実際には彼の文章は軽佻で、さほどすぐれたものではなく、ただ筆調がすこしく活発であるにすぎません。(5)

(1)「伝奇」の語を貶語として用いた例は、北宋の范仲淹の「岳陽楼記」を同時代の尹師魯が「伝奇体にすぎぬ」と批判したことが、『後山詩話』に見える（筆者陳師道は、これに対して范の文章がどうして伝奇と同日に論ぜられようと述べる）。「伝奇」の語がはじめて見えるのは、晩唐の裴鉶のつくる小説集『伝奇』である。元の陶宗儀の『輟耕録』に、「唐に伝奇あり、宋に戯曲、唱諢、詞説あり……」とあり、一つのジャンルの名として用いられているが、ジャンルとして「伝奇」の名を用いるようになったのは、

裴鉶の書名にもとづくものであろう。また、明代の長編戯曲（南曲）も「伝奇」と呼ばれるため、区別して「唐伝奇」、「明伝奇」と呼ぶこともある。

（2）『太平広記』＝全五百巻。宋の太宗の勅命によって李昉（九二五―九九六）らが編んだ。引用書は四七五種におよぶ。内容別に神仙、道術、方士、夢、鬼、狐など九十二類目に分類して配列する。現行の活字本に、『太平広記』全十冊（中華書局、一九六一年新一版）がある。

（3）『古鏡記』＝『太平御覧』は、隋の王度（五八一？―六一八？）の作とする。王度は唐初の詩人王績の兄。しかし王度は作中の人物で、必ずしも作者ではないとする説もある。

（4）『白猿伝』＝『新唐志』では『補江総白猿伝』と題するが、作者不詳。補江総は江総の作品を補足する意。江総は六朝末より隋にかけて名高い文人であるが、仮託であろうとされる。欧陽詢（五五七―六四一）は、隋に仕えて太常博士となり、唐では弘文館学士にいたる。書家としてすぐれる。類書『芸文類聚』の編者の一人。

（5）『遊仙窟』＝中国の諸目録には著録されていない。日本に存するテキストには、「寧州襄楽県尉張文成作」と題されている。文成は張鷟（六六〇―七三二？）の字。初唐期の流行作家の一人。他に隋・唐の故事・遺聞を集めた『朝野僉載』の著がある。駢文は、漢、魏に成立し六朝期にさかえた美文体。全篇対句を用い、声調、韻律を配慮する。四字、六字の対句を用いるものは四六文（四六駢儷体）と呼ばれ、唐代にもっとも盛行した。『蕘山外史』＝清の陳球作の才子佳人小説。

『遊仙窟』は日本では古くからよく読まれ、山上憶良「沈痾自哀文」に引用が見られるほか、大伴家持の「夢の逢は苦しかりけり、覚きて掻きさぐれども手にも触れねば」は作中の描写を借りたものとされる。翻訳は、前野直彬訳が、『幽明録・遊仙窟』（東洋文庫、前出）、『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学大系、前出）に収められているほか、次のものがある。

八木沢元訳『遊仙窟全講』（明治書院、一九六七年）

張文成作、漆山又四郎訳注『遊仙窟』（岩波文庫、一九四九年第一刷、一九八六年第二刷）

唐も開元（七一三―七四一）、天宝（七四二―七五五）以後になりますと、作者が輩出し、様子が一変します。それまでは小説を軽蔑していた者たちまでが、小説をつくりはじめるようになりました。これは当時の社会環境と関係があり

ます。唐代では、科挙の試験のさいに、「行巻」というものがたいへん重視されました。受験生たちは都へやって来ますと、まず自分の会心の詩作を巻子に写して、当時の有名人に拝謁に出かけます。もしそれが賞讃を受ければ、「声価十倍し」て、及第の望みが開けます。そのため、この行巻がきわめて重視されたわけです。開元、天宝以後になりますと、しだいに詩が倦まれる傾向が出てきました。すると小説を行巻の中に入れる者が現れ、しかも名声を得たりする者が出てきました[1]。そこで以前は小説に不満であった者たちが、さかんに小説を書くようになり、そのため伝奇小説が一時隆盛をきわめるようになりました。

大歴年間〔七六六―七七九〕に、まず沈既済の『枕中記』が現われます――この書はたいへんよく読まれ、知らない者はほとんどいないほどですが――内容はおよそ次のとおりです。盧生という若者が、邯鄲へ行く街道沿いの茶店で自分の不遇をなげいていますと、たまたまやって来た呂翁という道士が枕を一つ授けます。盧生がその枕を敷いて眠りますと、夢の中で清河県の崔氏の娘を娶ることになります――清河の崔氏は名門ですので、清河の崔氏から嫁を取ることも、たいへん名誉なことなのです――同時に彼は進士に合格し、その後とんとん拍子に出世をつづけて、尚書兼御史大夫にまでいたります。数年してさらに中書令に補せられ、燕国公に封ぜられます。のちに年老いて身体がおとろえ、床につくようになりますが、やがて息絶えて死にます。夢の中で死ぬと、眼が覚めます。覚めてみると、鍋の中の粟飯はまだたきあがっていなかった、そんなつかのまのことだったのです――これはむやみに出世にはやってはいけない、功名富貴に対してもっと淡泊でなければならないという寓意をこめたものです[2]。後世になって、明の湯顕祖がつくった『邯鄲記』、清の蒲松齢のつくった『聊斎』中の「続黄粱」は、いずれもこの『枕中記』にもとづいたものです[3]。

このほか有名な作家に陳鴻という人がいます。彼と彼の友人白居易は、安史の乱〔七五五―七六三〕を経て、楊貴妃が死に、美人のすでに黄土に帰した古事をしのび、傷ましさにたえず、白居易が『長恨歌』をつくり、彼が『長恨歌伝』をつくりました。[4] この伝の影響は後世におよび、清人の洪昇の戯曲『長生殿』は、これをもとにしたものです。[5] 当時もう一人有名なのが、白居易の弟白行簡で、『李娃伝』という作品があります。話は、滎陽の名門の子弟が、長安に出て来て、妓楼通いにおぼれ、貧困と病気に倒れ、ついに挽郎に身をおとします――挽郎というのは死者の出棺のときに棺を挽く者のことで、同時に挽歌も唱わねばならないのですが――のちに李娃に救われ、彼女に励まされて勉学につとめ、ついに科挙に合格して、参軍となる、というものです。行簡の文章はもともとすぐれたものですが、李娃をめぐるストーリィのはこびにも、纏綿として見るべきものがあります。[6] この作品も後世の小説[7]に大きな影響を与えました。たとえば、元人の『曲江池』、明の薛近兗の『繡襦記』は、いずれもこれを種本としています。[8]

さらに唐人の小説は、あまり鬼や妖怪のことを語りません。ままあっても、色どりに添えたにすぎません。しかし、短篇集の一部には、なお鬼や妖怪のことを多く述べた作品があります。これはやはり六朝人の影響を受けているのです。牛僧孺の『玄怪録』、段成式の『酉陽雑俎』、李復言の『続玄怪録』、張読の『宣室志』、蘇鶚の『杜陽雑編』、裴鉶の『伝奇』など、みなそうです。しかし、畢竟唐代の人の作品ですから、六朝のものよりずっと曲折に富み、ずっと美麗です。[9]

（1）宋の趙彦衛の『雲麓漫鈔』によれば、行巻に伝奇が採り入れられるようになったのは、伝奇がいろいろのジャンルの文体を含み、「史才、詩筆、議論」を見ることができるからであるという。

（2）『枕中記』＝沈既済（七五〇ころ―八〇〇）の作。既済は経史の学に長じ、左拾遺、史館修撰に任じ、のち礼部員外郎にまでのぼ

った。わが国の謡曲『邯鄲』はこの作品に取材する。この作品のほかに、狐が女性に変じ、ついに愛をつらぬいて人間の男に殉じたことを述べた『任氏伝』がある。

(3)『邯鄲記』＝明の湯顕祖（一五五〇―一六一六）作の戯曲（伝奇）。湯顕祖の作には、他に『南柯記』（後出）、『牡丹亭還魂記』などがある。『聊斎』＝清の蒲松齢の文言小説（後出）。

(4)『長恨歌伝』＝陳鴻（生没年不詳）の作。『長恨伝』ともいう。元和元年（八〇六）に書かれた。陳鴻は貞元二一年（八〇五）の進士。官は尚書省礼部主客郎中にいたる。『長恨歌』＝白居易（七七二―八四六）作の長詩。詩と散文とが一組となる形体はしばしば用いられたが、これは当時民間に行われた韻文・散文互用の説唱文学（「変文」）の影響を受けたものとされる。

(5)『長生殿』＝清の洪昇（一六四五―一七〇四）作の戯曲（伝奇）。

(6)『李娃伝』＝白行簡（七七六―八二六）作。行簡は白居易の弟。貞元末年の進士、左拾遺、司門院外郎、主官郎中などを歴任。李公佐（後出）とも友人であった。他に『三夢記』の作もある。「妓楼通いにおぼれ」とあるのは、盧生が妓女李娃のもとに寄宿し、金銭をいれあげたこと。追い出されたあと、乞食にまで身をおとした盧生は、後悔した李娃に救われた。

(7) 底本の注釈は、「小説」は「戯曲」の誤りであろうとする。

(8)『曲江池』＝元の石君宝作の雑劇。『李亞仙花酒曲江池』と題す。『綉襦記』＝明の薛近兗作の伝奇。一説では明の徐霖作とする。

(9) 唐代伝奇ははじめ「単篇」（一篇ずつ単行のテキスト）として読まれたが、のちに「専集」（短篇集）としてつくられるようになる。これらの作品はその代表的なものである。『玄怪録』＝牛僧孺（七八〇―八四八）の作。牛僧孺は、貞元元年（七八五）の進士、穆宗（在位八二一―八二四）、文宗（在位八二七―八四〇）のとき、二度にわたって宰相をつとめた。『幽怪録』とも題される。校本に、程毅中点校『玄怪録・続玄怪録』（古小説叢刊、中華書局、一九八二年）がある。『酉陽雑俎』＝前集二十巻、続集十巻。奇習・呪術・鬼神・妖怪・草木・魚介・夢・音楽など多岐にわたる遺聞・逸事を集める。作者段成式（?―八六三）は、太常少卿に任じたことのある文人、生前、詩は李商隠、温庭筠と並び称される。校本に、『酉陽雑俎』（中華書局、一九八一年）、校訂・訳注本に、今村与志雄訳注『酉陽雑俎』1～5（東洋文庫、平凡社、一九八〇年～八一年）がある。『続玄怪録』＝李復言（七七五―八三三）の作。李復言は、蘇州刺史、嶺南節度使などに任じた。『続幽怪録』とも題される。校本については『玄怪録』の項参照。『宣室志』＝張読（生没年不詳）の作。張読は大中年間（八四七―八五九）の進士。牛僧孺の外孫。礼部侍郎、尚書左丞などに任

ず。校本に、『独異志・宣室志』（古小説叢刊、中華書局、一九八三年）がある。『杜陽雑編』＝蘇鶚（生没年不詳）の作。蘇鶚は光啓年間（八八五―八八八）の進士。校本に、『杜陽雑編』（上海古典文学社、一九五八年）がある。『伝奇』＝裴鉶（生没年不詳）の作。裴鉶は統符五年（八七八）に成都節度副使に任じている。輯注本に、周楞伽輯注『裴鉶伝奇』（上海古籍出版社、一九八〇年）がある。

唐の伝奇の作者には、今まで述べました以外に、後世への影響がもっとも大きく、特に注意すべき人物が、二人おります。その一人は、作品は多くないのに、影響が大きく、また有名な人物、すなわち元微之[1]です。もう一人は、作品が多く、影響も大きいのに、後世においてあまり有名でない人物、すなわち李公佐[2]です。今彼ら二人を分けてお話することにいたしましょう。

一、元微之の作品　元微之、名は稹で、詩人として白居易とならび称されます。彼のつくった小説は、『鶯鶯伝』一篇だけです。張生と鶯鶯のことを述べたもので、みなさんたいていご存じですから、私がこまかくお話する必要はないでしょう。微之の詩や文はたいへん有名ですが、この伝奇は格別傑出したものではありません。まして作品の最後の部分、張生が鶯鶯を捨て去るところで、彼に「……徳以て妖孽に勝つに足らず。是を用て情を忍ぶ」（私の徳の力ではこの災の種を制御することはむずかしい。そこでわが恋情を抑えたのだ）などといわせています。過ちを粉飾して、ほとんど弁解にちかい文章です[3]。しかし後世多くの戯曲がこの作品をもとにして生れました。金の董解元の『弦索西廂』――今日の『西廂』は演劇ですが、これは弦楽器の伴奏で唱うものです――元の王実甫の『西廂記』、関漢卿の『続西廂記』、明の李日華の『南西廂記』、陸采の『南西廂記』……などなど、たいへん多くの戯曲が、みなこの『鶯鶯伝』に源を発しています[4]。ただ原作の『鶯鶯伝』のストーリィとはやや異なる点があります。それは張生と鶯鶯とのあいだが最後には結局団円（ピー・エンド）となる点です。

これは中国人の国民心理がたいへん団円（ハピー・エンド）が好きで、それでどうしてもこうなってしまうのです。おそらく人生の現実の欠陥を、中国人といえども知らないわけではないでしょう。しかしそれを口に出していいたくないのです。なぜならいったん口に出しますと、「どのようにしてこの欠点を救うか」という問題が発生します。悩んだり、改良しようと努力したりしなければならないかもしれない。そうなると事が面倒になります。中国人は、面倒な目に会ったり、悩んだりすることがあまり好きではありません。今もし小説の中で人生の欠陥を述べますと、読者に不愉快な思いをさせることになるでしょう。それでおよそ歴史の上で団円しなったことは、いつも小説の上で団円を与えてやります。報われなかった者は、報われるようにしてやる。たがいに騙しあうわけです——これはまことに国民性にかかわる問題であります。

二、李公佐の作品　李公佐については、従来知っている人は少ないのですが、彼の書いた小説はたいへん多いのです。ただ今日では四篇しかのこっていません。

㈠、『南柯太守伝』　この作品がいちばん有名ですが、次のような話です。東平の淳于棼（じゅんうふん）の邸の南に一本の大きな槐（えんじゅ）の樹がありました。ある日棼が酒に酔って東の廊下で眠っていますと、夢の中に二人の紫色の服を着た男が現れ、彼を大槐安国（だいかいあんこく）に連れて行きます。彼はそこで招かれて駙馬（国王の女婿）となり、南柯郡の太守として赴任します。治績もあがって、棼はしだいに官位も高くなっていきます。のちに檀蘿国（だんらこく）が攻めて来て彼は兵を率いてむかえ討ちますが、戦に敗れ、ついで公主（国王の娘）も死に、かくて送りかえされることになります。目覚めてみると、それは刹那の夢でありましたが、まるで一生を過ごしたような気持です。大きな槐のところへ行って見ますと、蟻の巣穴があって、蟻たちがあわただしく出入りしているところです。大槐安国、南柯郡というのは、ここにあったのです。この作

品の本意は、『枕中記』とほとんど同じです。ただその結末に悠々たる余韻があって、『枕中記』の及ぶところではありません。のちに明の湯顕祖が『南柯記』をつくりますが、これもこの物語を発展させたものです。

(二)、『謝小娥伝』　一篇の筋は、謝小娥の父親と夫とは、広く世間をわたり歩いて商いをする商人でしたが、盗賊に殺されます。小娥の夢に現れた父親が、仇は「車中の猴、東門の草」だと告げます。また夫も仇が「禾中を走る、一日の夫」であると告げます。誰もその謎を解くことができませんが、のちに李公佐が「車中の猴、東門の草」は「申蘭」の二字であり、「禾中に走る、一日の夫」は「申春」の二字であると解き明かします。その後はたしてこれによって賊を捕らえることができた、というものです。謎解きによって賊を捕らえるというのはたいした趣向ではありませんが、このような構想は後世の小説にたいへん大きな影響をのこしました。たとえば李復言はこの作品に改変を加えて『続玄怪録』に入れています。「妙寂尼」と題する一篇です。[5] 明代にはこれにもとづいて平話をつくりました。[6] 他に『包公案』の話の中にも、これに類するものがたくさんあります。[7]

(三)、『李湯』　この物語は、楚州の刺史李湯が、漁師が亀山のふもとの河中に大きな鉄の鎖のあるのを見つけたという知らせを聞き、人間や牛の力で引き上げてみますと、大波が起こり、それとともに真白い歯と金色の爪をした猿に似た怪獣が、岸に躍り上がってきます。見物の者たちが逃げだしますと、怪獣は鉄の鎖をひきずって水中にもどり、二度と出て来なかった、というものです。李公佐は、怪獣は淮河と渦河の水神無支祁であり、「力は九象に適り、搏撃、騰踔、疾奔し、軽利、倏忽たり」(力は九匹の象もかなわず、搏撃し、跳躍し、疾走し、その動作は軽快、迅速であった)、大禹が庚辰に命じてこれを圧えさせ、頸に大きい鎖をつないで、淮陰の亀山のふもとに移し、淮河を鎮めたのだと、解説します。[8] この作品の影響も大きいものでした。

私は、『西遊記』の孫悟空はこの無支祁の同類だと思います。しかし、北京大学教授胡適之先生は、これをインド伝来のものと考えています。[9] ロシア人スティール・ホルスタイン教授もかつてインドにも同様の物語があると述べました。[10] しかし私は次のような理由で、孫悟空はやはり無支祁を継承したものだと考えます。

(1)、『西遊記』の作者は仏典を読んでいない。

(2)、中国語に訳されたインドの経論中にこれと同類の話は存在しない。

(3)、作者――呉承恩――は唐人小説に明るく、『西遊記』の中にも唐人小説の影響を受けたところが少くない。

もっとも胡適之先生は、李公佐自身がインドの伝説の影響を受けているとお考えのようで、この点については、今のところ私はその当否について述べることはできません。[11]

(四)、『廬江馮媼』　この作品は筋が簡単で、文章もたいしてよくありません。ここではお話しなくともよろしいでしょう。

唐人小説が描いたことは、のちにそっくり戯曲の中に移し入れられました。「紅線」、「紅拂」、「虯髯」[12]……など、もとはといえばみな唐の伝奇に出るもので、演劇によって間接的にひろく社会に伝えられ、今日の私たちに知られているわけです。伝奇自体の流れは、唐の滅亡とともに絶えてしまいました。[13][14]

(1) 元微之（七七九―八三一）、名は稹、微之は字である。十五歳で明経科に及第。校書郎、左拾遺、監察御史など歴任、穆宗のとき宰相となるが、翌年同州刺史に左遷、最後は武昌節度使として死す。白居易とならび称され、「元白」の詩風は「元和体」と呼ばれた。『鶯鶯伝』のほかに、白行簡『李娃伝』と組みあわされた詩『李娃行』の作があったが伝わらない。

(2) 李公佐（七七〇?―八五〇?）、進士出身であるが、官位は高くならなかった。江西従事、揚州府録事参軍などに任ず、白行簡と親しく、『李娃伝』は李公佐のすすめによって書かれた。『南柯太守伝』は貞元十三年（七九七）の作（一説に貞元十八年）。

(3)『鶯鶯伝』の概略は次のおりである。

張生は蒲郡の普救寺に逗留したおり、同寺に身を寄せていた崔家の未亡人とその家族の危難を救ったところから、崔氏の娘鶯鶯を知り、心を奪われる。張生が鶯鶯の侍女紅娘のはからいで、自分の思いを詠みこんだ詞をとどけると、深夜の訪れを待つ意をほのめかす詞が返って来る。張生は月夜に塀を越えて、鶯鶯を訪ねる。すると彼女は意外にも身じまいを正して現れ、よこしまな行いをつつしんでくださるよう、忠告するために呼んだのだと告げると、身を翻して奥に消える。ところが、落胆していた張生のもとに彼女の方からしのんで来て、逢瀬を重ねるようになる。やがて張生は科挙受験のために上京し、落第したために、次回を期して都にとどまる。鶯鶯からねんごろな手紙がとどき、友人の元稹が「会真詩」と題する長詩で彼らのことをうたったため、二人のことは都に広く知られるようになった。しかし張生の心はそれきり彼女から離れてしまう。その後結婚した張生が出張のおり、これもすでに嫁した鶯鶯に面会をもとめるが、彼女は姿を見せない。かわりにとどいた手紙には、「眼前の人をあわれめ」と書いてあった。

この作品は、元稹自身の若いときの体験に取材したものとされる。本文中に引用されているのは、なぜ鶯鶯を捨てたのかと問われて答えた張生の語。この世のすぐれた女性は、自分自身を滅ぼすか、男を滅ぼすかの災いの種であって、自分にはそれを制御する力はないというもの。世間では張はよく若気の過ちを正したと評価したとある。

李紳（七七二―八四六、元和元年〔八〇六〕の進士、武宗のとき宰相となる）に、この作品と組みあわせた詩『鶯鶯歌』の作があった（『全唐詩』李紳詩巻四に収める）。

(4)『弦索西廂』＝『西廂記諸宮調』とも『西廂搊彈詞』とも、作者の名を冠して『董解元西廂記』ともいわれる。董解元（生没年不詳）は金代の人。解元は科挙受験者の通称。諸宮調はいくつかのメロディ（宮調）をつないで一人が語り唱う説唱文学の一。宋、金、元代に流行した。『西廂記』、『続西廂記』＝ともに元雑劇（元曲）。王実甫（生没年不詳）、関漢卿（生没年不詳、『董娥冤』、『拝月亭』などの作がある）、ともに元雑劇の代表的作者。

『南西廂記』＝李日華（生没年不詳）、陸采（一四九七―一五三七）、ともに明代の劇作家。『南西廂記』はいずれも『西廂記』を明伝奇（南曲）と呼ばれる長篇戯曲に改作したもの。

(5)「妙寂尼」＝『太平広記』は『続玄怪録』に出づとするが、校本『玄怪録・続玄怪録』（古小説叢刊、前出）では『玄怪録』の方に

収める。

(6) 凌濛初『初刻拍案驚奇』(後出)に収める「李公佐巧解夢中言、謝小娥智擒船上盗」(「李公佐巧みに夢中の言を解き、謝小娥智もて船上の盗を擒にす」)と題する一篇。なお「平話」とあるのは、ここでは「白話小説」の一般的な呼称。

(7)『包公案』=後出。

(8)『李湯』=一名『古岳瀆経』。李公佐が太湖の包山の霊洞に入り発見した仙書『古岳瀆経』によって、怪獣の正体が無支祁であることがわかったという設定である。『古岳瀆経』は『山海経』のもじり(瀆はみぞ、四瀆で長江・黄河・淮水・済水を指す)。

(9) 胡適之(一八九一―一九六二)、名は適、適之は字である。今日『中国章回小説考証』(実業印書館、一九四二年。上海書店、一九八〇年影印)に収められている一連の論文は、魯迅『中国小説史略』とともに中国古典小説に対する近代的研究の基礎をつくった。ここでとりあげられているのは「西遊記考證」(一九二三年改稿)の説。「私はこの神通力広大な猿が中国産ではなくて、インド渡来のものではないかという気がしてならない。無支祁の神話といえどもインドの影響を受けて模倣したものではないか、と。……私は鋼和泰博士(Baron A. von Stael Holstein)の指摘にしたがって、インドの最古の叙事詩ラーマーヤナ(Ramayana)の中にハヌマーン(Hanuman)をたずねあてた。これらがおそらく斉天大聖の後ろ姿といえよう」と述べる。

(10) スティール・ホルスタイン、ロシアの亡命貴族、北京大学で古代インド宗教学およびサンスクリット語を講じた。

(11) 中国固有説、インド渡来説を含めて、孫悟空の形象の形成については、中野美代子『孫悟空の誕生――サルの民話学と「西遊記」』(玉川大学出版部、一九八〇年)を見られたい。

(12)「紅線」、袁郊(生没年不詳、唐の文宗のときの進士か。虢州刺吏、翰林学士などに任ず)の『甘沢謡』(原本散逸)中の一篇「紅線」の女主人公。潞州節度使薛嵩の召使で、主人の危難を救った女俠。明の梁辰魚(一五二一?―一五九四?)の雑劇『紅線女』の種本となった。

「紅拂」、「虯髯」、ともに杜光庭(八五〇―九三三、道士、僖宗のとき召見されて禁中に入任。王建が前蜀を建てたとき金紫光禄大夫となる)の作『虯髯客伝』中の人物。紅拂は李世民(唐の太宗)を助けて唐の建国に功績のあった李靖を無官のころ見そめて行をともにした妓女。虯髯は李靖を援助した俠客。李靖、紅拂、虯髯の三人を「風塵三俠」と称す。明の張鳳翼(一五二七―一六一三)に伝奇『紅拂記』がある。

(13) 唐代伝奇を集めたものには、魯迅『唐宋伝奇集』のほか、次のものがある。

汪辟疆校録『唐人小説』(古典文学出版社、一九五五年、一九七八年新版。一九二九年刊の原本に原編者が増訂を加えたもの)

張友鶴選注『唐宋伝奇選』(人民文学出版社、一九六四年、一九七九年第二次印刷)

徐士年選注『唐代小説選』(中州書画社、一九八二年)

王汝濤他選注『太平広記選』上・下(斉魯書社、一九八〇年、八一年)

翻訳には、吉川幸次郎氏による魯迅『唐宋伝奇集』の選訳が『中国古小説集』(世界文学大系、前出)に収められているほか、次のものがある。

前野直彬訳『六朝・唐・宋小説選』(中国古典文学大系、前出)

前野直彬訳『唐代伝奇集』1・2(東洋文庫、平凡社、一九六三、六四年)

内田泉之助・乾一夫訳『唐代伝奇』(新釈漢文大系、明治書院、一九七一年)

高橋稔・西岡晴彦訳『六朝・唐小説集』(中国の古典、前出)

(14) 六朝時代の文学と唐代伝奇との継承関係について、魯迅はのちに次のように述べている。

「六朝人も想像や描写をすることができなかったわけではありません。ただ彼らは小説ではやりませんでした。その種の文章も、当時小説とはいいませんでした。たとえば阮籍の「大人先生伝」や陶潜の「桃花源記」は、実際はのちの唐代伝奇文と近く、嵇康の『聖賢高士伝贊』(……)や葛洪の『神仙伝』も、唐人伝奇文の祖師と見なすことができます。李公佐が『南柯太守伝』を作り、李肇(りちょう)が贊を書いたのは、嵇康の『高士伝』にならったものであり、陳鴻の『長恨伝』が白居易の長歌「長恨歌」の前に置かれ、元稹の『鶯鶯伝』の中に「会真詩」が収められ、李公垂「李紳」の「鶯鶯歌」の名をあげて結びとしているのは、「桃花源記」のことを思いださずにはおれません」(「六朝小説と唐代伝奇文とにどのような違いがあるか――文学社の問に答える」、一九三五年、『且介亭雑文二集』)

李肇の贊とは、「貴は禄位を極め、権は国都を傾くるも、達人これを視ば、蟻の聚まれると何ぞ殊ならんや」の四句で、「南柯太守伝」の最後に置かれている。

第四講　宋人の「説話」とその影響

前回、伝奇小説は唐の滅亡とともに絶えてしまったと申しました。宋代にも伝奇をつくる者はおりましたが、大きくちがってしまいました。といいますのは、唐人がおおむね同時代のことを描いたのに対し、宋人はほとんど昔のことを語っているのです。唐人の小説は教訓が目立ちませんが、宋になると教訓が多くなります。おそらく唐代は言論が比較的自由で、同時代のことを書いても、筆禍を招くことはなかったのに、宋代になるとタブーがしだいにふえ、そのため文人たちはそれを避けようとして、昔のことを語るようになったのでしょう。[1] 加えて、宋代は理学が隆盛をきわめ、したがって小説も多く理学化されてしまい、教訓を含まない小説は価値のないものと考えられました。[2] しかし文芸の文芸たる所以は、価値を教訓に置くことではありません。もし小説を修身の教科書にしてしまったら、もはや文芸とはいえません。宋人も伝奇をつくっているのに、私が伝奇は絶えたと申したのも、そういう意味からです。

けれども宋の士大夫たちも小説に対して功労がないわけではありません。それは『太平広記』を編集したという点にあります。この書は漢から宋代初期までの瑣細な記録や小説を捜集し、あわせて五百巻、小説の集大成ともいうべきものです。だがこれも彼らの自発的な仕事ではなく、政府が召集してやらせたものです。宋初は、天下が統一され、国内も太平となりましたので、海内の名士を招き、俸禄を厚くして、書籍の編修をさせました。『文苑英華』、『太平御覧』、『太平広記』[3]は、このとき成ったものです。これは政府の目的としては、この事業を利用して、名士たちをとりこみ、そのことによって彼らが政治に異を唱えるのを防ごうとしたにすぎず、もとより文芸に意のあってのこと

ではありません。しかし意図せずして、私たちのために古小説の森林をのこしてくれることになったのです。創作の面では、宋代の士大夫は何の貢献もありませんでした。しかしこの時代、社会にもう一つ別種の平民の小説が勃興してきて、これにとってかわりました。この種の作品は、体裁が異なるばかりではなく、文章の面でも改革が起こり、白話を用いるようになりました。したがってまことに小説史上の一大変遷であるわけです。といいますのは、当時一般の士大夫は理学を重んじ、小説を蔑視しましたが、一般の人民はやはり娯楽をもとめていたのです。平民の小説が起こったのは、何ら怪しむに足りないことであります。

宋は汴(べん)(4)に都を建てましたが、民の生活は安定し、物資も豊富で、したがって娯楽も多く、市街地には伎芸(5)というものが行われました。この伎芸の中にいわゆる「説話」が含まれています。「説話」は、次の四科に分れます。

一、講史　二、説経諢経　三、小説　四、合生

「講史」は、歴史上の事件や有名な人物の伝記などを語るもので、これがのちの歴史小説の起源となりました。「説経諢経」は、仏教の経典を俗語でわかりやすく説くものです。「小説」は短い説話のことです。「合生」は、まず意味のあいまいな二句の詩を読み、ついでさらに数句を読んではじめて意味がわかるもので、おそらく当時の人々を諷刺したものでしょう。この四科のうち、のちの小説と関係があるのは「講史」と「小説」だけであります(6)。

当時、この種の職業に従う人々を、「説話人」と呼びました。さらに彼らは「雄弁社」という団体も組織していました。彼らはまた説話のとき底本として話を敷衍するためのテキストも編集しておりました。これを「話本」と呼びます(7)。南宋の初年には、この種の話本はまだ行われていました。宋が滅んで、元人が中国にはいって来ますと、伎芸は衰え、話本も行われなくなりました。明朝では、説話人はまだ存在しますが――たとえば柳敬亭は当時たいへん有

名だった説話人ですが[8]――もはや宋人のような面目はありません。今日では、私たちはもう宋代の話本がどんなものであったか、ほとんど知ることができなくなりました――ただ幸いなことに、今日数種のテキストが翻刻されましたので、見本とすることはできます。

（1）宋代の伝奇は前掲の唐宋伝奇の選集に収録されているが、宋人伝奇の選集に次のものがある。
薛洪他選注『宋人伝奇選』（湖南人民出版社、一九八五年）
王洪延・周済人選注『五代宋小説選』（中州書画社、一九八三年）

（2）理学、科挙制度の確立にともなう宋代士大夫の上昇的な意識は、仏教、道教に対抗し、新しい儒学の組織化をめざして、天・人をつらぬく体系的な人性論をつくりあげたが、「天理を存して人欲を滅す」の語が示すようなリゴリズムにおちいった。宋学とも、道学とも、大成者の名をとって朱子学とも呼ばれる。

（3）『文苑英華』＝一千巻。宋太宗の勅命によって李昉（前出）らが編集した詩文選集。『文選』（梁の昭明太子蕭統編）の続篇を意図して、梁末から唐末までの詩文を選ぶ。選録された文人約二千二百人、作品は約二万篇。『太平御覧』＝同じく李昉らの編になる類書。一千巻。五十五部門に分類され、引用書は一六八九種にのぼる。『太平広記』＝前出。

（4）汴＝汴京、北宋の首都、今の河南省開封市。当時の汴京の繁栄ぶりを描いた記録文学に宋の孟元老『東京夢華録』（注釈本として、鄧之誠注『東京夢華録』、中華書局、一九八二年、訳注本に、入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録』、岩波書店、一九八三年）がある。宋の南渡にともなって汴京から臨安（杭州）へ移り住んだ著者が、旧都のはなやかさを回顧したもの。

（5）伎芸とあるのは原文は「雑劇」。著者が参考にした『東京夢華録』（前出）や南宋臨安（杭州）に関する記録文学すなわち南宋の耐得翁『都城紀勝』、呉自牧『夢梁録』、周密『武林旧事』を見るに、「伎芸」（「技芸」）とする方がふさわしい。また、伎芸は「瓦子」、「瓦舎」などといわれる盛り場の「勾欄」中の「棚」と呼ぶ寄席で行われるのが普通だった。

（6）『東京夢華録』は「伎芸」のうちに、「講史」、「小説」、「商謎」、「合生」、「説諢話」、「説『三分』」、『五代史』などをあげる。「説『三分』」はのちの『三国志平話』の、『五代史』は『五代史平話』の前身となるもの。魯迅のいう「四科」は一般に「説話四家」と称される。魯迅はここでは主として『都城紀勝』、『夢梁録』によっているが、耐徳翁の記録の読み方によって「四家」のとらえ方

がやや異なるほか、諸本によって内容が異なる。また「合生」が具体的にどのような内容のものであったかはわくかりにく、一説では芸人がその場で物を指し、それについて詩をつくり、唱うものだという（南宋・洪邁『夷堅志』）。

（7）南宋になると、説話人のために専門的に話本の編写を行う文人が現れてくる。彼らの組織するギルドは「書会」と呼ばれ、「書会」に組織された文人のことを「書会先生」あるいは「才人」と称した。

（8）柳敬亭（一五八七？―一六六八？）、明末清初の説書家。南京で活躍し、『水滸』、『三国』、『岳飛伝』に巧みであったという。百種ほどの話本を集めた『柳下説書』を有していたと伝えられるが散逸した。

その一つは『五代史平話』で、講史と見なすことができます。講史の体例は、おおむね天地開闢から説きはじめ、一気に本題の王朝にまで説きおよびますが、『五代史平話』も同様であります。[1] その文章は、各巻詩ではじまり、ついで本文にはいり、最後も詩で結ばれます。各段落ごとにかならず詩を挿入して証拠とします。ただ欠点は、虚言をながながとならべることが多く、史実の展開の少ない点にあります。詩については、たぶん唐人の影響を受けたものと考えられます。といいますのは、唐代では詩が重んじられ、詩にすぐれた者が高級な人間でした。そこで説話人たちは彼らにあやかろうとしました。そのため話本の中に詩や詞が多くはさまれるようになり、さらには以来今日にいたるまで多くの人のつくる小説がそれを踏襲しているのです。[2] また後世の歴史小説では、各回の結びにかならず「後事如何なるかを知らず、且く下回の分解を聴け」（このあといかがあいなりますか、まずは次回での説き明かしを聴かれよ）の語がはいりますが、これもおそらく説話人にはじまるものと思われます。説話では、どうしても聴衆に次回も聴きに来てもらいたいわけですから、はらはらするような話を未完のままにして、みんなを引きとめておく必要があるわけです。今日の章回小説がいまだにこれを模倣しているのは、その痕跡にすぎず、ちょうど私たちの腹の中の盲腸のごときもので、何の役割もないのです。[3]

もう一種は『京本通俗小説』です。すでに完本ではありませんが、十数篇がのこっています。[4]「説話」の中のいわゆる「小説」は、今日いうところの広義の小説とちがいまして、短い説話のことで、しかも多く同時代のことをあつかいます。まず枕に、詩や詞を用いたり、小話を用いたりします。これを「得勝頭回」――「頭回」というのは冒頭の一回の意味、「得勝」は縁起のいい語です――と呼び、そのあとではじめて本題にはいるのです。しかし本文も冗長ではありません。[5]長さも枕と大差なく、短時間で完結いたします。このことから宋代の説話の中の「小説」というものが、「短篇小説」の意味であることがわかります。『京本通俗小説』は完本ではありませんが、この種の小説の大体を十分見てとることができます。

以上の二種のほかに、さらに『大宋宣和遺事』があります。首尾ともに詩があり、俗語を混じえていますが、「講史」に近くしてしかも語り物にあらず、「小説」に似てしかも簡潔ではありません。ただ、その中にすでに梁山泊のことが述べてあり、『水滸』の先駆けとして大いに注意にあたいすることです。[6]さらに今日新しく発見されたものに、『大唐三蔵法師取経詩話』と呼ぶ一書があります[7]――この書は中国では早くに散逸し、日本から持ちかえったものですが――ここでいう「詩話」は、今日私たちがいっている詩話のことではなく、詩と語りでできている、いいかえればこれも「詩をもって証拠とする」ことを重視した小説の一種の別名であります。[8]

この『大唐三蔵法師取経詩話』は、『西遊記』の先駆けではありますが、かなり異なっています。たとえば「人参果を盗む」の一段ですが、『西遊記』では孫悟空が盗もうとし、それを唐僧が許さないことになっています。しかし『取経詩話』では、こちらは仙桃になっていますが、孫悟空が盗むのではなく、唐僧が命令して盗みに行かせるのです――これは時代の違いというより、作者の思想のちがいと考えた方がいいでしょう。なぜなら、『西遊記』の作者

が士大夫であるのに対し、『取経詩話』の作者は町人であるからです。士大夫は人間の評価が厳格で、唐僧が人参果を盗むことなどありうべくもないと考えますから、この事件を猿のせいにしなければなりませんでした。これに対し町人は人間の評価が比較的寛大で、唐僧がこんな仙桃の一つ二つ盗んだところでたいしたことではないと考え、彼のために気をつかって隠しだてすることもせず、筆にまかせて書いたのです。

(1)『五代史平話』=『新編五代史平話』のこと。五代の梁・唐・晋・漢・周の歴史を各朝二巻ずつで講じたもの。伝本は「梁史平話」と「漢史平話」との下巻を欠く。宋人の旧編を元人が刊印した。活字本に、『新編五代史平話』(古典文学出版社、一九五四年)がある。「平話」は「講史」の別称。『東京夢華録』にいう「説『五分』」はこの前身であると思われる。

(2)冒頭の詩を「開場詩」、結びの詩を「散場詩」と呼ぶ。講史や話本が詩を多く挿入するのは、それが「敦煌変文」などの背景にあったと考えられる唐代の説唱文学(韻文・散文を組みあわせて用いる語り物)の流れをくむものであるためであろう。こちらが魯迅の指摘する理由よりいっそう本質的かもしれない。なお、魯迅は『中国小説史略』でわずかに変文に言及しているが、まだほとんど内容を読むにいたっていなかった。

(3)講史の話本としては、いずれも元の至治年間(一三二一―一三二三)に建安(今の福建省建甌)の虞氏によって刊行された次のテキストが伝わっている。

(1)『新刊全相平話武王伐紂書』(別題『呂望興周』)
(2)『新刊全相平話楽毅図斉七国春秋後集』
(3)『新刊全相秦併六国平話』(別題『秦始皇伝』)
(4)『新刊全相平話前漢書続集』(別題『呂后斬韓信』)
(5)『至治新刊全相平話三国志』

「全相」は全葉挿絵入り、絵の上に題句がある。後出の『三言』、『二拍』とともに、中国では散逸し、わが国の内閣文庫その他に蔵されていたものが、一九二六、二八年に塩谷温氏によって紹介された(同氏「明の小説『三言』に就て」、『全相平話三国志』

に就て」）。『中国小説史略』修訂本（一九三一年）では、これにもとづいて若干の改訂が施されたが、修訂本題記に、「たとえば塩谷節山教授が元刊全相平話の残本と『三言』を発見し、考察を加えられたことは、まことに小説史上の大事件であった」（一九三〇年）と述べる。なお、(1)はのちの『封神演義』の、(5)は『三国演義』の藍本となった。

(4)『京本通俗小説』＝第十巻より第十八巻までのうち七篇が、近人八繆荃孫によって一九一五年に重刻刊行された。底本は元代の写本とされるが、刊本が存在したかどうかわからず、写本成立の時期についても疑問がある。ささいな文字の異動はあっても、作品の内容は『三言』所収のものと重なっている。しかし作品そのものは、「南宋の末年か、おそくも元の時代に、定着したものに相違ない」（吉川幸次郎「京本通俗小説解説」）とされる。七篇の名を『三言』中の表題とともに掲げると次のとおり。

(1)「碾玉観音」（『警世通言』「崔待詔生死冤家」）
(2)「菩薩蛮」（『同』「陳可常端陽仙化」）
(3)「西山一窟鬼」（『同』「一窟鬼癩道人除怪」）
(4)「志誠張管」（『同』「小夫人金銭贈年少」、別名「張主管志誠脱奇禍」）
(5)「拗相公」（『同』「拗相公飲恨半山堂」）
(6)「錯斬崔寧」（『醒世恒言』「十五貫戯言成巧禍」）
(7)「馮玉梅団円」（『警世通言』「范鰍児双鏡重円」）

現行の活字本に、『京本通俗小説』（上海古典文学出版社、一九五四年）、同（人人文庫、台湾商務印書館、一九七〇年）がある。

翻訳には次のものがある。

吉川幸次郎訳『西山一窟鬼』（筑摩書房、一九五六年、『京本通俗小説』の全訳）

同訳は、『中国古小説集』（世界文学大系、前出）および『吉川幸次郎全集』十三（筑摩書房、一九七四年）にも収める。『宋・元・明通俗小説選』（中国古典文学大系、平凡社、一九七〇年）所収の松枝茂夫訳「三言二拍抄」も、上記七篇をすべて収めている。

(5) 話本の枕は「入話」といい、「得勝頭回」、「得勝利市頭回」などとも称す。「得勝」、「利市」など縁起のいい語が用いられるのは、説話の聴衆に兵士や町人が多かったからともいう。

北大文学部紀要

(6)『大宋宣和遺事』＝著者不詳。北宋の歴史を述べるが、叙述は徽宗在位中のことにもっとも重点を置く。宣和は徽宗の年号（一一一九―一一二五）。宋人の話本を編集したものに、元人が増益を加えて刊行した可能性がつよい。文言の部分と白話の部分があって一貫せず、各種の旧籍からの抜き書と見られるところも多いが、その中で梁山泊の宋江らをめぐる叙述は話本的色彩がもっとも濃い。

(7)『大唐三蔵法師取経詩話』＝『大唐三蔵取経詩話』と『大唐三蔵取経記』との二種のテキストがあるが、ともにわが国の高山寺旧蔵本。近人羅振玉の影印本によって中国に紹介された。魯迅は元刻本かと疑ったが、今日一般に宋刻本とされる。作者不詳。活字本に、『大唐三蔵取経詩話』（中国古典文学出版社、一九五四年）がある。

また、『大唐三蔵取経詩話』は、太田辰夫氏の訳が『西遊記』下（中国古典文学全集、平凡社、一九六〇年）に収められている。

(8)「詩話」は、一般には詩に関する批評や詩人の故実を述べるエッセイの類。明の陳師道の『後山詩話』、清の王士禎の『漁洋詩話』など。「詩をもって証拠とする」の原文は「有詩為証」、『大唐三蔵取経詩話』には見られないが、白話小説にしばしば見られる手法。たとえば、「その有様やいかに、ついては証拠となる詩がございます」のように。詩・詞は、一般に登場人物の風貌の紹介や雪、火事、山川などの情景描写、一段のしめくくり、結末などに用いられる。

ともかく宋人の「説話」の影響はたいへん大きなものでした。後世の小説の九割かたは話本をもとにしたものです。第一に、たとえばのちの『今古奇観』のような短篇小説は、宋の「小説」を模倣したものです。(1) 第二に、のちの『三国志演義』のような長篇小説は、みな「講史」にもとづいています。その中で講史の影響はいっそう大きいのですが、さらに明・清から今日までに『二十四史』すべての演義を述べおわったのです。(2) 作家たちにも、一人の著名な人物が現れました。それが羅貫中です。

羅貫中は名を本といい、銭唐の出身で、元末明初に生きた人物と思われます。彼は多数の小説を書きましたが、ざんねんながら今日四種しかのこっていません。しかもこの四種も、後人の手がやたらに加わっていて、すでに本来の

面影はありません――中国人は従来小説というものを、経書とは異なる、取るに足りないものと考えていましたので、好き勝手に改作したのです――貫中の生涯の事跡についても、私たちは今日知るすべがありません。ある者は、彼が『水滸』を書いたため、彼の子孫は三代にわたって唖となったと伝えていますが、これも根拠のない言い伝えであります。(3) 貫中の四種の小説は、次のとおりです。

一、『三国演義』 二、『水滸伝』 三、『隋唐志伝』 四、『北宋三遂平妖伝』

『北宋三遂平妖伝』は、貝州(ばいしゅう)の王則が妖術を用いて反乱を起こしたことを述べたものですが、彼を鎮圧した三人の名がみな「遂」の字を含んでいるところから、「三遂平妖」と称するのです。(4)『隋唐志伝』は、隋の禅譲から唐の明皇〔玄宗〕までのことを述べたものです。(5)――この二つは構成も文章もあまりよくありませんし、社会的にも流行しませんでした。もっとも流行し、かつもっとも勢力のあったのは、『三国演義』と『水滸伝』です。

一、『三国演義』 三国のことを語るのも、羅貫中からはじまったわけではありません。宋代に通りや横丁で昔の物語を語る者たちの中に、「説三分」〔三分語り〕というのがおり、彼らの語ったのが三国の物語だったのです。(6) 蘇東坡も次のように述べています。「王彭(おうほう)がいったことがある。『横丁のこどもたちは……坐って古い物語を聴き、三国のことを語るときは、劉玄徳が敗れる段では、しきりに眉をひそめ、涙を出す者がおり、曹操が敗れる段では、よろこんで快哉を叫ぶ』と。君子と小人の余風が百代たっても消えぬことがわかる」(7) これによっても羅貫中よりまえに、すでに『三国演義』の類の書物があったことがわかります。(8) 魏・呉・蜀三国のことは、五代のように混乱してはいません。また楚・漢ほど簡単でもありません。ちょうど簡ならず繁ならず、小説をつくるのに適しております。そのうえ、三国時代の英雄たちは、智勇・武術ともにたいへん感動的です。そのため人々はみなよろこんで小説の材料としたので

す。それにもう一つ、『三国志』につけられた裴松之の注がたいへん詳細で、これも人の注意を三国のことに引きつけるに十分でした。(9)

羅貫中の『三国演義』が創作であるのか、それとも継承であるのか、今軽々に断定することはむろんできませんが、明の嘉靖年間〔一五二二―一五六六〕の刊本に「晋の平陽侯陳寿史伝・明の羅本編次」と題されているところから、直接に陳寿の『三国志』を藍本としていることがわかります。しかし、現在の『三国演義』はすでに後世の人間の手がたくさん加わっていて、もとの姿ではなくなっています。(10)

この書の欠点については、これを論ずる者たちから三つの欠点が指摘されています。

㈠、誤解を招きやすいこと。作品に描かれている事件は、七分が史実で、三分が虚構です。(11) 史実が多く虚構が少ないので、読者は虚構まで史実と信じかねません。王漁洋という人は、有名な詩人で、学者でもありますが、彼に「落鳳坡に龐士元を弔う」と題する詩があります。(12) この「落鳳坡」というのは、『三国演義』にしかない地名で、根拠はありません。彼はそれにだまされてしまったのです。

㈡、描写に誇張の多いこと。善人を書く場合にほとんどすこしの欠点もなく、悪人を描くのにもすこしの美点もないのです。しかし現実はそうではありません。なぜなら一人の人間が何事にもすべてよいということはありえませんし、すべてわるいということもありえません。たとえば曹操ですが、彼は政治的にはすぐれたところもありました。劉備、関羽といえども、批判すべき点がまったくないとはいえません。ところが作者はそういう点にはおかまいなしに、主観にまかせて書いてゆき、しばしば情理にはずれた人間ができてしまうのです。

㈢、文章と意図がうまく一致しないこと――つまり作者が実際に書いたことと、作者が頭の中で考えたこととがく

いちがいを起こしていることです。たとえば作者は、曹操の奸悪さを書こうとして、その結果豪爽で智謀に富んだ人物を書きあげ、孔明の智謀を描こうとして、その結果狡猾に近い人間像をつくってしまいました。

しかし、やはりたいへんすぐれたところがあります。たとえば関雲長が華雄を斬る一節は、さながら目で見、耳で聞く感じがいたしますし、華容道で曹操を逃がしてやる一節は、その義勇心は味わいぶかく、ありありと眼の前に見る思いがします。[13] その後歴史小説がたくさん書かれました。『開闢演義』、『東西漢演義』、『東西晋演義』、『前後唐演義』、『南北宋演義』、『清史演義』などなどですが、『三国演義』に匹敵するものは一つもありません。そのため誰もがよろこんで読むのです。将来も相当の価値をたもちつづけていくでしょう。

(1) 南宋の羅燁(らよう)『酔翁談録』は当時行われた話本を「霊怪」、「煙粉」、「伝奇」、「公案」、「朴刀」、「桿棒」、「神仙」、「妖術」の八類に分けて一〇四篇の名を掲げる。胡士瑩『話本小説概論』(中華書局、一九八〇年)は、『京本通俗小説』(前出)の全部(七篇)、『清平山堂話本』二十七篇のうち十一篇、『熊龍峰小説四種』のうち二篇、『古今小説』、『警世通言』、『醒世恒言』(以上『三言』)その他から二十篇の計四十篇が、現存する宋代話本(小説)であると判断している。このうち『京本通俗小説』、『醒世恒言』以外は講演当時魯迅の目にすることのできなかったものである。前述のとおり、『三言』、『二拍』は一九二六年に塩谷温氏によって紹介され、『中国小説史略』一九三一年修訂本の記述はこれにもとづいて若干増訂された。

『清平山堂話本』=明の洪楩が刊行した話本集。嘉靖年間(一五二二―一五六六)刊。「清平山堂」は洪楩の書斎の名。「雨窓」、「長燈」、「随航」、「欹枕」、「解閑」、「醒夢」の六集計六十篇あった(そのため『六十家小説』ともいわれる)と見られるが、中国で発見された十四篇とわが国の内閣文庫に蔵されていた十五篇が現存するのみ。校注本に次のものがある。

洪楩編、譚正璧校注『清平山堂話本』(古典文学出版社、一九五七年)

『熊龍峰四種小説』=わが国の内閣文庫に蔵されていた明刊話本。いずれも万暦(一五七三―一六二〇)のころ、熊龍峰によって刊行された一連の話本と見なされている。校注本に次のものがある。

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

王古魯校注『熊龍峰四種小説』（古典文学出版社、一九五八年）

『三言』＝明の馮夢龍（一五七四―一六四六）が編纂した話本集。馮夢龍、字は猶龍、崇禎三年（一六三〇）の貢生。寿寧知県に任じたことがある。清の順治二年（一六四五）明の滅亡に殉じて死んだと伝えられる。小説、民歌などの通俗文学を重視し、『三言』のほか、『笑府』（前出）、『山歌』の編著、長編小説『平妖伝』（後出）、『新列国志』の改編などを行なった。『三言』は、宋・元以来の話本のほか、明人が話本を模してつくった「擬話本」を捜集し、四十篇ずつ三集（計一二〇篇）に編集、統一的な観点から整理を加えている。彼自身の創作もかなり含まれている。最初総称として『新刻古今小説』が考えられたようであるが、第一集『古今小説』の発行後、これを『喩世明言』と改め（天啓元年〔一六二一〕刊か）、第二集を『警世通言』（天啓四年〔一六二四〕刊）、第三集を『醒世恒言』（天啓七年〔一六二七〕刊）と称した。そのために『三言』と総称される。現行の校注本に次のものがある。

馮夢龍編、許政揚校注『古今小説』上・下（人民文学出版社、一九五八年、一九七九年第二刷）

馮夢龍編、厳敦易校注『警世通言』上・下（人民文学出版社、一九五六年、一九八〇年第八刷）

馮夢龍編、顧学頡校注『醒世恒言』上・下（人民文学出版社、一九五六年、一九七九年第八刷）

『二拍』＝明の凌濛初（一五八〇―一六四四）作の擬話本集『初刻拍案驚奇』（崇禎元年〔一六二八〕刊）、『二刻拍案驚奇』（崇禎五年〔一六三二〕刊）をいう。凌濛初は、崇禎七年（一六三四）に副貢生をもって上海県丞となり、のち徐州通判に任ず。明朝滅亡の年に死ぬ。『二拍』は各四十篇（計八十篇、実際は重複が一種、雑劇が一篇あるため計七十八篇）。凌濛初が『太平広記』、『夷堅志』その他の旧籍に取材して創作した作品を集める。校注本に次のものがある。

凌濛初編著、王古魯校注『初刻拍案驚奇』上・下（古典文学出版社、一九五七年）

凌濛初編著、王古魯校注『二刻拍案驚奇』上・下（古典文学出版社、一九五七年）

なおこの両者に対して、章培恒氏が日本に蔵されている諸版本を調査して、王古魯校注本の不備を改めた次のテキストがある。

凌濛初著、章培恒整理、王古魯注釈『拍案驚奇』上・下（上海古籍出版社、一九八二年）

凌濛初著、章培恒整理、王古魯注釈『二刻拍案驚奇』上・下（上海古籍出版社、一九八三年）

中国では、以上の話本集はしばしば清朝政府の言論弾圧を受けて散逸し、わずかに『今古奇観』のみが読みつがれた。そのため、

魯迅は本文で『今古奇観』のみに言及しているのである。

『今古奇観』＝明の抱甕老人が『三言』、『二拍』一九八篇の中から四十篇を選んだ話本集。抱甕老人は明末の人、正体はわからない。明代の擬話本のみを集めてある。現行の活字本に次のものがある。

抱甕老人輯、顧学頡校注『今古奇観』上・下（人民文学出版社、一九五七年、一九八三年第二冊）

抱甕老人輯、林梓宗校点『今古奇観』（広東人民出版社、一九八三年）

翻訳には次のものがある。

千田九一・駒田信二訳『今古奇観』1～5（東洋文庫、平凡社、一九六五～七四年）

千田九一・駒田信二・立間祥介訳『今古奇観上』『今古奇観下　嬌紅記』（中国古典文学大系、平凡社、一九七〇、七三年。「嬌紅記」は伊藤漱平訳）

以上の書を基礎とする現行の話本選集には次のものがある。

胡士瑩選注『古代白話短篇小説選』（中国青年出版社、一九五六年）

中国科学院文学研究所編校『話本選』上・下（人民文学出版社、一九五九年、一九八四年第二次印刷）

上海古籍出版社編『古代白話小説選』上・下（上海古籍出版社、一九七九年）

翻訳として、『宋・元・明通俗小説選』（中国古典文学大系、前出）には、松枝茂夫訳「三言二拍抄」、入矢義高訳「雨窓欹枕集」、同「清平山堂話本」、今西凱夫訳「熊龍峯四種小説」を収録する。

（2）演義は歴史などに記録された歴史の意義を敷衍し、展開する（演述）意。後世長篇歴史小説のジャンル名となる。

（3）羅貫中、魯迅が錢唐（錢塘、今の杭州）の人とするのは、明の郎瑛『七修類稿』、田汝成『西湖游覧志余』などの記述によったものであるが、今日では、一三三〇年から一四〇〇年までをおよその生没年とし、名は本、湖海散人と号し、太原（今山西省に属す）の人とするのが一般の定説である。これは、明の賈仲明『録鬼簿続篇』（元明雑劇の作者小伝、作品目録を記す）によるもので、魯迅ものちに、「『続録鬼簿』の出現によって、昔から紛糾していた羅貫中の謎は氷解した」（「『小説旧聞鈔』再版序言」、一九三五）と述べている。

また、『水滸伝』を書いて、人心をまどわしたため、羅貫中の子孫が三代にわたって唖となったという説は、『西湖游覧志余』に

見え、広く伝えられた。

(4)『北宋三遂平妖伝』＝現存するもっとも早い刊本に明の万暦年間（一五七三―一六二〇）のものがある。「東原羅貫中編次」と題されている。全二十回。「三遂」とは、諸葛遂・馬遂・李遂を指す。活字本に、羅貫中著、張栄起整理『三遂平妖伝』（北京大学図書館蔵善本叢書、北京大学出版社、一九八三年）がある。

ただし、後世広く読まれたのは、馮夢龍が万暦四十八年（一六二〇）に四十回に増補して刊行した『平妖伝』である。活字本に、次のものがある。

羅貫中・馮夢龍著『平妖伝』（豫章書社、一九八一年）

なお、太田辰夫訳『平妖伝』（中国古典文学大系、平凡社、一九六七年）は、馮夢龍による四十回本の翻訳である。

(5)『隋唐志伝』＝魯迅は『中国小説史略』によれば、『隋唐志伝』を見ていない。この部分の叙述は、清刊本の『隋唐演義』百回本によっている。『隋唐志伝』の現存するもっとも早い刊本は、『隋唐両朝志伝』百二十二回本、万暦四七年（一六一九）刊。わが国の尊経閣文庫蔵。「東原貫中羅本編輯」と題す。『隋唐演義』百回本はその改作。清の褚人穫作。清の康熙年間（一六六二―一七二二）の刊。

(6)孟元老『東京夢華録』（前出）による。

(7)宋の蘇軾（一〇三六―一一〇一、東坡は号）の『東坡志林』「懐古」に見える。当時民間にはすでに劉備（蜀）びいき、曹操（魏）ぎらい（すなわち「尊劉抑曹論」）が行われていたことがわかる。

(8)羅貫中以前のテキストとして現存するものに、『全相平話三国志』があるが、すでに述べたように中国では早く散逸していた。上・中・下三巻に分れ、分量的には現行の『三国演義』の約十分の一、文章も粗雑であるが、全体の筋はおおむね一致する。全体に民間伝説的な色彩が濃厚であり、張飛の活躍が特に目立つのが特徴である。

また、金元時代の雑劇に少なくない『三国』関係の演目が存在した。

(9)『三国志』＝西晋の陳寿の著。三国時代の歴史を描く正史で、「魏書」、「蜀書」、「呉書」から成り、帝紀は「魏書」だけに立てられている。これは魏を正統とする立場からである。南朝宋の裴松之（三七二―四五一）の加えた注は、当時の文献から陳寿の取り上げなかった史料を補ったものであるが、引用された文献は一四〇種を超え、その後これらの文献が散逸したため、貴重な資料と

して重視される。またその文献の中には、魏の正統性を否定する立場のものも含まれ、『三国演義』の重要な材源となった。

(10) 今日のこっている最古の刊本がこの嘉靖本であるが、これを含め重要な刊本を二種あげると次のとおり。

『三国志通俗演義』二十四巻二百四十則。

明の嘉靖元年（一五二二）刊。正しくは、「晋平陽侯陳寿史伝、後学羅本貫中編次」と題す。弘治七年（一四九四）の序（庸愚子署名）があるため、ながく弘治本と呼ばれてきたが、今日では嘉靖本と呼ぶことが多い。後漢末の黄巾の乱の勃発から後漢の滅亡、三国の分立、西晋による統一までおよそ二八〇年間の歴史を、蜀の劉備、関羽、張飛、諸葛孔明を中心に述べる。『三国史平話』を藍本とするが、『三国志』および裴松之注、宋の司馬光『資治通鑑』その他を資料に、一篇の長篇小説にまとめ上げた。活字本に、羅貫中著『三国志通俗演義』上・下（上海古籍出版社、一九八〇年）がある。

『毛宗崗評三国志演義』六十巻百二十回

清の康熙初年の刊。清初の毛宗崗が父の毛綸とともに批評・修正を加えたもの。嘉靖本の二百四十則を百二十回に改め、回目に整理を加えて二句立ての対句とするとともに、論賛や瑣事を削り、文辞に修正を加えている。以来この「毛本」がもっとも普及した。次の活字本はともに毛本を底本とし、嘉靖本を参照して校訂を加えたもの。

羅貫中著『三国演義』上・下（人民文学出版社、一九七二年）

羅貫中著『三国演義』上・下（中国古典文学読本叢書、人民文学出版社、一九八三年）

翻訳はいずれも毛本を基礎とするものであるが、次のものがある。

小川環樹訳『三国志』全十冊（岩波文庫、第六冊より金田純一郎氏と共訳）

立間祥介訳『三国志演義』上・下（中国古典文学大系、平凡社、一九六八年）

小川環樹・金田純一郎訳『完本三国志』全八冊（岩波書店、一九八二～八三年）

立間祥介訳『三国志演義』全八冊（徳間文庫）

(11) 清の章学誠（一七三八―一八〇一）『丙辰札記』に「七分は実事、三分は虚構で、観る者を惑乱させる」とある。

(12) 詩は清の王士禎（一六三四―一七一一、号は漁洋）の『漁洋山人精華録』巻十一に見える。

(13) それぞれ『三国演義』（毛本）第五回「矯詔を発して諸鎮曹公に応じ、関兵を破りて三たび呂布と戦う」、第五十回「諸葛亮智も

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

て華容を算り、関雲長義もて曹操を釈つ」に見える。

二、『水滸伝』『水滸伝』は宋江らのことを述べたもので、これも羅貫中からはじまったわけではありません。なぜなら、宋江は実在した人物ですし、盗賊であったことも事実で、彼に関することは、南宋のころからすでに社会の伝説となっていたからです。(1) 宋・元の間には、高如、李嵩らが水滸の話を小説にしました。宋の遺民龔聖与も『宋江三十六人賛』をつくりました。(2) さらに『宣和遺事』にも、「宋江は方臘を捕らえるのに功あり、節度使に封ぜられた」などといった話が述べられています。この種の物語が、早くから人々の間に伝えられていたことがわかります。あるいは早くからいろいろの簡略なテキストが存在したかもしれません。(3) のちになって、羅貫中がいろいろの伝承あるいは『水滸』の物語の簡略なテキストを集めて、取捨選択を加え、大部の『水滸伝』ができあがりました。

しかし、原本の『水滸伝』は、今日すでに見ることができません。今日読まれている『水滸伝』に二種類あります。一種類は七十回のもの、もう一種類は七十回より多いものです。七十回より多いテキストの方は、最初に洪太尉が誤って妖魔を放ってしまうことを述べ、ついで百八人がしだいに梁山泊に結集し、掠奪をはたらき、のちに招安を受け入れ、用いられて遼を破り、田虎・王慶を討ち、方臘を捕らえて大功を立てますが、最後には朝廷から疑いうとんじられ、宋江は毒を飲んで死に、ついに神となる、というものです。(4) この中の招安の説は、宋末から元初にかけての考え方です。といいますのは、当時社会が混乱していて、官兵は平民を圧えつけ、民のおとなしい者は忍従しましたが、そうでない者は脱け出して、盗賊となりました。盗賊は一面で官兵に反抗し、官兵はそれを圧えることができません。しかしもう一面では人民に対し掠奪をはたらき、民間の生活も当然しばしば騒ぎにまきこまれるわけです。と

ころがいったん異民族の侵入を受け、官兵もそれを防ぐことができないという事態になりますと、人民は異民族を憎んで、官兵よりましな盗賊によってそれに抵抗しようと考えるようになります。そうして盗賊が賞讃を受けることになったのです。宋江服毒のくだりは、明初になって加わりました。明の太祖朱元璋は天下を統一したあと、功臣たちを疑いうとんじてみだりに殺害し、命を全うした者はたいへん少なかったので、人民たちは殺された功臣たちに同情を示すために、宋江が毒を飲まされ、神となる一段を加えたのです——これも現実の欠陥を小説によって団円させようとするやり方です。

『水滸伝』は多くの人が施耐庵（したいあん）の作だと考えています。といいますのは、七十回より多い『水滸伝』のテキストには、繁本と簡本との二種類があって、そのうち繁本の方の作者が施耐庵と題されているからです。しかし、この施耐庵というのはおそらくのちに繁本をつくった者の仮託の名で、実際は羅貫中よりあとに生まれた人物であろうと思います。後世の者が繁本に耐庵の作と題されているのを見、また簡本を節略本だと考え、それで耐庵をより古い人物と見なし、貫中のまえに置いたのです。(5)

さらに清初になりますと、金聖嘆が『水滸伝』は「招安」まではすぐれているが、そのあとは悪本であると主張し、そのうえ自分で古本を手に入れたと称して、「招安」までを耐庵の作、それ以下は羅貫中の続作であると決めつけ、はげしく非難しました。そうして彼は「招安」以後をすべて削除し、前七十回のみをのこしたのです——これが現在の通行本です。(6) 彼はたぶん古本など持ってはおらず、自分の意見に従って削除しただけでしょう。古本云々というのは、昔のことにかこつける「託古」の手段にすぎないのです。ただ前後の文章に不ぞろいが見られることは、たしかに聖嘆のいうとおりです。しかし、すでに述べましたように、『水滸伝』は多くの伝承や『水滸』の物語の簡略なテキ

ストを集めて成ったものですから、当然一律にいきかねるところが出てきます。まして事業を成し遂げたあとのことを描く文章は、今強盗をやっているときの描写よりむずかしく、大作の結末が振るわないことは多くあるわけですから、これをもって羅貫中の続作と断定してしまうこともできません。

ところで、金聖嘆はなぜ「招安」以後の文章を削ろうなどと考えたのでしょうか。これもたぶん当時の社会環境の影響を受けたものでしょう。胡適之先生が次のようにいっています。「聖嘆は流賊が天下に満ちている時代に生まれて、張献忠、李自成[7]のごとき強盗が全国に害悪を流すのを眼のあたりに見たため、強盗を奨励するようなことをしてはいけない、口誅筆伐を加えなくてはいけないと感じたのである[8]」と。この説はそのとおりです。つまり聖嘆は強盗を使って外敵を討つなどあてにならぬことと考え、そのために宋江が手柄を立てたという言い伝えに耳を傾けたくなかったのです。

しかし明の滅亡後、異民族の勢力が全盛をきわめるようになりますと、遺民の中に亡国の苦痛のために、流賊の苦痛を忘れ、ふたたび強盗に同情を示す者が出てきました。明の遺民陳忱は、雁宕山樵の名に託して、『後水滸伝』をつくりました。それは、宋江の死後、のこった同志たちは、宋のために金に抵抗しつづけますが、ついに功なく、李俊がみなを率いて海路暹羅に渡り、国王になったというものです[9]――つまり国が異族に占領されたために、ふたたびまた強盗に同情を示すようになったのです。ところがのちに事情が変わると、民族感情まですっかり忘れ去られました。そこで道光年間〔一八二一―一八五〇〕には、兪万春の『結水滸伝』が現れ、山賊宋江らが一人一人ことごとく殺される話を書きました。彼の文章は出色で、描写もわるくありません。しかしその思想は、まことに興ざめというほかありません[10]。

（1）史実としての宋江らの記録は、断片的ながら南宋の歴史家王偁の『東都事略』「徽宗紀」、「侯蒙伝」、「張叔夜伝」に見える。元代に編集された「宋史」の北宋部分は、多くこの書に材料をもとめ、宋江らのことも王偁を踏襲する。

（2）龔聖与『宋江三十六人賛』は、南宋・周密の『癸辛雑識』続集に引く。「高如・李嵩」のことも、龔聖与（宋末元初の人）の文に見える。書き下し文で示せば、次のとおり。

宋江の事は街談巷語に見え、採著するに足らず。雖も高如李嵩の輩の伝写する有り、士大夫も亦た黜くるを見ず。余年少の時、其の人を慕い、之が画賛を存せんと欲するも、未だ信書の事実を載するを見ざるを以て、敢えて軽がろしく為さず。異時『東都事略』中に「侍郎侯蒙伝」を載するを見るに及び、書一篇有り、賊を制するの計を陳べて言う。『宋江三十六人を以て河朔・京東に横行す。官軍数万敢えて抗する者無し。其の材必ず人に過ぐる有らん。過ちを赦して招降し、方臘を討たしめ、此を以て自ら贖わしめんに如かず。或は東南の乱を平ぐべけんか』と。余然る後に江の輩の真に時に聞ゆる者有るを知る。是に於て三十六人に即きて、人ごとに一賛を為る。

龔聖与の賛は宋江ら三十六人の姓名と綽号をほぼ完全に示す現存の最古の記録である。ただし「高如・李嵩」に対しては、今日では一般に「高（名）如李嵩」（高名なること李嵩の如き）と読む。李嵩は南宋の画家で、光宗・寧宗・理宗三朝（一一九〇―一二六四）に仕えた画院待詔すなわち宮廷画家である。「伝写」は「伝神写真」の意で、李嵩がつくったのは三十六人の肖像画であって、本文でいうように「小説」ではない。

（3）南宋の羅燁『酔翁談録』の話本目録に「花和尚」、「武行者」など数篇の『水滸』に関する話本の名が見える。また、元明雑劇には少なくない「水滸戯」が存在したが、そのストーリイが今日の『水滸伝』中に含まれているもの、含まれていないものがある。

（4）これは百二十回本のもっとも簡潔な筋である。『水滸伝』の刊本は少なくないが、代表的なものに次の三種がある。

『李卓吾先生批評忠義水滸伝』百巻百回
明の容与堂刊本。万暦三十八年（一六一〇）刊。作者名なし。現存するものの中でもっとも早い完本である。先行の百回本に『忠義水滸伝』（明・嘉靖年間刊）などがあるが欠本。「施耐庵集撰、羅貫中纂修」と題されている。

『李卓吾批評忠義水滸全伝』百二十回（不分巻）
万暦四十二年（一六一四）袁無涯刊本。楊定見小引。楊定見の改編本で、田虎・王慶征討の部分を加えて百二十回とする。「施

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

耐庵集撰、羅貫中纂修」と題す。

『金人瑞刪定水滸伝』七十回

貫華堂本。「東都施耐庵撰」と題す。崇禎十四年（一六四一）金聖嘆序あり。正伝七十回。楔子一回。現行の活字本に次のものがある。

『水滸全伝』上・中・下（上海古籍出版社、一九八三年）百二十回。

『水滸』上・下（人民文学出版社、一九七二年）七十回本。金聖嘆本の楔子を第一回に改め、第七十回を削って、全伝の第七十回を最後に置く。全七十一回。

『水滸伝会評本』上・下（中国古典小説戯曲研究資料叢書、北京大学出版社、一九八一年）七十回本。評本六種の評語を輯成したもの。

『水滸伝』上・中・下（中国古典文学読本叢書、人民文学出版社、一九八五年）百回本。容与堂本を底本とする。翻訳には次のものがある。

吉川幸次郎・清水茂訳『水滸伝』全十五冊（岩波文庫、既刊十一冊）、百回本。

駒田信二訳『水滸伝』上・中・下（中国古典文学大系、平凡社、一九六七、六八、六九年）百二十回本。

佐藤一郎訳『水滸伝』Ⅰ・Ⅱ（世界文学全集、集英社、一九七九年）、七十回本。

（5）施耐庵は、ながく実在の人物であるかどうかさえ明らかでなかったが、一九五二年『文芸報』第二十一号掲載の劉冬他「施耐庵与水滸伝」、丁正華他「施耐庵生平調査報告」及び「附件」に『興化県続志』所載の「施耐庵墓志」、「施耐庵伝」や『施氏族譜』などが発表された。これらには、施耐庵は、興化（今江蘇省に属す）の人、元の至順二年（一三三一）の進士、明末の群雄の一人張士誠と交渉があり、『江湖豪俠伝』（即『水滸伝』）の著作があり、羅貫中はその弟子であったことなどが述べられているが、資料の信憑性についての疑義も出されている。

（6）金聖嘆（一六〇八―一六六一）、名は人瑞、聖嘆は字。明の諸生（秀才）、清代になって哭孔廟案なる事件によって死刑となる。「離騒」、『荘子』、『史記』、杜詩、『西廂記』、『水滸伝』に批評をほどこし、「六才子書」と称した。『水滸伝』の第七十一回以下を「腰斬」し、最後に盧俊義が夢で宋江・盧俊義ら百八人がことごとく斬首にあうのを見る段を加えた。

(7) 張献忠（一六〇六―一六四六）、李自成（一六〇六―一六四五）、ともに明末の農民反乱の指導者。

(8) 胡適「水滸伝考證」（一九二〇）。今、『中国章回小説考証』（前出）に収む。

(9) 『後水滸伝』＝又名『水滸後伝』、清初の陳忱（一六一三？―？）作。四十回。翻訳に次のものがある。
鳥居久靖訳『水滸後伝』1～3（東洋文庫、平凡社、一九六六年）

(10) 『結水滸伝』＝又名『続水滸伝』、『蕩寇志』。清の兪万春（一七九四―一八四九）の作。七十回。諸生（秀才）になったのみで、仕官せず。道光六年（一八二六）から同二十七年（一八四七）まで、二十二年かかって執筆された。活字本に次のものがある。
兪万春著、戴鴻森校点『蕩寇志』上・下（中国小説史料叢書、人民文学出版社、一九八一年）

第五講　明代小説の二大主潮

前回すでに宋代の小説について、その大体をお話しました。元はどうかといいますと、詞と曲はたいへん発達しましたが、小説の方面ではいうべきほどのことはありません。そこで私たちは明朝の小説に話をすすめることにしましょう。明の中葉、つまり嘉靖（一五二二―一五六六）前後に小説がたくさん出現します。その中に二つの大きな流れがあります。

一、神と魔とのたたかいを述べたもの。
二、世情を述べたもの。

これからそのそれぞれについて分けてお話することにします。

一、神と魔とのたたかいを述べたもの。

この思潮が起こったのも、当時の宗教、方士の影響によるものです。宋の宣和年間〔一一一九―一一二五〕は、道教がたいへん信奉されました。元では仏教、道教ともに尊崇され、方士の勢力も小さくありませんでした。明になって、方士の勢力は本来衰えつつあったのですが、成化年間〔一四六五―一四八七〕にはいってまた頭をもたげてきました。当時、方士の李孜(り)、僧の継暁が、さらに正徳年間〔一五〇六―一五二一〕には色目人の于永(うえい)が、みな方技雑流によって官を得たために、妖術、迷信が日々盛んになり、その影響は文章に及びました。(1) まして歴代の儒・仏・道三教の争いは、みな無解決のまま、たいていたがいに調和しあい、妥協しあって、最後に「同源」の名によってうやむやとなってしまいます。新しい一派がはいってきますと、決まってたがいに外道(げどう)と見なし、紛争が生じるのですが、いったん同源と認めますと、一視同仁となってしまいます。次に紛争が起こるには、新しい別の一派が現れなければなりません。新しい一派が登場しますと、彼ら三家はまた正統を名のって、この同源にあらざる異端を攻撃するのです。当時の思想はきわめてあいまいなものですから、小説に描かれた正と邪も、決して儒と仏、あるいは道と仏、あるいは儒・道・仏と白蓮教(2)といったものではなく、単に不明確なあれとこれとの争いにすぎません。そこで私はそれらを一つにくくって、神魔小説という名で呼ぶことにします。この主潮の代表とすべきものに、

㈠、『西遊記』㈡、『封神伝(ほうしん)』㈢、『三宝大監西洋記』

の三篇があります。

㈠、『西遊記』『西遊記』は、多くの人が元朝の道士邱長春の作と考えていますが、実はそうではありません。邱長春自身には別に『西遊記』三巻の著作があり、これは旅行記です。(3) 今も『道蔵』に収められています。(4) 書名が同じであるために、とうとう同じものと誤解してしまったのです。加えて清の初めに小説『西遊記』を出版した者が、虞集(ぐしゅう)

の書いた「長春真人西遊記序」をその冒頭に据えたために、人々はいっそう『西遊記』は邱長春の書いたものだと信じるようになりました[5]——ところが実はこの『西遊記』の作者は、江蘇山陽の人呉承恩であります。このことは、明代に書かれた『淮安府志』に見えることですが、清代の府志ではこの記載を削ってしまいました[6]。

現在見ることのできる『西遊記』は、百回本で、最初に孫悟空の修業成就のことを述べ、次いで唐僧の取経の旅の由来、その後八十一難を経て、ついに東土に帰って来るまでのことを述べます。この小説も、呉承恩の創作ではありません。といいますのは、『大唐三蔵法師取経詩話』——これについてはまえに触れました——が、すでに猴行者、深河神[7]およびもろもろの異境のことを述べていますし、元朝の雑劇にも唐三蔵西天取経を題材にした作品があるからです[8]。このほかにも、明代にもう一種簡略な『西遊記伝』が存在します[9]——このことから玄奘の西天取経[10]が、唐末から宋、元にかけてすでにしだいに神話的な物語に発展し、かつ多くの簡単な小説となり、明代の呉承恩にいたって大部の『西遊記』に集大成されたことがわかります[11]。

(1) 李孜、李孜省ともいう。繼暁もともに房中の秘術などで憲宗（在位一四六五—一四八七）の寵を得た。于永は回族、房中の秘技をすすめて武宗（在位一五〇六—一五二一）に取り立てられる。ともに『明史』「佞倖列伝」に記述がある。

(2) 白蓮教、元、明、清にわたって力をもった民間の宗教結社。南宋の茅子元が創立した浄土教の一派で、阿弥陀浄土信仰が中心であったが、明代に弥勒信仰と結びついた。農民反乱の母体となることが多く、いくども禁圧をこうむった。

(3) 邱長春（一一四八—一二二七）、俗名丘処機、道号長春真人。金末、元初の道士。一二二〇年西征途上のチンギス・ハンに招かれて山東の故郷（棲霞）から弟子十八名とともに西方に二年がかりの大旅行をし、ヒンズークシ山脈の南の地にあったチンギス・ハンに謁見、道教の最高指導者国師に封ぜられる。このときの旅行記録が弟子の李志常の『長春真人西遊記』である。

(4) 『道蔵』＝仏教の『大蔵経』にならって道教の教典を集大成したもの。明の正統十年（一四四五）に大部分が成り（『正統道蔵』）、

万暦三十五年（一六〇七）に増補して（『万暦続道蔵』）、現行本五四八五巻が成立した。

（5）虞集（一二七二―一三四八）、元の人。官は翰林直学士兼国子祭酒にいたる。いわゆる虞集作「長春真人西遊記序」（元の天暦二年［一三二九］の作と称し、この小説は長春真人の作であると述べる）は清刊本の『西遊證道書』（後出）で評者汪象旭によってはじめて作品の前に置かれた。

（6）呉承恩（一五〇〇?―一五八二?）、号射陽山人。山陽（今の江蘇省淮安）の人。科挙ではいくども挫折し、四十数歳でようやく貢生となる。浙江長興県丞となるが、やがて仕官をやめて著作に専念する。著書に志怪小説集『禹鼎志』（散逸）、『射陽先生存稿』がある。

明の天啓（一六二一―一六二七）刊『淮安府志』の記事によって『西遊記』の作者が呉承恩であると述べたのは、清の丁晏『石亭記事続編』、阮葵生『茶余客話』などであるが、近代にはいり魯迅『中国小説史略』などによって呉承恩説が広く受け入れられるようになった。しかしこれに対しては今日根づよい疑問が存在し、作者呉承恩説をはっきり否定する見解もある。なお、明刊本の小説『西遊記』には作者名を題したものはない。

（7）深河神、正しくは深沙神。沙悟浄の前身である。

（8）元代の『西遊記』雑劇に呉昌齢『唐三蔵西天取経』があるが散逸し、明代のものに楊景賢『西遊記雑劇』がある。また、断片的であるが、元代に高麗で出版された中国語会話教科書『朴通事諺解』の注記や、明初の『永楽大典』の引用が、初期の『西遊記』の姿をうかがわせる。

（9）『西遊記伝』＝四十一回本。斉雲の楊志和編と題す。明代の神魔小説四篇を合わせた『四遊記』中の一篇。魯迅はこれを百回本『西遊記』の祖本と考えたが、のちに鄭振鐸（「西遊記の演化」）の指摘を受けて、これが百回本の節略本であることを認めた。「鄭振鐸教授はまた『四遊記』の中の『西遊記』は呉承恩『西遊記』の摘録であって、祖本ではないことを証明した。これは拙著第十六章の説を訂正するものである」（『中国小説史略』日本訳序」、一九三五）。

なお、『四遊記』の他の三篇は次のとおり。

呉元泰『東遊記』（一名『上洞八仙伝』、又名『八仙出処東遊記伝』）

余象斗『南遊記』（一名『五顕霊官大帝華光天王伝』）

余象斗『北遊記』（一名『北方真武玄天上帝出身志伝』）
『四遊記』の活字本には次のものがある。
呉元泰等著、王継権校勘『四遊記』（北方文芸出版社、一九八五年）
全象斗等著『四遊記』（上海古籍出版社、一九八六年新一版）

(10) 玄奘（六〇二―六六四）、本名は陳褘、唐の高僧、通称三蔵法師。六二九年出国の許可が得られぬまま一人でインドに向かって出発、砂漠や大雪山を越えてインド各地で仏教を学び、六四五年おびただしい経典をたずさえて帰国、帰国後はそれらの翻訳に没頭した。その事跡は、彼の口述を弟子の辯機がまとめた『大唐西域記』（翻訳に、水谷真成訳『大唐西域記』、中国古典文学大系、平凡社、一九七一年）、慧立・彦悰（えりゅう・げんそう）者『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（翻訳に、長沢和俊訳『玄奘三蔵―大慈恩寺三蔵法師伝』、光風社出版、一九八五年）などに詳しい。

(11)『西遊記』の刊本は『水滸伝』についで多い。ただし大きく明刊本と清刊本に分けられる。清刊本は、明刊本では韻文のみで簡単に語られる三蔵法師の出生譚に一回をさいて散文で述べている。陳光蕊（ちんこうずい）が任地に赴く途中賊に遭い、その子江流僧（のちの三蔵法師）が父の復讐を遂げる話である。代表的な刊本は次のとおり。

『新刻出像官板大字西遊記』二十巻百回
明の金陵（南京）世徳堂刊本。陳元之の万暦二十年（一五九二）の序。作者は誰であるかわからないと述べる。
『李卓吾先生批評西遊記』百回（不分巻）
袁韞玉序。明末の天啓、崇禎年間に蘇州あるいは杭州で刊行されたと推定されている。世徳堂本系の一書。
『西遊証道書』百回
清の康熙初年刊。澹漪子（汪象旭）批評。簡略本。虞集の序を付し、『西遊記』長春真人作説を広めた。
『西遊真詮』
清の康熙三十五年（一六九六）原刊。簡略本。編者は陳士斌。もっとも広く普及したテキスト。
今日通行の活字本に次のものがある。
呉承恩著『西遊記』上・中・下（中国古典文学読本叢書、人民文学出版社、一九八〇年第二版）世徳堂本を底本に諸本で校訂を

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

加え、第八回と第九回の間に附録として「陳光蕊任に赴きて災に逢い、江流僧復讐して本を報ず」を挿入する。

翻訳に次のものがある。

太田辰夫・鳥居久靖訳『西遊記』上・中・下（中国古典文学大系、平凡社、一九七一、七二年）『西遊真詮』を底本とする。

小野忍・中野美代子訳『西遊記』全十冊（岩波文庫、既刊四冊、第三冊まで小野忍訳、第四冊より中野美代子訳）『李卓吾先生批評西遊記』を底本とする。

承恩はもともと滑稽の才があり、彼の描く妖怪たちの喜・怒・哀・楽はすべて人情に近く、誰もがよろこんで読むのです。これが彼の本領です。それに、『三国演義』を読む者が、劉備や曹操の勝敗に一喜一憂させられるのと異なって、読者の肩をこらせない点があります。といいますのは、『西遊記』が描くのは、すべて妖怪ですから、私たちは読んでいてひたすらおもしろく感じるだけです。利害得失を忘れて鑑賞にひたるというのはこのことで、これも彼の本領です。

この書の主旨が何であるかということでは、学問を勧めるものだという者、禅を語ったものだという者、道教の教えを説いているという者、議論は実にさまざまです。ただ私の見たところでは、作者の遊びから出たものにすぎないと考えます。作者が三教同源の影響を受けているために、釈迦、老君、観音、真性、元神(1)などなど、何でもそろっていて、何教を信奉する者であれ、みなつごうのいいようにこじつけることができるだけなのです。もししいて中心テーマが何であるかということになりますと、私は明の謝肇淛の短い言葉が、すでに十分に言いつくしているように思います。

『西遊記』は……猿で心のとらわれぬ霊妙なはたらき〔心の神〕を、猪で意の奔放な溢出〔意の馳〕を象徴して

いる。はじめは放縦で、天も地もそれをよく制御することができないが、緊箍の呪文によってよく心猿を馴服せしめ、決して他になびかない。これもまた放心を求むの教えであろう。(2)

その後、『後西遊記』、『続西遊記』などが現れますが、いずれも前書の模倣から脱け出ることはできませんでした。(3)また、薫説の『西遊補』は、諷刺小説で、この類とあまり関係がありません。(4)

(1) 老君、太上老君、つまり道教でいう老子のこと。真性、人間に本来的に具わった天性をいう仏教語。元神、修練を経た人間の霊魂をいう道教の用語。

(2) 明の謝肇淛『五雑組』巻十五に出る。『西遊記』そのものでは、「心猿」は孫悟空を、「意馬」が白馬を指す。一般の成語で「意馬心猿」というのは、猿のように跳躍し、馬のように奔走する人心を形容する。また、『孟子』「告子上」に、「学問の道は他無し、その放心を求むるのみ」とある。「放心を求む」は解き放たれた心を集中すること。

(3) 『後西遊記』＝四十回。作者不詳。明末清初の作。活字本に、于植元校点『後西遊記』(明末清初小説選刊、春風文芸出版社、一九八二年)がある。
『続西遊記』＝百回。作者不詳。明人の作。

(4) 『西遊補』＝十六回。明の董説作。活字本に、羊皐校点『西遊補』(広東人民出版社、一九八一年)、また『西遊補』(上海古籍出版社、一九八三年)がある。

(二)、『封神伝』『封神伝』もたいへんよく読まれていますが、誰の作であるのか、知るすべがありません。(1)作者は貧乏人で、この書を書きあげて売りはらい、娘の嫁入りの資金としたという説がありますが、根拠のない伝説にすぎません。(2)この小説の思想も、三教同源の漠然とした影響を受けています。受辛が女媧宮に参詣したおり、壁に詩を題して女神を冒瀆したために、女神が三妖に命じて紂をまどわし、周を助けたというものです。戦争の話が多く、神と

仏とがいれかわりたちかわり登場しますが、周を助けるのが闡教、殷を助けるのが截教です。この「闡」というのは明の意味、「闡教」はつまり正教、「截」というのは断、つまり「截教」は仏教でいうところの断見外道のことかもしれないと、私は考えます――いずれにしろ三教同源の影響を受けて、三教を神、別教を魔としているのです。

㈢、『三宝太監西洋記』『三宝太監西洋記』は、明の万暦年間の書ですが、現在はあまり見かけません。(4) この書は、永楽年間〔一四〇三―一四二四〕の太監鄭和が外夷三十九か国を服属させ、朝貢させたことを述べていますが、(5) 鄭和の西洋遠征は、碧峰長老の助けによるもので、法術によって外夷を降し、大功を収めたことになっています。語られているのは、国と国との戦争ですが、中国は神に近く、外夷は魔の地位にあります。それでこれも神魔小説の流れに属します。だが、この小説が作られたのも、当時の社会環境と関係があります。といいますのは、鄭和は明代では、名声赫々とした、世間にもてはやされた人物でした。そして嘉靖以後、東南方面に倭寇が猖獗をきわめますと、民間では衰えた今をなげき、盛んだった昔をなつかしんで、この書を作ったのです。しかし、将軍を思わず太監を思い、兵力をたのまず法術をたのむというのは、一つは伝統思想のとりことなっているためですし、一つは明朝の太監がたしかにしばしば将軍となり、権力がきわめて大きかったからです。方術によって外国を打ち負かそうとするこの種の考え方は、その後もずっと伝えられ、清朝では本気で信じこむ者が出て、義和団(6)が実際に試してみることになったのです。

(1)『封神伝』=『封神伝』は別題、一般に『封神演義』と題す。百回。わが国の内閣文庫蔵本は唯一の明刊本であるが(万暦年間刊)、「鍾山逸叟許仲琳編輯」と題している。許仲琳の伝記はわからない。さきにあげた元刊『武王伐紂平話』を藍本とし、古籍や民間流伝の物語を取り入れてまとめられた。活字本に次のものがある。

許仲琳編、鐘惺評『封神演義』上・下(広東人民出版社、一九八〇年)康熙三十四年(一六九五)褚人穫序を有する四雪草堂本

を底本とする。
許仲琳編『封神演義』上・下（人民文学出版社、一九八一年）
翻訳に次のものがある。
木島清道抄訳『封神演義』（謙光社、一九七七年）

（2）清の梁章鉅『帰田瑣記』巻七に見える。

（3）受辛、殷の紂王のこと。

（4）『三宝太監西洋記』＝二十巻百回。明の万暦年間刊。明の羅懋登（らぼうとう）作。現行の活字本に次のものがある。
羅懋登著、陳樹崙・竺少華校点『三宝太監西洋記通俗演義』（中国古典小説研究資料叢書、上海古籍出版社、一九八五年）

（5）鄭和（一三七一―一四三五）、本姓馬。回族。永楽帝の起兵に従って功績あり、宦官の長である内官監太監に任じられ、鄭姓を授けられる。永楽、宣徳（在位一四二六―一四三五）両帝のもとで、七回にわたって「西洋」（南海諸国）に出使し、彼の率いる大遠征隊の足跡は、アフリカ東岸、紅海内におよんだ。

（6）義和団、一九〇〇年の義和団事変の主体となった民間の秘密結社。白蓮教系の一派。拳法と呪術を重視した。

二、世情を述べたもの。

神魔小説がたいへん流行したちょうどそのころ、世情を述べる小説も起こりました。その原因も、当然当時の社会状況と無関係ではありません。さらにその中には、神魔小説と同様方士と大きな関係のあるのもあります。この種の小説はおおむね男女の情事や淫蕩を述べ、悲歓離合の間に人情定めなき世間の姿を写しています。そのもっとも有名なのが『金瓶梅』です。この書は、『水滸伝』の人物の一人西門慶を主人公として、その一家のことを描いています。西門慶にはもともと一妻三妾がありましたが、のちにさらに潘金蓮を愛し、その夫武大を毒殺して、彼女を妾にします。さらに金蓮の女中春梅にも手をかけ、また李瓶児とも通じて、彼女もまた妾に加えます。のちに李瓶児、西門慶

が死に、潘金蓮も武松に殺され、春梅も淫乱がたたって急死します。金軍が清河県に迫ったとき、慶の正妻〔呉月娘〕は慶の遺腹の子孝哥を連れて、済南へ避難しようとしますが、途中で普浄和尚と会い、永福寺に案内され、仏法によって孝哥を感化し、ついに彼を出家させ、名も明悟と改めます。(1) この書において、潘金蓮、李瓶児、春梅、いずれも重要な人物ですので、書名を『金瓶梅』と呼ぶのです。

明人の小説が人間の醜行を描こうとする場合、人物はつねに指すところがあり、文字を借りて宿怨をはらそうとしたものなのです。『金瓶梅』に描かれた西門慶は、土地の有力者であり、たぶんこれも作者の仇敵にほかならぬでしょうが、それがはたして誰であるのか、今日では知るすべがありません。作者が誰であるか、これも今日まだわかっていません。ある説は、これは王世貞が父親の仇をとるためにつくったのだといいます。彼の父親王忬は厳嵩に殺されたのですが、厳嵩の子世蕃もまたつよい勢力をもっていましたので、厳嵩に不利な上奏文はすべて抑えられて、皇帝に達しませんでした。王世貞は世蕃が小説を愛読していることを探知し、この書をつくり、世蕃がこれに夢中になって他を顧みる暇のないすきに、厳嵩弾劾の奏章をとどかせようとしたというのです。(2) そこで清初の刊本では、「苦孝説」なるものを冒頭に置いています。しかしこれは臆測の辞にすぎず、信ずるに足りません。『金瓶梅』の文章はなかなかのできですし、王世貞は当時もっとも文名のあった人物でしたので、世人は彼を作者にしたててしまったのです。後世の人間が、このような説を主張し、さらに「苦孝説」を冒頭に据えたりするのは、世間からの攻撃を軽減しようとする手段にほかなりません。王世貞作のたしかな根拠があるわけではないのです。(3)

(1) 武松、『水滸伝』の天罡星三十六人の一人。景陽崗で虎を退治したところから、陽穀県(『金瓶梅』では清河県)の治安隊長に任じられ、そこで蒸し餅を売り歩いている兄武大に会い、武大の家に寄宿する。嫂(あによめ) 潘金蓮は武松に言い寄るが拒否され、武松の出

張中に西門慶とねんごろとなり、夫を毒殺する。『金瓶梅』は以上の武松の物語を借りてストリーを展開する。『水滸伝』では、帰って来た武松によって、潘金蓮、西門慶は殺されるが、『金瓶梅』では、武松が二人の殺害に失敗して遠流となり、話は生きのこった西門慶を中心に展開する。

魯迅の梗概の中で、「普浄和尚」とあるのは「普静和尚」が正しい。また「仏法によって感化」されるのは呉月娘である。

(2) 王世貞（一五二六―一五九〇）、明の文学者。「後七子」の領袖で、二十年近く文壇の支配的地位にあり、門下生が多く、影響力も大きかった。厳嵩（一四八〇―一五六九）、明の世宗（在位一五二二―一五六六）のとき、少傅兼太子大師となり権力を振う。子世蕃（?―一五六五）も官は太常寺卿にすすみ、父子で二十年にわたって国政を壟断、弾劾者や直言者を殺害した。のちに失脚して世蕃は斬罪、嵩も罷免された。

(3)『金瓶梅』の作者については、王世貞説、李開先（一五〇二―一五六八、戯曲家）説、集団創作説など諸論があって確定されていない。「苦孝説」は清初にこの書に批評を加えた張竹坡が作品の冒頭に冠した一文で、作者を明示せず、ただこの書が親を仇に殺された人物の「奇酸志」（耐えがたい悲痛の書）、「苦孝説」（せめてもの孝行の書）であると述べている。

『金瓶梅』は最初写本のまま流行し、万暦時代の高名な文人たち（董其昌、袁宏道、馮夢龍、沈徳符など）の間で愛読され、流行した。魯迅『中国小説史略』では、沈徳符『野獲編』の記述によって、万暦三十八年（一六一〇）に初刻本が刊行されたと推定する。現存の主要な刊本は、次のとおりである。

『金瓶梅詞話』百回。

明の万暦年間の刊。欣欣子序および万暦四十五年（一六一七）の東呉弄珠客序がある。欣欣子は作者を蘭陵笑笑生とする。蘭陵は今の山東省嶧県とされる。笑笑生が何者であるかはわからない。一九三二年に山西省で発見、三三年に馬廉によって影印紹介され、鄭振鐸が「『金瓶梅詞話』を談ず」と題する論文で詳細な考証を加えた。魯迅は一九三五年に増田渉訳『支那小説史』（サイレン社）に寄せた序文で、「『金瓶梅詞話』が発見され今まで通行していた同書の祖本であり、文章は今本より粗雑だがみな山東の言葉でかかれ、決して江蘇の人、王世貞でないことが確実に証明された」（原文日本語）と述べる。ただ作者や初刻本との関係について今日なお議論がたえない。なお、わが国でも日光山輪王寺蔵本、徳山毛利氏蔵本が存在する。

『新刻繡像原本金瓶梅』百回。

北大文学部紀要

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

明の崇禎年間（一六二八―一六四四）の刊。欣欣子序を省く。図百葉。『詞話』と第一回、第八十四回に大幅な変更があるほか文章にも手を加えた改訂本。

『張竹坡評金瓶梅』百回。

板心に「第一奇書」と題されている。清の康熙年間の刊。張竹坡（一六七〇―一六九八）が崇禎本に対し、金聖嘆の『水滸伝』批評にならって評語を加え、「苦孝説」などを冒頭に置き、欣欣子、弄珠客の序を省いたテキスト。もっとも流行し、そのため『詞話』はながい間その存在を知られなかった。

今日の活字本に次のものがある。

蘭陵笑笑生著、戴鴻森校点『金瓶梅詞話』（新校点本）（北京人民文学出版社、一九八五年。香港・中国図書刊行社、一九八六年重印）『金瓶梅詞話』を底本とし他本で校訂を加えたほか、猥褻にわたる描写一九、一六一字を削って、削除個所を明示した。

翻訳に次のものがある。

小野忍・千田九一訳『金瓶梅』上・中・下（中国古典文学大系、平凡社、一九六七、六八、六九年）『金瓶梅詞話』を底本とする。

小野忍・千田九一訳『金瓶梅』全十冊（岩波文庫）前者の改訂本。

このほかに淫蕩のことを描いて『金瓶梅』より甚しいものに『玉嬌李』があります。ただしこの書は清代になると散逸し、たまに見かけるものも原本ではありません。さらにもう一種、山東諸城の人丁耀亢（ていようこう）がつくった『続金瓶梅』がありますが、前書とかなり異なり、『金瓶梅』に対する因果応報を述べたものです。つまり武大は来世で淫夫に生れ変わり、潘金蓮も河間の婦（淫婦）に変じて、ついには極刑を受け、西門慶は痴呆の男に変じて、妻妾たちの姦通をただ坐視するだけというもの――もって輪廻の誤たざるを知らしめようというわけです。[1] これよりのち世情小説はは っきりと応報を説く書に一変し――勧善の書となるわけです。このように来世のことを述べる小説は、もし三世、

四世と推しのばしていきますと、いつまでもつづけられるわけで、まことに奇怪、奇妙なやり方であります。しかし古代インドにはこのようなものが存在しました。『鷲堀摩羅経』[2]はその一例です。

以上述べましたように、世情小説は一面で因果応報を説く書に変遷していきましたが、もう一面で別種の反動を起こしました。それはいわゆる「温柔敦厚」[3]を語るもので、『平山冷燕』、『好逑伝』、『玉嬌梨』をもって代表とすることができます。[4]ただこれらの書も、書名は多く『金瓶梅』を踏襲し、しばしば登場人物の姓名から一字ずつを取って書名としています。しかし内容のほうは、淫夫蕩婦の物語ではなく、才子佳人の物語に変りました。才子というのは、たいてい詩が上手ですから、才子佳人の出会いは、いつも詩作によって媒介されます。これは、「父母の命、媒妁の言」[5]にもとる婚姻ですから、旧い習慣に対して抵抗の意味があるように見えますが、団円のときになりますと、いつも勅命を奉じてめでたく結婚ということになるのです。私たちは作者がいっそうごりっぱなお墨付をさがしあてたことを知ります。これらの書は、文章もすぐれたものはありませんが、外国ではたいへん有名です。一つには、『玉嬌梨』、『平山冷燕』にフランス語訳が、『好逑伝』にはドイツ語とフランス語の訳があって、中国文学の研究者は誰もが知っており、中国文学史を書く場合たいていこれらの作品に言及しているからです。二つには、もし一夫一婦制の国柄で、一人以上の佳人が一人の才子を同時に愛したとなりますと、きっとたいへんなもめごとが起きるでしょう。ところがこれらの小説ではまったく問題なく、いとも簡単に結婚するわけです。これが彼らから見ると実にめずらしく、おもしろいということになるからです。

(1)『玉嬌李』=『玉嬌麗』とも題す。明代の作で、作者はわからない。『金瓶梅』と並び称されたが、清代には散逸した。次に『続金瓶梅』のあらすじとして述べられているのは、実は『玉嬌李』のもの。これは沈徳符『野獲編』の記述にあり、『中国小説史略』

訳注 魯迅「中国小説の歴史的変遷」

ですでに紹介されているが、この講演では不注意のミスをおかしたものと思われる。『続金瓶梅』＝六十四回。清の順治（一六四四―一六六一）年間の刊。清の丁耀亢（一五九九―一六六九）の作。『金瓶梅』の人物たちの来世の姿を描く。

（2）『鬱堀摩羅経』＝（劉）宋の求那跋陀羅（クナバトラ）によって漢訳された大乗仏典。鬱堀摩羅（アングリマーヤ）が釈伽によって救済される物語を述べる。

（3）「温柔敦厚」、温和で寛容なこと。『礼記』「経解」の孔子の言葉「温柔敦厚は詩（『詩経』）の教えなり」に出る語。

（4）『平山冷燕』＝二十回。清初の作。「荻岸山人編次」と題す。才女山黛、冷絳雪と書生燕白頷、平如衡との婚姻を述べる。現行の活字本に、荻岸山人編次、李致中校点『平山冷燕』（明末清初小説選刊、春風文芸出版社、一九八二年）、逸名著、馮偉民校点『平山冷燕』（中国小説史料叢書、人民文学出版社、一九八三年）がある。『好逑伝』＝十八回。清初の作。又名『俠義風月談』。「名教中人編次」と題す。鉄中玉と水氷心との婚姻を述べる。活字本に、名教中人著『好逑伝』（広東人民出版社、一九八〇年）がある。『玉嬌梨』＝二十回。又名『双美奇縁』。「荑秋散人（あるいは荑荻散人、荻岸散人につくる）編次」と題す。明末清初の作。書生蘇友白と高官の娘白紅玉（「無嬌」と改名）、盧夢梨との婚姻を描く。活字本に、荑秋散人編次、馮偉民校点『玉嬌梨』（中国小説史料叢書、人民文学出版社、一九八三年）、荑荻散人編次、韓錫鐸校点『玉嬌梨』（明末清初小説選刊、春風文芸出版社、一九八一年）がある。これらの作品は今日一般に「才子佳人小説」と称され、中篇のものが多い。

（5）「父母の命、媒妁の言」、もと『孟子』「滕文公下」の「父母の命、媒妁の言を待たずして、穴隙を鑽ち、牆を踰えて相従わば、則ち父母、国人皆これを賤しまん」に出る語。強固な家族制度のもとでこの原則はきわめて厳格であった。

第六講　清代小説の四派およびその末流

清代の小説の種類およびその変化は、明代より比較的多いのですが、時間の関係で、ここでは四派に分けて大体の流れをお話しするにとどめさせていただきます。四派というのは、

一、擬古派　二、諷刺派　三、人情派　四、俠義派

ということになります。

一、擬古派

擬古というのは、六朝志怪を模倣したもの、あるいは唐代伝奇を模倣したものを指していいます。唐人小説の単篇のテキストは、明代までに九割かたは散逸してしまいました。たまたまこれを模倣したものを見ますと、世間では新鮮な感じをもちました。元末明初にまず銭唐の瞿佑が唐人伝奇を模して『剪燈新話』をつくりました。文章は力に欠けますが、艶麗な文辞で婦女の心情を描きましたので、当時の人々に大いにむかえられ、模倣者がたくさん出ました。(1) のちに朝廷の禁止を受けて、この風潮はようやく衰えていきました。ところが嘉靖年間になりますと、唐代の伝奇小説が広く読まれるようになり、模倣者も続々として出現しました。文人たちはたいていこのんで数篇の伝奇体の文章を書いています。もっぱら小説をつくり、合わせて一集にしたものでは、『聊斎志異』がもっとも有名です。

『聊斎志異』は、山東淄川の人蒲松齢の作です。ある説では、彼は筆を取るまえに、毎日門前に茶と煙草を準備し、道行く人に物語を話してもらい、作品の材料としたということです。しかし多くは友人のところから聞いたもの、より多くは古書、特に唐人伝奇を改編したもので――「鳳陽士人」、「続黄粱」などがそうです(2)――それで擬古の中に入れるのです。述べられているのは、多く神仙、狐鬼〔狐と幽霊〕、精魅などの物語で、当時書かれた同類の書と大差ないのですが、そのすぐれたところは、次の二点にあります。

(一)、描写が詳細で委曲をつくし、筆致が変幻自在で練達していること。

(二)、妖怪の物語でありながら、よく人情をそなえ、世情に通じて、おのずから親しみを与え、恐怖を感じさせない

こと。

だが、典故の使用が多すぎて、一般の人が読むのは、容易ではありません。(3)

『聊斎志異』は、出現後約百年にわたって広く流行しますが、この間これを模倣し、賛美する者が多数をきわめました。しかし乾隆末年になって、直隷献県の人紀昀が現れて、反対を唱えました。紀昀は『聊斎志異』の欠点は二つあるといいました。

㈠、体例があまりに雑然としていること。つまり一人の作家の一つの作品中に、二つの時代の文章の体例が混じっていてはいけないということです。これは『聊斎志異』の中に、唐人伝奇を模した長い文章と、六朝志怪に近い短い文章とが併存しているからです。

㈡、描写が詳細にすぎること。つまり彼の作品が他人の事跡を述べながら、つねに過度に委曲細微を尽くして、本人でなければ知りえないこと、その中の多くは本人が話したがりそうもないことを書いており、作者はどうしてこれを知りえたのか、ということです。(4)

紀昀はこの二つの欠点を避けるという立場から、彼のつくった『閲微草堂筆記』では、完全に六朝を模倣し、質実を重んじて華美をしりぞけ、簡古な叙述で、つとめて唐人の作法を避けています。その材料はおおむね自分で編んだもので、多くは狐鬼の話を借りて、社会を攻撃したものです。(5)私の見るところでは、彼自身は狐鬼を信じていなかったと思われます。ですが彼は、一般の愚かな人々に対しては、神道によって教化を加えるほかはない、と考えたのでしょう。しかし彼にはなかなか尊敬すべき点があります。彼は乾隆年間(一七三六―一七九五)という法紀のもっともきびしい時代に生きながら、あえて文章で社会の不合理や誤れる習俗に攻撃を加えました。当時の眼光をもって見るな

らば、まことに勇気ある人物といわねばなりません。[6] しかしその末流となると、彼の社会攻撃の精神を理解できず、ただ神道による教化という面にのみ学びました。そのため、この派の小説もまたほとんど勧善の書となってしまいました。

擬古派の作品は、この二書の出現後、みなこれに学びました。今日になっても、たとえば上海でも、これを模倣している一群のいわゆる文人たちがいます。けれども彼らは何ほどの成績もあげておりません。彼らが学んだのはおおむねその糟粕であって、そのため擬古派もまたすでにその信徒たちの足もとに踏みつぶされてしまったのです。

(1)『剪燈新話』＝明の瞿佑（一三四一―一四二七）作の文言短篇小説集。成化三年（一四六七）刊本あり。瞿佑、字は宗吉、官は周王府長史にいたる。底本が『剪燈新語』とするのは誤植であろう。この流れを汲む明代の作の重要なものに次の二種がある。『剪燈余話』＝明の李昌祺（？―一四五一）の作。成化三年（一四六七）の刊本あり。李昌祺、昌祺は字、名は禎。永楽二年（一四〇四）の進士、翰林院庶吉士、礼部郎中などに任じ、『永楽大典』の編集に参加した。『剪燈余話』は永楽年間（一四〇三―一四二四）の作と見なされる。『覓灯因話』＝明の邵景詹（生没年不詳）の作。三者を合わせた活字本に次のものがある。

瞿佑等著、周楞伽校注『剪灯新話』（外二種）（上海古籍出版社、一九八一年）

翻訳は、飯塚朗訳が『剪燈新話・余話　西湖佳話（抄）　堂陰比事』（中国古典文学大系、平凡社、一九六九年）に収められているほか、次のものがある。

飯塚朗訳『剪燈新話』（東洋文庫、平凡社、一九六五年）

(2)「鳳陽士人」は白行簡『三夢記』、薛漁思『河東記』中の「独孤遐叔」などの改作であり、『続黄梁』は沈既済の『枕中記』にもとづく。

(3)『聊斎志異』＝清の蒲松齢（一六四〇―一七一五）作の文言短篇小説集。約二百四十篇の作者手稿本が保存されている。蒲松齢、字留仙。山東淄川（今の山東省淄博）の人。早くから文名が高く、十九歳のとき県試、府試、院試ともに第一位で生員（秀才）と

訳注　魯迅「中国小説の歴史的変遷」

なったが、郷試はいくど受けても落第をつづけ、七十一歳のときようやく貢生に補せられた。一生のうち、一年間宝応県知県の幕客となったほかは、郷里で塾の教師をつづけた。『聊斎志異』のほかに、『聊斎詩集』、『聊斎文集』、『聊斎俚曲』などの著作がある。わが国で書かれた蒲松齢の伝記に、前野直彬『蒲松齢伝』（秋山書店、一九七六年）がある。

写本に、『鋳雪斎抄本聊斎誌異』十二巻（乾隆十六年〔一七五一〕抄本）、近年郷里の近くで新たに二十四巻抄本（乾隆年間のものかと見られており、手稿本に近い）が発見された。刊本は少くないが、現存最古のものに、乾隆三十一年（一七六六）刊の青柯亭刻本がある。

現行の活字本に次のものがある。

蒲松齢著、張友鶴輯校『聊斎誌異』会校会注会評本（全四冊）（上海古籍出版社、一九七八年新版）

蒲松齢著『聊斎誌異』二十四巻抄本（斉魯書社、一九八一年）

翻訳には次のものがある。

柴田天馬訳『聊斎志異』（角川文庫）

増田渉・松枝茂夫・常石茂訳『聊斎志異』上・下（中国古典文学大系、平凡社、一九七〇、七一年）

（4）以上の二点は、『閲微草堂筆記』の「姑妄聴之」の章の跋で紀昀の弟子盛時彦が師の言として伝えるもの。

（5）『閲微草堂筆記』＝清の紀昀（一七二四―一八〇五）作の文言短篇小説集。紀昀、字は暁嵐。乾隆十九年（一七五四）の進士。官は礼部尚書、協辦大学士にいたる。『四庫全書』の総纂官として、『四庫全書総目提要』の纂定にあたった。『閲微草堂筆記』は、「灤陽消夏録」、「如是我聞」、「槐西雑志」、「姑妄聴之」、「灤陽続録」の四部から成り、乾隆五十四年（一七八九）から嘉慶三年（一七九八）にかけて書きつがれ（その過程で伝写されて読まれた）、嘉慶五年（一八〇〇）に盛時彦によって刊行された。現行の活字本に次のものがある。

紀昀著『閲微草堂筆記』上・下（上海古籍出版社、一九八〇年）

なお、同時代の同じ流れを汲む代表作に、袁枚（一七一六―一七九八）の『子不語』がある（のちに『新斉諧』と改題）。「子不語」は『論語』の「子は怪力乱神を語らず」（「述而」）から取ったもの。活字本に次のものがある。

袁枚著、朱純点校『子不語』（岳麓書社、一九八五年）

袁枚著、崔国先校点『新斉諧—子不語』（清代筆記小説叢刊、斉魯書社、一九八六年）

『閲微草堂筆記』、『子不語』の翻訳に次のものがある。

前野直彬訳『閲微草堂筆記（抄）　子不語（抄）他』（中国古典文学大系、平凡社、一九七一年）

(6)『閲微草堂筆記』の社会批判、特にその道学者批判については、後年の魯迅は次のように述べている。

「特に道学先生を攻撃することは、……当時の風潮であり、『聖意』でもあった。私たちがよく見るのは、紀昀の編纂した『四庫全書総目提要』と彼の自著『閲微草堂筆記』にくりかえされる排撃である。これはこの風潮に迎合したものであって、彼が温和で親しみやすい人柄であるために、道学先生の苛刻さを憎んだのだと考えるならば、それは誤解である」（「『小学大全』を買うの記」、一九三四、『且介亭雑文』）

二、諷刺派

小説の中に諷刺や誹謗をこめることは、晋や唐にもすでにあったことですが、明代の人情小説(1)ではとりわけ多くなりました。ところが清代では、諷刺小説は逆に少なくなります。有名で、ほとんど唯一ともいえる作品が『儒林外史』です。『儒林外史』は安徽全椒の人呉敬梓の作です。敬梓は見聞が広い上に表現にたくみでしたので、その述べるものすべて紙上にその声を聞き、その姿を見る思いがいたします。特に儒者たちの奇怪な生態の描写は、たいへん多面的で詳細です。当時は明の滅亡からまだ百年とたっていませんでしたので、明末の遺風はまだ士大夫層の中にのこっており、八股文(2)のほかは、何も知らず、何の能力もありませんでした。敬梓自身士大夫層の出身で、彼らの生態をよく知っていましたので、その醜態の暴露はことのほか詳細です。この書は定まったすじのない断片の叙述をかさねていくものですが、変化に富み、味わいも深くて、中国歴代の諷刺小説の作者で、彼の右に出る者はいません(3)。

清末になって外交上の敗北がつづきますと、人々は自分たちの国勢の不振を自覚するようになり、なぜそうなった

のか、その原因を知りたいとつよく思うようになりました。小説家たちもその原因の所在をたずねようとしました。李宝嘉は官僚の世界に罪があると考え、南亭亭長のペンネームで『官場現形記』を書きました。この書は清末にたいへんよく読まれましたが、文章は『儒林外史』よりずっと劣ります。その上作者の官僚世界の内情についての観察もあまり深くなく、そのためしばしばリアルさに欠ける点があります。(4) これをついで広東南海の人呉沃堯は、社会道徳の消滅に罪ありと考え、我佛山人のペンネームを用いて、『二十年目睹之怪現状』を書きました。この書もたいへんよく読まれました。しかし彼の社会の暗黒面の描写は、誇大な言辞が多く、また隠れた部分の追求が弱く、慷慨激昂をくりかえすという、南亭亭長とまったく同様の欠点を免れていません。(5) 両書とも断片的な物語をつづり合せたもので、特に一貫したすじや主人公がいるわけではありません。これは『儒林外史』とほとんど同じです。しかし芸術的な手腕はずっと劣ります。一目瞭然であるのは、『儒林外史』が諷刺であるのに対し、この二つはいずれも漫罵に近いということです。

諷刺小説の生命は主題をむき出しにせず、言葉を婉曲にするところにあり、言葉が誇張に過ぎると、文学的価値は失われてしまいます。その末流はいずれもこの点を顧みず、そのため諷刺小説の流れは、『儒林外史』以後絶えてしまうことになりました。(6)

(1) 人情小説、魯迅は『中国小説史略』では、『金瓶梅』を個別的には「世情書」としながらも、大きく「人情小説」の話でくくっていた(同書第十九篇「明の人情小説」(上)。第二十篇「清の人情小説」では『紅楼夢』などをあつかう)。この講演では「世情小説」の語が用いられており、ここは「世情小説」というべきであろう。

(2) 八股文、明・清の科挙試でとりいれられた試験用の特殊な形式的な文体。破題、承題、起講、入手、起股、中股、後股、束股の八部分からなる。議論の本文を展開する起股から束股までの四段は、それぞれ対偶的な二つの文章(両股)が用いられるので八股

文と称される。

(3)『儒林外史』=呉敬梓（一七〇一―一七五四）作の長篇小説。呉敬梓は、曽祖父の代の兄弟五人のうち四人が進士（うち曽祖父は探花つまり第三位合格者）という名門に生れた。二十三歳で父を失い、同年秀才となったが（一説ではこの二年前）、二十九歳のときに参加した郷試で排斥に遭ったのち、科挙の道を断念し、南京に移って、友人たちの援助を受けながら生活した。三十六歳のとき、安徽巡撫によって「博学鴻詞科」への推薦を受けたが、病気と称して受験しなかった。著書に『文木山房文集』、『詩説』があるが、後者は散逸してのこっていない。『儒林外史』は一七四九年以前にすで書きあげられ、写本によって読まれた。当時五十回本であったと伝えられる。今日のこっている最古の刊本は次のものである。

『儒林外史』五十六回。清の嘉慶八年（一八〇三）臥閑草堂刊本。

今日通行の活字本に次のものがある。

呉敬梓著、張慧剣校注『儒林外史』（中国古典文学読本叢書、人民文学出版社、一九八五年第七次印刷）臥閑草堂本を底本に、第五十六回を削り、校訂を加える。

呉敬梓著、南京師範学院中文系校注『儒林外史』（中国古典文学読本叢書、人民文学出版社、一九八二年第五次印刷）臥閑草堂本を底本にし、附録として第五十六回を収める。

翻訳に次のものがある。

稲田孝訳『儒林外史』（中国古典文学大系、平凡社、一九六八年）

(4)『官場現形記』=李宝嘉（字伯元、号南亭亭長、一八六七―一九〇六）作の長篇小説。六十回。一九〇一年から一九〇五年にかけて書きつがれた。他に『文明小史』六十回がある。秀才であったが、上海に出てジャーナリズム畑で仕事をする。雑誌『繍像小説』の主編であった。現行の活字本に次のものがある。

李宝嘉著、張友鶴校注『官場現形記』（人民文学出版社、一九五七年）

翻訳は、入矢義高、石川賢作訳が、『官場現形記（上）』、『官場現形記（下）　老残遊記・続集』（中国古典文学大系、平凡社、一九六八、六九年）に収められている。

(5)『二十年目睹之怪現状』=呉沃堯（我佛山人、字趼人、一八六六―一九一〇）作の長篇小説。百八回。沃堯は没落官僚地主家庭

に生れ、三十歳ころより上海でジャーナリズム畑の仕事をする。雑誌『月月小説』主筆。他に小説『九命奇冤』、『痛史』がある。

(6) 魯迅『中国小説史略』は、李宝嘉、呉沃堯らの作品を一括して「譴責小説」と呼び、諷刺小説と区別している。

三、人情派

この派の小説は、有名な『紅楼夢』をもって代表とすることができます。『紅楼夢』は初めの名を『石頭記』といい、あわせて八十回あり、乾隆の半ばに忽然として北京に出現しました。最初はみな写本でしたが[1]、乾隆五十七年〔一七九二〕にはじめて程偉元刻本が刊行されます。四十回を加えて、全百二十回、名も『紅楼夢』と改められました。偉元によれば、旧家や屑屋から収集して、完全にしたものだそうです[2]。その原本は今日めったに見られなくなりましたが、ただ一種石印本が現存します。これも原本であるかどうかはわかりませんが[3]。

『紅楼夢』に述べられているのは、石頭城内——かならずしも今の南京のことではありません——の賈家のできごとです。物語の主人公は栄国府の賈政の生みの子宝玉ですが、人にぬきんでて聡明な男子で、異性が好きでなりません。賈家にはまたすぐれた女子がまことにたくさんいます。主従のほか、親戚も多く、〔林〕黛玉、〔薛〕宝釵など、いずれも賈家にやって来て寄寓します。史湘雲もよく訪ねて来ます。その中で宝玉と黛玉はもっとも深い愛情でつながれていますが、のちに賈政は宝玉の妻に宝釵をむかえます。黛玉はそのことを知って、血を吐いて死にます。宝玉もまた鬱々として楽しまず、悲嘆して病気になります。その後寧国府の賈赦が罪を得て世職を奪われ、財産を没収され、累は栄国府にまでおよびます。こうして家庭は衰退に傾き、宝玉はついに正気を失いますが、その後また突然に行いを改め、挙人に合格します。ところがまもなくまた忽然として行方をくらまします。のちに賈政は母を故郷に葬って毘陵にさしかかったところ、坊主頭にはだしの男が、彼に向かって拝礼しているのを見つけます。よく見るとそ

れが宝玉でした。賈政が声をかけようとしますと、つと一人の僧と一人の道士が現れて、男を連れて行きます。追いかけますがもうその姿はなく、目の前には白茫々たる一面の荒野が広がっているだけでした。(4)

『紅楼夢』の作者は曹雪芹であるとみな知っています。それはこの書にそう書いてあるからです。ところが曹雪芹がどんな人物であるのかということを問題にした人は少なかったのです。今日では胡適之先生の考証によって、その大体を知ることができるようになりました。(5)雪芹は、名は霑、他の字を芹圃といい、漢軍旗人(6)でした。彼の祖父の名は寅、康熙年間に江寧織造となりました。(7)清の世祖の南巡にさいして、この織造署が行宮となりました。(8)父の頫も、同じく江寧織造となりました。このことから作者が幼いころほんとうに名門の子弟であったことがわかります。その後途中にどんな変事があったのか、家庭は突然に没落しました。雪芹は中年にはついに北京の西郊にわび住居し、食べるものにこと欠くこともありました。しかしそれでも彼は酒にふけり、詩を詠みつづけました。『紅楼夢』の創作もこのころのことです。ざんねんなことにその後息子に早死にされ、悲しみのあまりついに倒れてしまいました——享年四十余歳——『紅楼夢』も未完のまま八十回で中断しました。(9)のちに程偉元が刊行しましたのは、百二十回に増え、各所から捜し集めたものと称していますが、実は程の友人の高鶚が続きを書いたもので、原本ではありません。

(1)『紅楼夢』の作者曹雪芹は全百回の構想で書きすすめ、いくども改訂を重ねながら、八十回まで書き上げたところで死んだが、未定稿は八十回以後ものこされていたと見られる。しかしそれも彼の死後散逸した。この作品の著作には作者生前から、脂硯斎、梅渓、畸笏その他の人々が参与し、批注を加えていたが、彼らによる加注稿が伝写されて読まれた。それらは『脂硯斎重評石頭記』と称され、数種が現存する。そのもっとも古いものは、乾隆十九年（一七五四）成立のもので「甲戌本」と呼ばれている（十六回存）。おくれて乾隆二十五年（一七六〇）成立の「庚辰本」は七十八回を存し、同四十九年（一七八四）の「甲辰本」は八十回を存している。

また、一九五九年に北京で百二十回の写本が発見され、その後『乾隆抄本百二十回紅楼夢稿』の名で影印出版された（中華書局、一九六三年、上海古籍出版社、一九八四年重印。「全抄本」とも『紅楼夢稿』とも呼ばれる）。この写本の性格、成立についてはさまざまに議論されているが、抄写時期は「庚辰本」と「甲辰本」の間と推定され、前八十回の底本は脂硯斎本とされるが、後四十回の底本の作者はわからない。全回に塗改が施され、第七十八回末に「蘭墅閲過」と朱書されているため、高鶚（蘭墅は字）、程偉元が刊本作成のために修改を加えたものであろうとされる（ただし刊本の最終稿ではない）。

（2）程偉元（一七四二？―一八一八？）の刊本は、木活字印刷で最初乾隆五十六年（一七九一）に『新鐫全部繡像紅楼夢』と題して刊行され、ついで翌年その改訂版が出された。前者を「程甲本」、後者を「程乙本」と略称する。「程乙本」は改訂本であったが、その後流行したのは「程甲本」であった。刊行者程偉元の序文には、原本の目録に百二十回とあるが、手元に八十回しかなく、方々手を尽くしてようやく二十余回を集め、さらに大道の露店で十余回を見つけ、重価をもって入手した、ぼろぼろの原稿に友人高鶚と協力して修訂、補削を加えて刊行する……とある。

『紅楼夢』に対してはじめて近代的な研究を加えた胡適「紅楼夢考證」（一九二一）は、(1)、『紅楼夢』前八十回の作者が曹雪芹であること、(2)、後四十回は高鶚がそれにつづけた続作であること、(3)、『紅楼夢』は作者曹雪芹の自叙伝であること、を考証したものであるが、これによって百二十回すべてを入手したとする程偉元の言は仮託とされた。この高鶚続作説はながく定説となってきたが、その後の研究の進展と前出『紅楼夢稿』（「全抄本」）の発見などによって、しだいに疑問視されるようになり、今日では、程・高を「修訂」者とする見解がむしろ一般的である。高鶚（一七四五？―一八一五？）、字は蘭墅、紅楼外史とも号す。漢人であるが満州八旗中の鑲黄旗に属する旗人。現存する著書に『蘭墅硯香詞』、『月小山房遺稿』がある。

（3）清の戚蓼生（乾隆三十四年〔一七六九〕の進士。没年は乾隆五十七年〔一七九二〕）の序をもつ脂硯斎本系の写本八十回にもとづく石印本。『国初抄本原本紅楼夢』（上海有正書局、民国元年〔一九一二〕の刊行とされる）と題す。略称「戚本」。

（4）以上は百二十回の梗概。『紅楼夢』の今日通行の活字本に次のものがある。

曹雪芹著、兪平伯校訂、王惜時参校『紅楼夢八十回校本』全四冊（人民文学出版社、一九五八年）「戚本」を底本として、他本で校訂を加える。附録として「程甲本」の後四十回を収める。

曹雪芹・高鶚著『紅楼夢』全四冊（人民文学出版社、一九七二年九版）「程乙本」を底本として、他本で校訂を加える。有注。

曹雪芹・高鶚著、中国芸術研究院紅楼夢研究所校注『紅楼夢』上・中・下（人民文学出版社、一九八二年）。前八十回は「庚辰本」、後四十回は「程甲本」を底本とし、他本で校訂を加える。

潘重規校定『校定本紅楼夢』（中国文化大学中文研究所印行、一九八三年）「全抄本」を底本とし、抄本に対して増删された文字は朱刷りで示し、他本で校訂を加える。

翻訳には次のものがある。

伊藤漱平訳『紅楼夢』上・中・下（中国古典文学大系、平凡社、一九六九、六九、七〇年）『紅楼夢八十回校本』を底本とする。

松枝茂夫訳『紅楼夢』全十二冊（改訳版）（岩波文庫）『紅楼夢八十回校本』を底本とする。

飯塚朗訳『紅楼夢』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（集英社版世界文学全集、一九八〇年）前記一九七二年人民文学社版を底本とする。

（5）胡適「紅楼夢考證」（前出）。

（6）旗人、清の八旗に属する者をいう。八旗は清朝独特の軍事、行政組織。旗の色によって正黄、正紅、正白、正藍、鑲黄、鑲紅、鑲白、鑲藍の八隊に分けられたため八旗という。曹雪芹の祖先は代々瀋陽地方に居住し、満州族の入関以前に帰服して、満州正白旗に属した。高鶚も同じく鑲黄旗に属する漢人であった。

（7）曹寅（一六五八―一七一二）、父璽は、江南織造局の初代監督。母孫氏は康熙帝の乳母であったため、寅は康熙帝の学友として信任が厚く、父をついで江南織造となり、巡視両淮塩漕監察御使を兼ねた。騎射とともに詩・詞・曲にすぐれ、著書に『楝亭詩鈔』があるほか、『全唐詩』、『佩文韻府』の刊行を宰領した。

（8）世祖とあるのは、聖祖が正しい。康熙帝のこと。織造署は政府宮廷所用の絹織物を生産する政府機関。清朝では江寧（南京）、蘇州、杭州に設置された。監督（織造）は内務府の郎中、員外郎から任命され、情報機関を兼ねた。康熙帝は江南巡遊をこのんだが、六回のうち四回江寧織造署を行宮としている。

（9）曹頫の生没年は一七一五（または一六）―一七六三（または六四）と推定されている。父璽も江寧織造となったが、康熙帝の死後まもない雍正五年（一七二七）、公金費消の罪名で罷免、家産没収となった。

この作品にこめられた意味についても、多くの推測の説があります。比較的重要なものをあげておきます。

㈠、納蘭性徳の家のことを述べたとするもの。いわゆる金陵十二釵は、性徳が尊客として遇していた人々にあたります。性徳が詞人で、若くして挙人となり、彼の家ものちに家産没収にあいました。それが宝玉の状況と似ているというので推測されたものです。[1] しかし家産没収のことは、宝玉は生前、性徳は死後ですし、ほかにもちがう点が多く、それゆえ実際はあまり似ていないのです。

㈡、順治帝と董鄂(とうがく)妃の故事を述べたとするもの。さらにこの説は鄂妃をもと秦淮(しんわい)の芸妓であった董小苑とするものです。清軍が南下してきたときに北京へ連れ去られた小苑が、そこで清の世祖の寵を受け、貴妃に封ぜられますが、その後若くして死んだため、世祖は深く悲しみ、出家して五台山の和尚となります。『紅楼夢』の宝玉も和尚となりますが、これはひそかにこの故事を指しているのだというものです。[2] ところが董鄂妃は満州人ですので、董小苑ではありません。清軍が南下してきたとき、小苑はすでに二十八歳、一方順治はわずか十四歳でした。小苑を妃とすることなどありえません。それでこの説も成り立たないことになります。

㈢、康熙朝の政治の有様を述べたとするもの。つまり、石頭記は政治小説であり、作品の意図は、明の滅亡を弔い、清の悪政を暴こうとするところにある、というものです。たとえば「紅」は「朱」を意味し、「石頭」は「金陵」を指し、「賈」によって偽朝――つまり「清」をしりぞけ、金陵十二釵によって清に降った名士たちをそしったとするものです。[3] しかし、この説はあまりにうがちすぎといわざるをえません。まして今日では、作者が漢軍旗人であるからには、彼が漢人を代表して亡国の痛苦を抱くようなことはあるまいということがわかっているのですから。

㈣、自分のことを述べたとするもの。この説はもっとも早く出されながら、信じる者はもっとも少なく、今日にな

ってようやく多くなってきたものです。[4] といいますのは、私たちはすでに雪芹自身の境遇がこの書の叙述とたいへん似ていることを知っているからです。雪芹の祖父も父も江寧織造でしたし、その家庭の豪奢さは、賈家とほぼ同様です。雪芹がまた幼時一人の貴公子として生長したことは、宝玉と似た点があります。そしてその後突然の困窮が、もし家産没収かそれに類する異変によるものとするならば、情理も通じます――このことから、『紅楼夢』という作品は大部分作者が自分のことを述べたものだとするのが、実はもっとも信ずべき説であることがわかります。[5]

『紅楼夢』の価値という点になりますと、中国の小説の中では、まことに得がたいものであります。その主要な価値はあえて虚飾を捨て、リアルな描写を行なっている点にあります。それまでの小説が善人を描けばすべてによく、悪人を描けばすべてにわるいのとは、大きなちがいです。そのため描かれている人物は、みな真実の人間になっています。いずれにせよ、『紅楼夢』が出現してより、伝統的な思想と表現方法はすべて打破されました――その文章の優美と纏綿(てんめん)は主要なことではありません。しかし、青年たちにわるい影響を与えると考える反対者も多数います。これは、中国人が鑑賞するという態度で小説を味わうのではなく、自分を物語の中に没入させ、何が何でも作中人物の一人になりきらないと気がすまないせいであります。そのため、青年たちは『紅楼夢』を読むと宝玉や黛玉になった気になり、老人たちはまた宝玉の自由をしばる賈政の立場に立ってしまい、利害の打算に心を占められて、ほかのものは何も目にはいらなくなってしまいます。

『紅楼夢』以後、たいへん多くの続作がつくられました。『後紅楼夢』、『続紅楼夢』、『紅楼後夢』、『紅楼復夢』、『紅楼補夢』、『紅楼重夢』、『紅楼幻夢』、『紅楼円夢』など[6]……おおむね原作の人生の欠陥を救い、団円(ハピー・エンド)で終らせています。道光年間〔一八二一―一八五〇〕にまでなりますと、『紅楼夢』を語ることはようや飽きられてきました。しか

し普通の人間の家庭のことを述べようとすると、佳人は少なく、事件も多くありませんから、『紅楼夢』の筆調で俳優や妓女のことを描くようになり、場面はまた一変しました。『品花宝鑑』、『青楼夢』をもって代表とすることができます。『品花宝鑑』はもっぱら乾隆以来の北京の俳優たちのことを描いたものです。作品の人物は『紅楼夢』とは異なりますが、やはり纏綿とした描写を主とし、描かれている俳優と狎客も、佳人と才子に近いのです。(7)『青楼夢』は全篇妓女のことを語っていますが、その姿は現実を描写したものではなく、作者の理想を述べたものです。作者は才子の知己は妓女しか存在しないと考えていますが、若干の波風を経てめでたく団円となるのは、明末の佳人才子の流れを脱け出ることができないでいることを示しています。(8)

光緒年間〔一八七五―一九〇八〕の中ごろ、『海上花列伝』が出現します。これも妓女を描いていますが、妓女の中によい女性もいれば、わるい女性もいると考えられており、比較的写実に近くなっています。(9)これが光緒末年になりますと、『九尾亀』のような作品が現われ、描かれている妓女はすべて悪女で、嫖客もごろつきのようになり、『海上花列伝』とまたちがった作品となります。(10)このように、作者たちの妓女に対する描き方は、あわせて三度変化しました。最初は美化され、中ごろは写実にちかづき、最後は醜悪化されました。そればかりか、ことさら誇張、漫罵が加えられるようになりました。あまつさえ中傷、ゆすりにすぎない作品もあります。人情小説の末路がここにいたったとは、まことにふしぎな気持がいたします。(11)

(1) 陳康祺『燕下郷脞録』の説。納蘭性徳（一六五五―一六八五）、清代の著名な詞人。満州正黄旗人。詞集に『飲水詞』がある。

(2) 王夢阮、沈瓶庵『紅楼夢索隠』の説。順治、清の世祖、在位一六四四―一六六一。

(3) 蔡元培『石頭記索隠』の説。明朝は朱姓であり、「朱」は漢民族を指す。たとえば大観園の賈宝玉の住居「怡紅院」は明朝への愛惜を示す。「石頭」＝「金陵」は南京で明の故都。「賈」は「仮」と同音で、ひそかに「仮朝」（＝「偽朝」）の意を託す。金陵十二釵

については、林黛玉が朱彝尊、薛宝釵が高江村、王熙鳳は余国柱などと、それぞれ明朝の遺臣で清明に出仕した者たちをあてる。

(4) 早く乾隆期の高名な詩人袁枚の『随園詩話』(一七九二年)に見える説。近代にはいって、胡適「紅楼夢考證」(前出『中国章回小説考証』所収)が主張して広く受け入れられた。

(5) 晩年に魯迅は、曹雪芹自伝説とはやや距離を置いた見解をとり、次のように述べる。

「たとえば『紅楼夢』の賈宝玉のモデルは作者自身の曹雪芹であり、『儒林外史』の馬二先生のモデルは馮執中〔正しくは馮粹中〕であるが、今日私たちが感じるのは賈宝玉であり馬二先生であるのであって、胡適之先生のような特殊な学者だけが、曹霑と馮執中とを終始心にかけて忘れないのである」(「『出関』の〝関〟」、一九三六、『且介亭雑文末編』)

曹家に関する事実を描いた作品と理解されないための韜晦の意味があったとはいえ、曹雪芹には明確な虚構の意識が存在した。伊藤漱平氏は、「霑はフイクションの形をとることにより、初めて自己の前半生の『真実』を語ることができた。のみならず家の歴史をもその崩壊の過程として把えることができたのである」と述べる(中国古典文学大系版『紅楼夢』「解説」)。

(6) 『後紅楼夢』=三十回、逍遙子作。活字本に、逍遙子撰、韓錫鐸・卜維義校点『後紅楼夢』(紅楼続書選、春風文芸出版社、一九八五年)がある。『続紅楼夢』=秦子忱作の三十巻本と「海圃主人手制」の四十回本がある。『紅楼後夢』=未詳。『紅楼復夢』=「紅香閣小和山樵南陽氏編輯」と題する百回本。『紅楼補夢』=「帰鋤子」署名の四十八回本『紅楼夢補』のことか。『紅楼重夢』=未詳。『紅楼幻夢』=花月痴人作の二十四回本。『紅楼円夢』=夢夢先生作の三十一回本。

(7) 『品花宝鑑』=六十回。陳森作。道光二十九年(一八四九)刊。

(8) 『青楼夢』=又名『綺紅外史』。六十四回。兪達作。「青楼」は妓楼のことをいう。光緒十四年(一八八八)刊。

(9) 『海上花列伝』=六十四回。韓邦慶作。「海上」は上海のこと。呉語で書かれている。光緒十八年(一八九二)発表。通行の活字本に、韓邦慶著、典耀整理『海上花列伝』(中国古典文学大系、平凡社、一九八二年)、翻訳に、太田辰夫訳『海上花列伝』(中国古典文学大系、平凡社、一九六九年)がある。

(10) 『九尾亀』=百九十二回。張春帆作。光緒・宣統の間(一九〇八ころ)の刊。

(11) 魯迅『中国小説史略』は『品花宝鑑』、『青楼夢』、『海上花列伝』などを「狭邪小説」と呼ぶ。「狭邪」は「狭斜」とも書き、妓楼などのある一帯を指す語。

北大文学部紀要

四、俠義派

俠義派の小説[1]は、『三俠五義』をもって代表とすることができます。この書の起源は、もともと茶館で語られていた説書でした。のちに筆の立つ文人がこれを書写し、世間に読まれるようになりました。当時の小説には、『紅楼夢』などもっぱら男女の情を述べたもの、『西遊記』のようにもっぱら妖怪のことを語ったものがありましたが、人々はおそらくそれらに飽きていたのでしょう、『三俠五義』が新しい一面を切り開くと、たいへんめずらしく、そのため流行も特に速く、特に盛んでした[2]。潘祖蔭が北京から杭州に帰ったさい、携えたこの書を俞曲園に示しましたところ、曲園は大いに感心しましたが、そのあまりに史実にもとるのをきらって、第一回を書き改め、さらに主要人物の北俠〔紫髯伯欧陽春〕、南俠〔徹地鼠韓彰〕、双俠〔丁兆蘭と丁兆蕙〕が実はすでに四人であり、三でくくれないところから、艾虎と沈仲元と〔智化と〕を加えて、そのまま題名も『七俠五義』と改めました。この改訂本は、今日江蘇、浙江方面には広く普及しています[3]。

しかし、『三俠五義』も一時期に創作された書ではありません。宋の包拯は裁判が公正、剛直で、『宋史』にも伝のある人物ですが[4]、民間伝説ではその事跡に神秘的なところが多く、元朝では物語として伝えられ、明代でしだいに小説に発展していきました。これが『龍図公案』です。その後さらに緊密な構成をそなえるようになり、大部の『龍図公案』が成立しました[5]。これが『三俠五義』の藍本です。これは世間でたいへん歓迎されましたので、その後『小五義』、『続小五義』、『英雄大八義』、『七剣十三俠』、『七剣十八義』など、続々と出現しました[6]——これらの小説はたいてい義俠の士が盗賊を駆除し、反乱を平定することを述べ、そしてその中にはすべてを宰領する名臣や高官が存在するものです。これらに先立って『施公案』が、同じころには『彭公案』の類の小説が出現し、たいへんよく読まれま

した。[7] これらに描かれている俠客たちは、大半が豪爽な人物で、『水滸』の人物にたいへんよく似ています。したがって事実は『龍図公案』から出ていますが、源流はやはり『水滸』から出ているのです。ただ『水滸』の人物が政府への反抗者であるのに対し、この種の小説の人物たちは、政府を援助します。ここが作者の思想の大いに異なる点ですが、これもおそらく社会的背景の相違によるものでしょう。

これらの書は、たいてい光緒初年に出現しています。そのまえに数度、長毛、捻匪、教匪などの反乱を平定する国内戦争があり、[8] 多くの市民や粗暴無頼の徒が従軍し、軍功によって官位を得る者が多かったため、人民はたいへん羨んで、このんで「王のために前駆（さきがけ）」となる物語を聴こうとしました。そこで茶館で生まれた小説も、自然とその影響を受けました。現在までに『七俠五義』がすでに二十四集まで、『施公案』が十集まで、『彭公案』は十七集まで出ました。しかしたいてい千篇一律で、言葉の通じないところも多く、ここであまり批評することはしませんが、ただ作者も読者も、よくも面倒とも思わずづづけたものと、奇跡のような感じがします。

以上お話ししました四派の小説は、今日でもまだ広く読まれています。このほかにも小さな流派がありますが、すべて省略するほかありません。民国以後（一九一二年以後）起こった新派の小説は、まだ幼く——只今発達、創造の過程にあり、あまり大きな著作はありませんので、これもここではふれないことにいたします。

私のお話しします『中国小説の歴史的変遷』は、今日これにて終りとさせていただきます。この二週間あわただしく大略のみをお話ししました。もとより漏れた点もたくさんあります。加えて私の知識はかくも乏しく、話はかくもつたなく、天気はかくも暑いにもかかわらず、多くの方々が最後まで私の話を聴いてくださいました。たいへん申訳なくまたありがたく存ずるしだいであります。

（1）俠義派の小説、魯迅『中国小説史略』では「俠義小説」と称す（同書第二十七篇「清の俠義小説及び公案」）。

（2）『三俠五義』＝原名『忠烈俠義伝』。百二十回。光緒五年（一八七九）刊。作者不詳。「石玉崑述」と題す。説書芸人石玉崑が得意とした説書『龍図公案』の筆録本（ただし唱詞を省く）である『龍図耳録』（後出）を基礎とした長編小説。

石玉崑（一八一〇？―一八七一？）、道光、咸豊年間に盛名のあった説書（「曲芸」）芸人。字は振之、天津の人。その「曲芸」（民間の説唱文芸を総称してこのようにいう）は、満族八旗の子弟の間にはじまった「子弟書」に属す。

『三俠五義』の通行の活字本に次のものがある。

趙景深校訂『三俠五義』（上海古籍出版社、一九八〇年）

翻訳には次のものがある。

鳥居久靖訳『三俠五義（抄）』（中国古典文学大系、平凡社、一九七三年）

（3）『七俠五義』＝百二十回。光緒十五年（一八八九）刊。兪樾による重編本。兪樾（一八二一―一九〇六）、曲園と号す。道光三十年（一八五〇）の進士。翰林院編修。後年学問研究に専念、三十数年にわたって杭州の詁経精舎で講義をする。『群経平議』、『諸子平議』、『古書疑義挙例』などすぐれた著作がある。『七俠五義』の活字本に次のものがある。

石玉崑述、兪樾重編、林山校訂『七俠五義』（伝統戯曲・曲芸研究参考資料叢書、宝文堂書店、一九八〇年）

（4）包拯（九九九―一〇六二）、北宋の人。天聖五年（一〇二七）の進士。監察御史、天章閣待制、龍図閣直学士、樞密副使に任ず。開封府の知府であったとき、厳正、公平な裁判によって高名となり、伝説化されて多くの戯曲、小説、説書にとりあげられ、清官の典型とされた。

（5）『龍図公案』、『龍図耳録』のこと。百二十回。写本によって伝わる。石玉崑の説書『龍図公案』の筆録本で、そのため「耳録」と題す。そのさい唱詞は省略された。同治六年（一八六七）の写本をもとに傅惜華氏が校訂を施したものに次の活字本がある。

『龍図耳録』上・下（中国古典小説研究資料叢書、上海古籍出版社、一九八〇年）

（6）『小五義』＝百二十回。石玉崑の説書をもととするとされる。光緒十六年（一八九〇）刊。通行の活字本に、『小五義』（漓江出版社、一九八一年、毛水清校訂）がある。『続小五義』＝百二十回。同じく石玉崑の説書をもととするとされる。光緒十七年（一八九一）刊。通行の活字本に、『続小五義』（貴州人民出版社、一九八一年）がある。『英雄大八義』＝五十六回。『英雄小八義』＝四十四

回。『七剣十三俠』＝又名『七子十三生』。百八十回。「姑蘇桃花館主人唐芸洲(とうんしゅう)編次」と題す。『七剣十八義』＝未詳。

(7)『施公案』＝『施公案奇聞』、九十七回。作者不詳。道光十八年（一八三八）刊。施世綸（?―一七二二、泰州知州、戸部侍郎、漕運総督に任ず）を主人公とする事件、裁判物。『彭公案』＝百回。光緒二十年?（一八九四?）刊。「貪夢道人撰」と題す。彭鵬（一六三七―一七〇四。三河知県、広東巡撫などに任ず）を主人公とする事件、裁判物。

(8) 長毛、太平天国軍のこと。洪秀全に指導された農民反乱で、一八五一―六四年の十五年間にわたって起こり、華南・華中にまたがる「太平天国」を樹立したが敗北した。捻匪、太平天国とほぼ同時期に、河南、安徽、山東方面を中心に蜂起した農民反乱軍。教匪、キリスト教徒（教民）の暴動にたちあがった者をいう。

〔訳者あとがき〕

本稿は、訳者が一九八一年に作成したテキスト用の私家版『中国小説の歴史的変遷』（タイプオフセット印刷）を訳文・訳注ともに全面的に修訂したものである。前稿は、『中国小説史略』（人民文学出版社、一九七三年）に付録として収めたものを底本としたが、今回は新版の『魯迅全集』第九巻（人民文学出版社、一九八一年）所収のものによった。

簡単な補注は本文中に〔 〕で示し、訳注は適当と思われる段落ごとにつけた。原文テキストは通行の活字本のみを示し、影印本の類は除いた。翻訳については、今日入手しやすい代表的なものを示した。

前稿では、故猪俣庄八氏および杉森正弥氏の翻訳（いずれも油印の私家版、テキスト用）を参考にした。その後、伊藤漱平氏より次の翻訳が存在することをお教えいただいただけでなく、コピーの恵送を受けた。

河上清・上野恵司訳「魯迅：中国小説の歴史的変遷」（『大安』一八五―一六三号、一九六九年）

上野恵司訳「魯迅：中国小説の歴史的変遷」（『明清文学言語研究会会報』十五号、一九七四年）

さらに今年学研版『魯迅全集』全二十巻が完結したが、次の巻に今村与志雄氏によるものが収められている。

今村与志雄訳『魯迅全集』第十一巻「中国小説史略・漢文学史綱要」（学習研究社、一九八六年）

本稿では以上の翻訳を参考にしたほか、訳注の作成にあたっては、できるだけ今日の一般的な研究水準に沿うようにし、また人民文学出版社一九八一年版『魯迅全集』の「中国小説史略」、「中国小説的歴史的変遷」につけられた注釈、工具書として『辞海』(上海辞書出版社、一九八〇年)、『辞源』四冊本(商務印書館、一九七九―八三年)、『中国神話伝説詞典』(上海辞書出版社、一九八五年)、『中国戯曲曲芸詞典』(上海辞書出版社、一九八一年)、『宗教詞典』(上海辞書出版社、一九八一年)その他を参考にした。

校正にさいして、遊佐徹君の助力を受けた。同君からは、とりわけ近刊の活字本について、訳者の不足を補う、校正の範囲を超えた協力を受けた。(一九八六・十一)